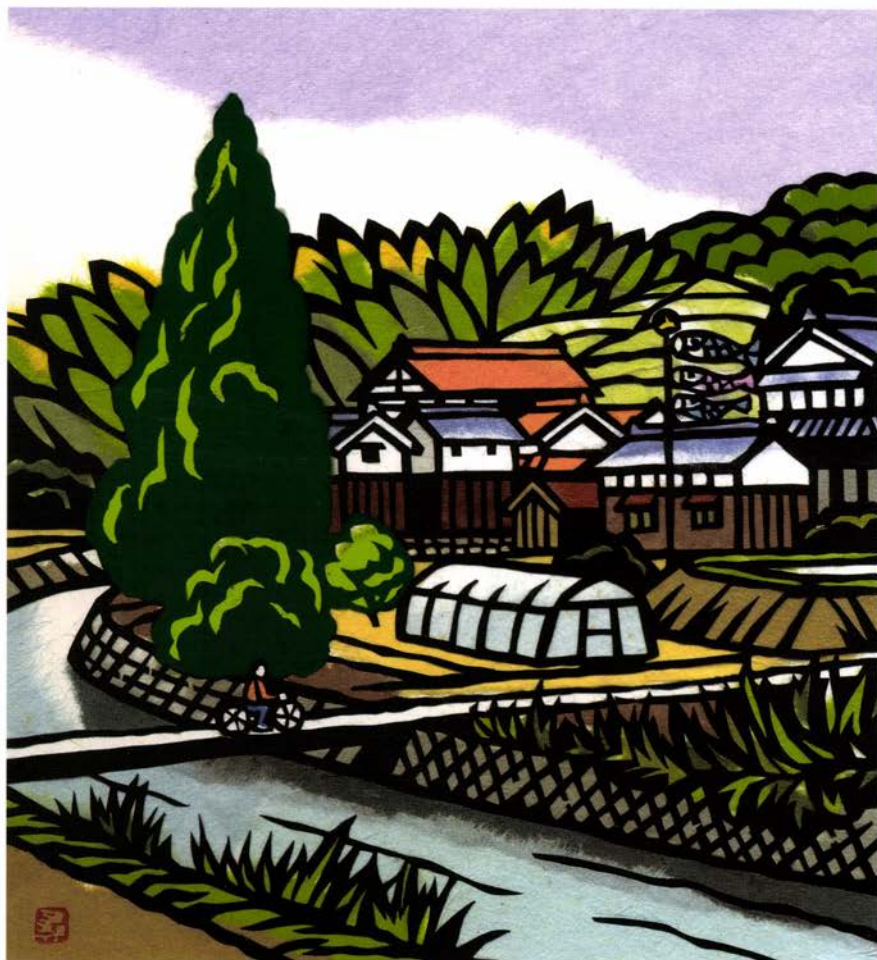


川柳塔

昭和四十二年一月九日第一種郵便物認可
平成二十八年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇六八号



日川協加盟

No.1068

第4回 春の川柳塔まつり誌上大会

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 五月二〇日

川柳塔社

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

花のまわりみち

小島 蘭 幸

を迎えています。

平和の彩で今年も咲いたまわりみち

美智恵

生きている今を桜が咲き競う

東石子

日暮らしに元氣を貰う退院後

れい子

御衣黄が咲いた亡父がほほえんだ

蘭 幸

4月13日の朝刊に、きょうから一般公開、遅咲きの桜美し造幣局〳〵の見出しで、一般公開に先立ち、12日、市内約50カ所の高齢者施設の入所者たち約600人が招かれ、散策や写真撮影を楽しんだ。〳〵の記事が掲載されていました。実は私も、造幣局広島支局より桜見会の招待状を頂いてましたので、ひとりで行って来ました。開園まで少し時間がありましたので、したので、造幣展示室で、近世の大判、小判や、創業（明治4年）間もない頃の造幣局で製造された金貨や貿易銀などを見ることが出来ました。勲章、オリンピックメダル等も展示されていました。私は販売コーナーで、本日の記念として金の葉を買い求めました。

展示室を出ると、〳〵花のまわりみち〳〵は、多くの招待客で賑わっていました。ここ広島支局構内の桜は、〳〵桜の通り抜け〳〵で有名な大阪の造幣局の八重桜を移植し育てたもので、現在60種218本の多くが見頃

〳〵花のまわりみち〳〵には、川柳と俳句の投句コーナーがあります。ここには昨年の入賞者と選者の作品の短冊が大きな投句箱と共に、飾ってあります。昨年の投句数は俳句が四七一句、川柳が三六三句でした。私は、昨年から川柳の選を担当しています。聞くところによりますと、川柳、俳句を投句するため、桜を見に行くという方も多いそうです。誰でも投句出来ますので、来年は是非、〳〵花のまわりみち〳〵の桜を見に来て下さい。

このたびの熊本地震に際して犠牲者の皆様に謹んで哀悼の意を捧げます。また被害に遭われた方々にお見舞い申し上げますと共に一日も早い復興をお祈り致します。

川柳塔社

座右の句

七十路まだまだ女磨かねば

(楓 楽)

私の句

止まるまでひたすら生きる磨きつつ 松 井 文 香

川 柳 塔 五 月 号 目 次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「三木市吉川町」

■巻頭言 花のまわりみち……………小 島 蘭 幸 ……(1)

入って奢らず落ちて腐らずゝ入選句数の在り方……………三 宅 保 州 ……(2)

川柳塔(同人吟)……………小 島 蘭 幸 選 ……(4)

自選集……………(44)

温故知新……………(47)

川柳塔の川柳讃歌^⑬……………木 津 川 計 ……(48)

新川柳鑑賞^{⑤①}……………麻 生 路 郎 ……(49)

水煙抄……………川 上 大 輪 選 ……(50)

橘高薫風句抄……………吉 村 侑 久 代 ……(71)

英語 de Senryu^{⑤③}……………(72)

誹風柳多留一二篇研究 35……………(74)

愛染帖……………新 家 完 司 選 ……(74)

檸檬抄「削る」……………三浦強一・長浜美籠共選 ……(78)

入って奢らず落ちて腐らず

ゝ入選句数の在り方ゝ

三 宅 保 州

川柳句会における一番の関心事は、自分の句の成績でしょう。好成績だと嬉しく、成績が悪く取りわけ「全没」の場合は悲嘆にくれるでしょう。「全没が嫌いだからレベルの高い会には行かない」とか「全没が多いので川柳を止めます」ということを何回も見聞しました。

一方、主催者側にとっては、会のレベルの維持上や会の運営時間上等の理由により、入選句数を多く出来ないという事情があるでしょう。

ところで、一般社会において入選や合格等を決める基本的なシステムには通常「採用試験方式」と「資格試験方式」とに大別されています。「採用試験方式」とは、一定の採用数(人員等)が限定されているもので、多くは事業所等や学校等におけるいわゆる採用試験の類で、キャパシティ一面等で採用数が限定されているシ

民族の詩歌⁽⁴⁷⁾……………

一路集〔配る〕……………

〔自信〕……………

初歩教室「飽きる」……………

川柳塔鑑賞……………

水煙抄鑑賞……………

せんりゆう飛行船⁽⁶⁵⁾……………

インスピレーション・ナビ 印象吟……………

第四回 春の川柳塔まつり誌上大会……………

四月本社句会……………

句会燦燦……………

各地柳壇（佳句地十選／森山盛桜・大内朝子）……………

五月各地句会案内……………

柳界展望……………

■編集後記（ひとこと／松本文子）……………

三好專平……………	(81)
黒岩靖博選……………	(82)
玉置当代選……………	(83)
山口光久……………	(84)
安土理恵……………	(86)
坂上淳司……………	(88)
新家完司……………	(89)
大西泰世……………	(90)
岩崎眞里子……………	(118)
五月各地句会案内……………	(119)
柳界展望……………	(132)
朱夏・まつお……………	(136)

座右の句

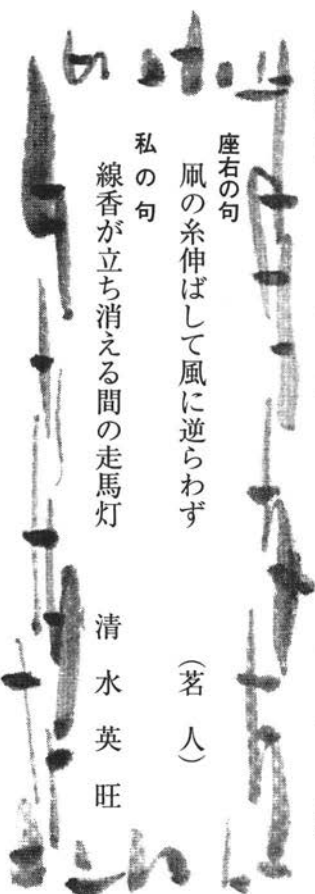
風の糸伸ばして風に逆らわず

（茗人）

私の句

線香が立ち消える間の走馬灯

清水英旺



システムです。川柳の入選句数も、この方式に準じている主催者が殆どです。

一方、「資格試験方式」は、一定の能力を有すれば何人でも合格出来る方式です。例えば、運転免許試験や各種の資格試験等です。この方式では一定の合格基準に達していれば人数に関係なく全員でも合格できる制度です。逆に受験者全員が基準点に達していなければ、全員不合格にもなるのです。

川柳界では殆どが入選数を予め限定している採用試験方式なので、参加者が多くレベルの高い大会等では全没の悲哀を味わう人が多くなるのです。

異色の例では、川柳展望社さん等の大会では、入選句数を「選者一任」という英断をされています。また、私が代表をしている結社では、兼題については全員が各一句は入選制を採り、五客も三十句も採る制度を半世紀も前から採用しています。

一長一短はあるでしょうが、少なくとも一律に線引きしてしまい、良い句を落としたり、全没者の山を築く大会等は一考をできないものでしょうか。



小島蘭幸選

大阪市 栃尾奏子

五月晴れ君が生まれた日の様だ
美しくなつたね振袖が揺れる
迷つたら真つ直ぐ前を向きなさい
三日月よあなたも孤独抱いている
しなやかに女は何を庇うのか
愛されていないと月は輝けぬ

桜井市 安土理恵

カフェインと少し背のびをした春よ
晩年の亡母と同じ咳が出る
やさしい言葉誰かに使い果たしたか
わたくしの立場運命と言ひ聞かす
朧月千金の酒交わしたし
しばし妖界「まぼろし」という酒と

紀の川市 辻内次根

猫電車母電車の春の駅
早起きは杜のカラスに負けている
階段があれば躊躇いなく登る

眼を閉じた時と違つた開けた時
私の世界で揺れている私
正眼にとると背筋がまだ伸びる

堺市 栗原道夫

色町の煙草屋さんの薄暗さ
猫たる所以ああ渾身の大欠伸
胆力が据わっていますかたつむり
大根をおろすだんだん向きになる
ルービックキューブのようで案内図
たましいが喉に来てますホントです

松江市 松本文子

旅よりも寝ている方が好きになり
廃止反対私一人の路線バス
さよならは私の為に言っている
平等と言われ不満に耐えている
まだ私の宛名も多いポスト待つ
黙っているが侍魂持っている

松江市 石橋芳山

魔線が延びて相手にされてない
ふるさとを描くクレヨン of 黒色
それらしい形で俺になつてくる
さよならが3番線に入ります
逃げる水触れることすら許されず
うぬばれにとことん赤を独占す

西宮市 西口 いわゑ

空青し骨折り損と思うまい
ぶらり散歩芽吹き of 音を聞きながら
落ち椿女 of 園を見る如し
曾孫抱く年を重ねたご褒美に
花のある窓辺でお茶にする至福
雛の前娘とアルバムを繰りながら

岡山市 丹下凱夫

紅梅白梅二月があつてなく過ぎる
世の中にやニヤツと笑う猿もいる
晴れ晴れ晴れ三日つづけている日記
伏見稲荷の鳥居をくぐりぬけて春
さくらのころに姥捨山を見に行こう
少年が跳んだところから発芽

和歌山市 木本朱夏

しばらくは病人という身分です
消灯九時長い戦が始まるぞ
お見舞の花 of 最期を見届ける

ひとりではない介護士のやさしい手
赤ん坊の泣き声がする懐かしさ
未完の絵何枚描いて赦される

愛知県 早川遯行

隣国はあまいボールを見逃さず
爆買いへ多少のマナー目を瞑り
ゴミ溜めて近所の人を怖がらせ
持ち込みは遠慮下さい酒ビール
反対の意見もあつていい会議
年金日夫婦の会話無事戻り

枚方市 伊達郁夫

今日もまたゆとりを呉れる花を買う
年金の枠で自由を食べてます
長生きに一病呉れた仏様
シルバーの自慢話に沸く湯舟
囁きを送り波紋を待っている
暗証番号忘れ一歩も動けない

沖縄県 森山文切

とほとほと節目を通過してしまふ
病名をはぐらかされているほくろ
ハローワークに紫外線注意報
不惑前後のページだけ焦げている
十五年振りのアイスの当たり棒
わたくしを開いた妻の瘦せた指

鳥取市 河川無限

にんげんの弱さを包み込む和音
膝小僧抱いて格差に耐えている

飲めない知ってマークを外される

私と遊んでくれる天地人

愛というテーマを抱いて病む地球

野の花の笑顔をもろうお仏壇

大阪市 谷口 義

花粉症になったけれども気は強い

成り行きがときどき解けそうになる

わたくしの描いた地図では行けません

桜には関係がない金利ゼロ

さくらが咲いたようだがねばならぬ

父がいた母がいた桜が咲いていた

倉吉市 牧野 芳光

シャボン玉が生まれる三月になると

お互いに賞味期限は切れました

スナックの金魚が腰痛になった

B面の方に好みの曲がある

葬儀場で会って話が弾みだす

タイムイズマネーは言わぬ過疎である

さいたま市 星野 育子

近所をひと廻り猫のパトロール

服三日吊して断捨離を決める

オノマトベにもそれぞれにある音色

揉め事はガラガラボン切り抜ける

人生に勝ち負けはなしグウチョキパー

子どもにあなたと呼ばれて落ち付かず

鳥取市 岸本 宏章

フクシマの反省猿に負けている

砂嵐黄砂の里を思い遣る

交替で働くという蟻の知恵

重い物は宅配で買う老いふたり

人様に自信持たせた僕の唄

家の名を刻まぬ墓碑が増えてきた

大阪市 宇都 満知子

震災の御霊はきつと千の風

春が来た花粉セットでやって来た

帰宅後は心開放して素足

はつづが好きですシャキシャキは苦手

旅さなか無料の足湯でほっこり

涙する場面も同じ老い二人

犬山市 金子 美千代

今日のミス笑い話にしてしまお

頑張った私をほめてやるワイン

四姉妹のおしゃべり母の三回忌

二十余年亡母の年までしんどそう

締切りに集中できる雨もよし

暇そうなポストぽとんと札を言い

京都市 清水英旺

透析に行く妻シャキッと背を伸ばす
ネット社会だんだん人が悪くなる
耳鳴りがモーツアルトの邪魔をする
アルバムは血が通つて捨てるられぬ
まな板にのせたい輩たんという

京都市 藤井文代

アンテナをあちこち立てる嗜好き
二足の草鞋履いたばかりによく転ぶ
ピンク着たら女だったと気付かされ
毛染に化粧鼻は高くになれぬまま
「何もおへん」に本音をさがす京言葉

京都市 榎本宏子

祭日は年金族の休養日
認知症ころの内をよむ介護
五回目の出雲大社でまだひとり
孫の声元気になると言うておく
ご開帳仏の本音聞けるかも

京都市 三宅満子

ドライバーの体調を見てバスの旅
飲みこんで賞味期限を確かめる
マスク姿風邪か花粉かお忍びか
久々に身内が揃う夫の忌
三回忌仕上げの膳に進む箸

長岡京市 山田葉子

かすみ草にも言いたいことはあるのです
マドンナの出番華やぐクラス会
言うてほしい家でもたまにありがとう
いつのまにか一族の中最年長
遊びたいからまだお迎えは要りません

八幡市 今井万紗子

足もとをそつと照らして一歩踏む
手習いに少しの進歩水温む
よう笑ろた笑いすぎたか昼の席
ほんわかムードお茶にしますか外は雨
速き人着く当てもない切手貼る

大阪府 桑田ゆきの

皮膚炎がまさかの隠れ花粉症
招かれて胸の振り子が騒ぎ出す
ドーピング選手毒舌吐いている
招かれて畏まつてる野点傘
法話聞くくしゃみ一つが座を乱す

大阪府 野田栄呼

嫡男が家を離れて春さみし
次々と異彩を放つ子の変化
おしゃべりが大事と脳を活性化
悲喜こもごも支配されてる五七五
贅沢は私の手からぼとり落ち

大阪府 米澤 俣子

大阪市 江島谷 勝弘

老いふたりはっこりお茶の雛あられ
歳とつた雛よあなたも同い年

ハザードランプ今免許証返す時

行くあてもないのに信号機の青

穏やかなひと日神々しい夕陽

大阪市 池上 清治

雛祭り芽を出す桃の花を添え

自腹だが年金様で暮してる

妻が作る食事で命つないでる

ケーキを作り届けてくれる孫が好き

川柳会嫁の車ですべり込み

大阪市 井丸 昌紀

スマホ流行つて子らの心は荒れてゆく

ひと言も喋らずスマホ見詰めた日

禁煙三年ちよっと吸いたい時がある

機転利く男をちよっと持て余す

迷信がひとつずつ消え都市砂漠

大阪市 内田 志津子

リハビリに優し厳しい声が来る

近頃は両手いっぱい花さげて

近すぎて大事なものを見失う

そのうちに飲もうはないと心得る

強面の夫笑わす術がある

家康の歳になったがさっぱりや

すんまへんすぐに私情が出てしま

前の人ボクの十八番を歌いよる

心には鬼が数匹棲んでいる

風呂好きだが心まで洗っていない

大阪市 榎本 日の出

どう見ても魔女には見えぬ丸い鼻

ライバルに負けて気持も軽くなり

定年後ネクタイだけが放つとかれ

悔いのないよう遊びには精を出す

百二十万のつて見たいな七ツ星

大阪市 榎本 舞夢

すべり込み就活決まり孫に春

八十路過ぎ元気な内と旅プラン

古い服今風に着る難しさ

ウオーキング名所めぐりを楽しんで

若者と一日過ごすリフレッシュ

大阪市 大川 桃花

始めたら容易に戻れない戦

金持もわたしも一緒髪が減る

福島の桜せつない程きれい

百歳のコラムに落ちた目の鱗

国家資格人格保障していない

大阪市 奥村 五月

政治屋の落度さがしの週刊誌
12桁ナンバーよりもほしい金子が巢立ちベットの天下子沢山
生命線あてにはならぬ医は進歩
貯金残減るが薬は増やされる

大阪市 笠嶋 恵美

鳥が来る赤い実笑いあかんべえ
介護5の夫可愛いと言う天使
塵ひとつ無き境内に答えあり
盆梅展苦節百年紅枝垂
大学院孫の努力に神仏

大阪市 川端 一步

誕生日来れば盤寿という誉れ
文化の粹上方芸能いつかまた
休肝日ペンも進まず句も出来ず
通園の列にもらっている元気
父子ランそつと後で拍手する

大阪市 熊代 菜月

いたずらをみんな知ってる古机
愛ゆれて心二つに染め分ける
貴女にも私にも来る春だより
流し目でポーズ決めます初舞台
友からの誘い待ってる電話口

大阪市 古今堂 蕉子

脳みその刺激にたらずゴマ油
いつの間にか私が言った事になり
音楽会五千円分寝てしまふ
ぬるま湯に浸かりスマホを友にして
煙幕をはる必要もない齡

大阪市 小谷 集一

親切に囲まれ脇が甘くなる
脳みその錆を落としに行く句会
独り言口をすべって出た本音
ワンランク落とすと楽になる余生
ケイタイに喜怒哀楽を保存する

大阪市 近藤 正

十八歳その一票が世をただす
大切な話途中で電池切れ
早や五年被曝の街に咲くサクラ
何しても気が休まらぬ休肝日
国境も戦火も見据え渡り鳥

大阪市 坂 裕之

犬よりも人気があると猫闊歩
春一番聞こえはいいがきつ過ぎた
自慢するものがないので笑つとく
前に行く先輩の背がばやけだす
それらしく遣つてはいるがミスが出る

大阪市 佐藤 忠 昭

春が来た青春切符のシーズンだ
持て余す時間あるのにヒザ痛い
退職後キャンピングカーは夢だった
やけくそでハワイに行くも泳げない
月三度美人ナースが待つ内科

大阪市 田 浦 實

すてきな老い誰も呉れない創るもの
持ち時間無限大だと阿弥陀さま
マイナンバー隠しあつて家族でも
八百万の神が見ている嘘つけぬ
無為の時すごす豊かさ老いの幸

大阪市 津 村 志華子

恙無く幸せでした夕あかね
麦畑父の影かも揚げひばり
虚と実のはざまで揺れている右脳
アイスクリームうつの欠片が溶けてゆく
フルーツパフェ奮発をして誕生日

大阪市 津 守 なぎさ

旅ブラン声はずませる長電話
お水取りクライマックス春踊る
民泊に揃う外人でかい声
乳児泣く声まぎらわし猫の春
天神さんお礼まいるの日取り繰る

大阪市 寺 井 弘 子

偶然の君との出会いそして今
ありがとう素直な涙母子手帳
ホームステイアメリカ近くなるメール
産声に涙あふれてママになる
絵手紙が春一番を連れてくる

大阪市 寺 本 実

熱冷めて妖精の君人になる
引き出しの奥ひからびた青い羽根
割烹着本のテーマは自己弁護
せかせかと稼いでお国にあげはった
厚化粧省けば人が気づかない

大阪市 原 田 すみ子

俯瞰すれば一本道で進んでる
手ぶらでは行けず帰せぬ親の愛
蟠り溶けていくよう日向ぼこ
未来予想図年金相手では暗い
若さは戻らぬが熱情は戻る

大阪市 板 東 倫 子

大屋根で四方をにらむ鬼瓦
やんわりと痛いところを衝く姑
笑い事じゃないよ花粉を飛ばす国
責められて女性大臣たじろがず
春愁や老猫膝で眼をつむる

大阪市 藤田 武人

出張があるとおかずがひとつ減る
遺影連れいつまでも一緒に遊ぶ
将来の夢に縛られまたバイト
妻偉大あれこれそれを訳します
ポケットにはレシビ広がる割烹着

大阪市 藤原 千恵子

つまずいた額の傷が光ってる
来世は孫と戯れ暮らしたい
バイオリン奏でる少女おとな顔
当たってるコンピュターが手相みる
雪祭りペンギン歩き腰痛む

大阪市 伏見 雅明

アリバイに八つ橋を買う京土産
コーヒーをホットで頼み冷めて飲む
お願いと言われて力むジャムの蓋
二人分機転の利いた人と住む
手と足を取って仕込んだ途端辞め

大阪市 平嶋 美智子

スポーツ放映叱咤激励大声で
あい槌でテレビと遊ぶ一人膝
あの方の顔色よくて安堵する
青空にふっと目覚めた春の精
寒暖に寝たり起きたりうちの春

大阪市 升成 好

風紋という無作為の美しさ
蹟きのどれもが生きて来た証
感激がことばにならず肩を抱く
驚きに歳の差が出るリアクション
攻めるより守る老後がむつかしい

大阪市 松尾 柳右子

ふる里へ思いはせると戦有り
戦争が風化して来た良い時代
海外へ出掛ける平和若い人
大学を選びほうだい受験生
梅林にカメラ持つ人世界的

大阪市 山本 加お里

百均の傘まあええか諦めよ
寿命延び年金ぐらしどないしょう
神さまがおまけをくれた介護です
ほほえみがこだましている二人の輪
許さねば闇のトンネルまだ抜けぬ

大阪市 吉内 タカ子

誘い来る亡夫の夢で目を覚ます
大和路の気晴らし旅は柿たわわ
犬と鳩仲良く餌を食べる庭
四回目命日独り趣味を抱く
体調を身の丈だけに予定くむ

大阪市 若本 安代

空元氣優しい声にふと涙
知らぬ道通りて違う風に会う
温もりの伝わる杖が欲しくなる
人混みに世間の音を聞きに行く
沈丁の香りで気付く春の息

堺市 奥 時雄

原発を人質にする電気料
おかしいと思った石油枯渇説
車増えなのに給油所減るばかり
爆買いの人波バブルかも知れず
ギャンブルとゲームの区別つかぬ馬鹿

堺市 柿花 和夫

煩惱を持て余してる木の芽時
天婦羅にされたくない路の臺
大胆な暴露で和む偲ぶ会
道の駅キュウリ真面目に曲がつてる
気儘に生きるこれが案外楽じゃない

堺市 加島 由一

雁風呂の民話宿から海が見え
春めいたファッションになる犬の服
ホワイトデー義理じゃないのが五つある
勝負眉引く時妻は口きかず
まだ酒がうまい神様ありがとう

堺市 源田 八千代

DNA夫の夢を孫繋ぐ
学者肌でおでこの広い人でした
だだっ広い家にガラクタ溢れてる
身内が側に来て安心の新年度
カラフルなバフエトリオで集うテイルーム

堺市 齋藤 さくら

彼岸来る度に思い出遠くなり
おない年若く見えると妬いている
塾通い孫はせつせとこなしてる
父ちゃんの軒聞いたらホツとする
しあわせな友の話が噛み合わず

堺市 澤井 敏治

落暉背に下校の子らに母の笑み
そろそろとつばくろを待つ過疎の村
退職の記念時計は止めたまま
洗濯物のかたちに仲のよい家族
マージャン胼胝消えて出てきたペンの胼胝

堺市 遠山 唯教

深夜ふと妻の寢息で安堵する
生きる術つかんだ孫よおめでとう
手のかかる尽くしきれない夫である
真夜中のカーペンターズこちよい
一徹と孤独の影がせめぎ合う

飛ぶ鳥を落す男が地雷踏む

堺市 内藤 憲彦

この男ここで許せばダメになる

最期までベストで臨むこの命

もう少し糞虫で居る春の床

水仙が知らん顔して咲いている

堺市 村上 玄也

吾輩は猫陽だまりが好きである

日記帳に何も書くことない日なり

人殴る拳は持たぬ平和主義

小説は文庫本しか買わぬ主義

図書館へ新聞読みに通つてゐる

堺市 矢倉 五月

風は雲わたしは落ち葉掃いてます

気がつけば友もリュックを背負つてた

位牌からエールを貰う大会日

情深い友に真心返します

羨しいけれど妬んではいけない

池田市 栗田 久子

蓋取ればほわっと匂う豆御飯

薫風にすべての迷いふつきれる

いい人と言われしつかり応えたい

柔らかなムードわたしに心地よい

物欲もすべて無くさず生きている

老夫婦小さな嘘を許し合う

妻に折れ程よくバランスとれている

実るあてないが野心はタンとある

一人居の血圧計の電子音

旅のポスター無人駅にも貼つてあり

和泉市 横山 捷也

新人の緑風香る入社式

乗り切ったスランプ朝の茶が旨い

癪持ちのように世間のバツシング

もう済んだ明日へシナリオ練り直す

検査値が努力足らんと叱咤する

茨木市 藤井 正雄

実力差棚に不運と悔いる酒

菌車の一つと悟る独り酒

ちっぽけな事よと海に諭される

退院の朝に届いた見舞籠

立場上なにも言えない奥歯噛む

大阪狭山市 矢野 梓

ハードルをしつかり越えよ初背広

花便り未だ未だ仕舞えない炬燵

診断を待つ間の会話上の空

八十路坂想定外の日日つづく

苦も楽もあつて夫婦の長丁場

貝塚市 石田 ひろ子

老人の矜持忘れぬ薄化粧

日脚伸び畠仕事も気が緩む

食事会マスクを付けた友ばかり

おたやんの面外せない淋しがり

気苦労が脳の老化を阻んでる

河内長野市 植村 喜代

先だった娘に今日もありがとう

はる君強くなつてね両親なくても

わかつてかわからなくてか笑顔ふりまいて

老いるとは諦めることもかもね

何も話さずに逝ってしまった娘

河内長野市 大島 ともこ

まだ熱くなれると知った老いの恋

プレゼント攻勢も恋成就せず

恋の訪れ目元口元ピンと張る

薫風になびく黒髪眩しくて

微笑みがきつと幸せ連れて来る

河内長野市 梶原 弘光

力むから益益壁を厚くする

さえずりの練習ひばり余念ない

一笑に伏した迷信引っ掛かる

旨い空気吸うのに格差なんて無い

コンビ結成50年よくもまあ

河内長野市 木見谷 孝代

もやもやは草引きすると消えている

優しさに仕舞った涙堰を切る

息遣いで君の調子がすぐわかる

お茶の席母の着物が初デビュー

スランプにどっぷりつかりエラ呼吸

河内長野市 黒岩 靖博

くぎ煮配る誉められ配るまた配る

主婦かわり盛り付けかわり味かわる

赤兎でも払っています消費税

四月馬鹿魔振りむく隙に嘘

鍵のない田舎暮しがなつかしい

河内長野市 坂上 淳司

終戦の日も飛び立った特攻機

グラマンが僕を狙った遠い夏

無辜の民の霊にも深謝両陛下

二つと無い命メンテを怠らず

五黄の寅の亡母は亡父立てていた

河内長野市 谷 久美子

惚気話聞いている暇はありません

ピリオドを打って感謝の靴磨く

かあさんの足より太い肝つ玉

暗闇と貧乏越えた歴史の苦

今日のうつ全部流した仕舞風呂

河内長野市 辻村 ヒロ

老いてゆく我が身をやつと自覚する
ネジ巻いてヨイショ前進案しもう
年齢に後期の輪っか掛けられる
イントロにいつも遅れて走り出す
老人会輝く話過去自慢

河内長野市 藤塚 克三

願わくはたまには気まま思うまま
身の丈に合った二人の小宇宙
休肝日空びん見たら不整脈
仕舞風呂メ切り迫る句にのほせ
男のロマン尻敷かれるも胸に秘め

河内長野市 松岡 篤

居酒屋へ愚痴をこぼしに回行道
従っているかに見える偉い妻
イエスマン退職してもイエスマン
誕生日カレーで祝いた昭和
下げられた皿に残っている未練

河内長野市 村上 直樹

熱燗に目刺しで今日もご満悦
被災地にもいのちの芽吹き水ぬるむ
免許返上さらさらする気なく八十路
力むのは止めた歩幅もマイペース
重罪と云われるほどに生きてやる

河内長野市 山岡 富美子

わたくしに陽だまりがある友がいる
鎮魂歌まだ句読点打てぬ海
液状化ボディースーツの型崩れ
梅さくら鎮守の森も饒舌に
風花が舞っても友はかえらない

河内長野市 山室 光弘

縄のれん愚痴が肴のコップ酒
ウエストも態度も太くなった嫁
ドジですが始末書書けばうまいもの
延命を断る人がドクターヘリ
格安はどこかに無理がひそんでる

岸和田市 岩佐 ダン吉

殺す死ぬ戦遊びじゃありません
夢追って今に私の道になる
隙見せぬ男も肩が凝るらしい
ころころと総理の舌も器用だな
遠景の中でも僕は荒れている

岸和田市 雪本 珠子

レンタルの本に誰かのラブレター
一枚の写真思い出されて来る
林住期あちこちのネジ緩みだす
お互いに刺激しあえる友が居る
空元気体は無理と言っている

四條巖市 吉岡 修

月天心あと戻りせぬ決意です

その度に皺も白髪も増えてきた

夢いくつ一人ぼっちで食べつくす

ほんものもありますメイドインチャイナ

シングルを夢見たクラブ錆びたまま

吹田市 太田 昭

咲きほこる梅にお世辞を言つてやる

老いの身に儲けたような閨年

命のスペア冷凍保存する未来

刃こぼれをしてからヒトの貌になる

八十二歳まだ若いぞと百二歳

吹田市 大谷 篤子

春はそこなのになに小雪が舞っている

生き方は下手でいいんだ父母の声

夢さがし下見に出かけるケアハウス

こけそうでこけないゆらゆら歩いてる

書き取った記憶あるのにメモがない

吹田市 木下 敏子

玄関に椿一輪活けて待ち

姉が来た庭の白梅満開に

桃活けておひとり様のひな祭

葉の花はまだやわらかい蒼です

春が来ても隣の窓はまだ開かず

吹田市 須磨 活恵

平凡な私努力は惜しまない

一枚の女のウロコへばりつく

春うらら命抱きしめ日向ぼこ

テレビ消すたちまちしじま夜の海

三月の雫に老いは老いのゆめ

吹田市 野下 之男

テレビ見て胸がつぶれるわが生地(台湾)

名門が売られる時代淋しいね

米寿だよ良いか悪いか妻に聞く

お散歩で仲間が増えぬもどかしさ

猫だって大きな顔の時が来た

吹田市 山本 希久子

老骨を支える恥じらいのこころ

両端で支えてくれる嫁娘

いつまでの命と思う顔洗う

皿洗う身にワンプレートの晩ごはん

人間に鈴マイナンバーを配られる

高石市 浅野 房子

赤飯をたいて届けてくれた人

私にもこんなやさしい友がいる

春場所だ琴奨菊を応援す

久し振りカレー作れば三日持ち

テレビには美男美女だけ出てほしい

高槻市 井上 照子

卒寿坂やはり険しい道になる
難壇の前で遊んだ友懐う

難聴で電話の返事トンチンカン

辛せか時間たつぷりあり余る

インフルエンザ学級閉鎖ひ孫来る

高槻市 指宿 千枝子

産みたての玉子を食べた日の記憶

子守歌口ずさみむくゆで玉子

はるちゃんはおさげの似合う娘になって

程ほどの遊びも入れる家事雑用

日向ぼこにうとうとうとの車椅子

高槻市 片山 かずお

平凡で元気がいいと子を諭す

ばあばの財布孫の笑顔ですぐ開く

羨望の目でずっと追う長い脚

あつさり春にさせるものかと戻り寒

生温い空気がボクの性に合う

高槻市 島田 千鶴子

窓閉じる冬の日暮れは寂しくて

亡姉は亡母に会えたか百ヶ日

雛仕舞う部屋に桃の香残しまま

花だより閉じ籠ってはいられない

フクシマは想定外のまま五年

高槻市 初代 正彦

挫けずに生きた証のデコの皺
スニーカー履くと猫背もしゃんとする

里へくる猿追ひ回す人のエゴ

有難う今日は何回言えたかな

畑にも雀が来ないちよつと変

高槻市 杉本 義昭

天満宮梅の香りが春告げる

母の日のバラ一輪で映える壺

塩少し今日の命の味決める

駅裏にどっこい昭和生きている

会議室結論先に座ってる

高槻市 左右田 泰雄

ほほなでるこの風はもう春の色

うぐいすに声かけられて立ち止まる

虫めがねのぞき新聞斜め読み

やわらかい心で支え合うくらし

雨傘を杖にバス停まで歩く

高槻市 富田 美義

口下手を素敵に飾る妻の笑み

再発をしたらその時や腹決める

グチを言う妻に戻ってホッとする

移り気な妻の手に乗る気まま旅

ほっこりの笑顔の下にある気丈

高槻市 富田 保子

こつそりと胸躍らせて糸を解く
低俗なテレビが奪う主婦の余暇
親の歳越えた頃からあちこちが
介護補助で出来る幸せボランティア
親子連れ人生学び縄のれん

高槻市 原 洋志

言い訳を二人から聞くアメリカン
ありったけの言葉でバンク修理する
散歩道ポケットのない服まとい
肩の力抜きすぎたのか風邪を引く
払えどもくつついてくるでもだつて

高槻市 安田 忠子

朝日浴び美味しいお茶を飲む和室
一日中静かに過す今日は雨
風さわぐ白波眺め露天風呂
かな文字のすらすら読めぬ書道展
また一つよわいを重ね坂上る

豊中市 池田 純子

被災地のまだもう五年切なくて
また来年指切りをしてお雛さま
孫の背は五人囃しと同じ段
母の忌は穴子のお寿司決めている
働く手ほとんどん母になつていく

豊中市 江見 清

でかい傷かかえて男丸くなり
眉に皺笑いのネタが浮かばない
人相を見て人相を見てもらう
向う傷癒えて気力も萎えてくる
足りてると思えばそんな気にもなり

豊中市 藤井 則彦

無駄骨は折つてもいつか報われる
職退いた日から寝息はリズムカル
番長の人生変えた注射針
逃げ道はすぐに見つける野良の猫
タクト振る巨匠に楽器まで震え

豊中市 松尾 美智代

そこここに芽吹いています冬木立
五十年まだ発見があるふたり
人並の人相ですぐ忘れられ
詰めが甘く中途半端で終る癖
布団の温みただ幸せを噛み締める

豊中市 松村 里江

世界遺産旅券不要のテレビ前
ラグビーのルール覚えた五郎丸
一ツ事願つて巡る百度石
やすやすと難関突破お赤飯
夢一杯片道切符で参ります

豊中市 水野黒兔

くねくねと道が曲がればやがて里
挑んでは未だ読み終えず罪と罰
レジの娘の笑顔が今日を吉にする
やがて喜寿星の王子さまを読む
金曜は燃えるゴミの日花買う日

富田林市 片岡智恵子

飛べそうだとべぬ八十路の水たまり
生き過ぎたかなよう生きたねとこの命
遊ぶ友今年も減った寂しさよ
好きな方の前で私は貝になる
十字路口に立てば聞こえる亡父母の声

富田林市 関よしみ

真相に素足で一步步つ進む
からし和えツンと来て初夏母の味
囀りに私も白い靴で出る
ねむる子にそつと春風の囁き
縁側で足ぶらぶらの日向ぼこ

富田林市 中井アキ

能面に隠すある日の破裂音
柵のひとつつの愛と老い支度
心の襷に逢いにきたのは揚げ羽蝶
アバウトに生きて嫉みは残さない
自画像はいまだ完成とはいかず

富田林市 中崎深雪

晴れた日の梅園そこは夢の国
難病と嘆いていても始まらぬ
大笑いメニユーにパーキンソン友の会
意外なものよく見えてくる車椅子
自然体で散りたい花も私も

富田林市 山野寿之

長椅子の端が落ち着く指定席
筆まめの答返つて来ぬ不安
お節介ししたりされたりして夫婦
プレミアムちよつと贅沢記念の日
孫と居るご機嫌なのは三日程

寝屋川市 富山ルイ子

古里で教えてもらうお福わけ
お福わけ何ときれいな言葉聞く
アイスクリーム一足とびに夏も来た
恩送り出来るうれしさありがとう
徳を積み天国に行く用意する

寝屋川市 平松かすみ

会合の翌朝信じられますか
半世紀お付き合いして先逝かれ
予約するショックで痛む胃の検査
わたくしの何時何時が怖くなり
何時へ隣近所と手を繋ぎ

寢屋川市 森 茜

楠はどっしり産土神となる

浮雲を見やってみの虫のぶらり

そしらぬ振りしている頬のびつくびく

梅匂うメモありぶらり寄りました

美容院出てひんやりと雛の風

羽曳野市 安芸田 泰 子

冬將軍が屯している橋の上

明け易し覚めるに惜しい夢を見る

一人居のだんまり破る大くしゃみ

電話口亡夫の声は息子から

沈黙を解いた桜が騒がしい

羽曳野市 宇都宮 ちづる

梅林の香りも飛ばす春一番

冬と春タンスに並ぶ寒暖差

尖ったらトガッタ返事だけが来る

秒針の音で目覚めを整える

4Bの減ったほとんど没句なり

羽曳野市 徳 山 みつこ

亡夫に想い届けてよ揚げひばり

子が帰る一氣に磨く風呂トイレ

のろまです呆ける身分にまだなれぬ

再稼動やめます値上げいたします

列島の火傷そのままレンゲ草

羽曳野市 永 田 章 司

番組の好みが違う妻と僕

断捨離は愛着を断つ大仕事

偏差値が子供の未来決めたがり

落し所玉虫色の妥協案

バランスを崩し地球が病んでいる

羽曳野市 藤 原 大 子

私だけのノルマで今日が動き出す

迷い癖ハズレばかりを選っている

働かぬ蟻はストレスないだろか

忘れ物ないかこの頃気遣われ

健康は宝と若い人に説く

羽曳野市 三 好 専 平

銀シャリを食べる教師に殴られた

円本で漱石知った少年期

松根油採って国家にささげたり

軍神を日の丸振って迎えたり

ファシズムの匂いだよう申の年

羽曳野市 吉 村 久仁雄

善い人ねと言われてアカンタレと知る

物足りぬとも幸とも思う無難な日

敵失を祈願ばくには後がない

この星の汚点に人も含まれる

気まぐれで言った言葉が的を射る

東大阪市 北村 賢子

ふる里に五年を経ても帰れない
被災地で生き抜く男の耳ピアス
思いひとしお仮設の春はもう五年
太陽へこぞつて顔を向ける花
スポットを浴びぬ暮らしの青い鳥

東大阪市 佐々木 満作

怠け癖ついてしまった冬の床
悴んだ脳ほぐしてる朝の経
世界の目向けるとちっけな野心
激論を交わし尽くして夜が明ける
被災地のことを思へと子に諭す

枚方市 海老池 洋

平成元禄そんな気をするネコブーム
野党合流集合離散繰り返し
衣替え春の音符になるころ
毎日昼寝これも余生の自由律
脛に傷僕にも欲しい削除キー

枚方市 小林 わこ

カード払いしないがカード持っている
好きなこととして五感ますます調子乗る
聞こえないふりして逃げることにする
オールシーズン着られるものが増えてきた
脇役から主役におどり出る豆腐

枚方市 丹後屋 肇

線量に道路は閉鎖されたまま
我が皺を逆撫でしてる寒もどり
地球儀の速さに迷子増えている
床運動素足の音に惚れている
いのち対命ぶつかる砂被り

枚方市 寺川 弘一

プロマイドだけで良かった片思い
後ろの正面いつもみよちゃん居てくれる
人生はデッサンだけで終わらない
明日というわからぬものに希望持つ
振り向いて見える範囲で生きている

枚方市 二宮 山久

散歩する桜に早いおニュー靴
新聞のチラシが誘う旅支度
登り坂我人生は七十路
コンクール紅のネクタイ勝ちに行く
カラオケと詩吟で老後謳歌する

枚方市 二宮 紫鳳

梅の香に誘われ参るベアシューズ
リハビリのシューズが刻む春の音
サブライズ仕掛けたチョコを置き忘れ
ひな飾り孫を着に二人膳
冬枯れの庭を色どる黄水仙

藤井寺市 伊藤 アヤ子

何も彼も衰えてゆく悲しさよ

落ち込めば自分にハッパ掛けている

この山も越えて来たもう下るだけ

愛よりも手を取り合ってくれる孫

諦めないこん度のリオこの切符

藤井寺市 太田 扶美代

チューリップ愛の形になってきた

後期です少し甘えていいですか

花を買うとても小さな憂鬱に

春の財布に商店街の当り籤

面倒が二つ残ったカレンダー

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

寝そびれて風の言葉も聞けました

カーテンを開けていもうと看取られる

とげのないお花をいもうとと結ぶ

春の花生けて彼岸のお祈りを

次の世で出逢えたときの糸じるし

藤井寺市 鈴木 いさお

春翔ける風の章から花の章

鳩尾の辺りで鬱が動き出す

冒険に憧れ平穏を選ぶ

理想論楽し現実論厳し

日々新た尖った昨日丸い今日

藤井寺市 高田 美代子

点取り虫だんだん嫌な顔になる

気付かない振りでお天道様見てた

男のクセになんて言いたい時もあり

一丁前に雰囲気が好き居酒屋に

ポッペンを吹いて童心にかえる

藤井寺市 田付 絹枝

一人居に手造り一品配る朝

十二桁財布で威張る影法師

共通点あつて微笑む初対面

冬枯れの手入れせぬ花春告げる

年齢聞かれ還暦からはUターン

藤井寺市 津田 シルク

社の辞書に育休の文字まだ載らぬ

遊ぶ相手いない時には辞書がある

古びた辞書で恋と言う字を引く独り

一日中辞書が遊んでくれました

好きな物食べて良いよと言う不安

藤井寺市 増井 ヨシ枝

暖冬に感謝している車椅子

落椿のように余生を終りたし

食べ残し捨てず雀の餌とまぐ

何処から来たのかすみれ満開庭は春

この名前一生ルビをふるのかな

藤井寺市 吉田喜代子

暖冬か風邪も私を避けてゆき
嬉しい日娘が呉れたショールして
傘寿越え御負け人生花ひらく
まだ若い大正生まれ友も出来
自転車修理して待つ春の風

藤井寺市 若松雅枝

補聴器にマイクの声が響きすぎ
ガールフレンド誘う暇無き新社員
五月人形孫に贈った頃が華
ハイヒール履かないままでお蔵入り
腕時計孫が形見の予約する

箕面市 酒井紀華

ペン一本未来を開く狭い部屋
横町に下駄の音する昭和の灯
大家族陣取りごっこセピア色
卓袱台に家族が揃いよくしゃべる
今一度激しくもえるバラを抱く

箕面市 出口セツ子

医者巡りして忙しく日々が過ぎ
外食を控え病人食作る
日々遊び歩く元気が失せて老い
自立してもたまたまに元気な電話欲し
アベノミクス恩恵何もない庶民

箕面市 広島巴子

春雷が殻を破れと鳴り響く
クックルー山鳩になり亡母が来る
友からの手作りの雛はんなりと
ホワイトデー大きめに書くカレンダー
雑草の強さに触れて一万歩

八尾市 内海幸生

葉忌や菜の花に浮く師の温顔
風みどり優しい声で叱られる
淡雪のように倅せ消えたがる
咲き誇る花に倅せ聞いてみる
湯舟から貰う倅せ外は雪

八尾市 高杉千歩

窓あけて万緑の山独り膳
私ではないと思ってる老人会
人生の今日が幸せ老い独り
口で描く絵は何時だって最高だ
ストレスが何にもなくて五月鯉

八尾市 宮崎シマ子

大好きな友ストープとお別れた
辛夷咲く津波で消えた家の庭
桜まつり万端調い咲くを待つ
片足でしばらくならは立てる老い
買う物もないコンビニの籠下げて

八尾市 村上 ミツ子

昭和のはなし聞いている深夜便
考えてまだ歩き出せないでいる
どこで何時逝くかだれにもわからない
見限った後で見直すことだつて
気が付くとしばし眠っていたようだ

八尾市 山根 妙子

雛飾り野の花添えて季節知る
初曾孫あやすと犬が嫉妬する
激動の昭和それでもよかったな
虐待のニュースが続き言無くす
利休下駄偶に素足で穿いてみる

神戸市 上田 和宏

気分良し一つ背伸びの句が出来る
老桜に負けず今年も生きてゆく
運命を決めたおみくじ飾ってる
マイナンバー知らないでくれ僕のこと
眼が合つて駝鳥の唾が飛んでくる

神戸市 奥澤 洋次郎

被曝五年無人の町に咲く桜
御天道様まだ私にもある命
老々の介護だおれに戸が閉る
ふる里を捨てねばならぬ春一人
この宝いつまでもあれ笑い声

神戸市 富永 恭子

逃避行出鼻をくじく雪しきり
底をつきスマイルマークが出てこない
年ごとに柱のキズが低くなる
「あさが来た」日に三度見て三度泣く
火の赤の気持ち量を量りかねる青

神戸市 能勢 利子

畳替え素足で踊るフラダンス
手造りのシフォンケーキは気まぐれで
バラよりも長生きしそうカスミ草
三日目のおでんカレー粉入れてみる
おばあさんと他人が呼べば無視をする

神戸市 福原 悦子

老眼鏡外して脳も一休み
愛着はあるが返した免許証
古賀メロデー胸の中に夫が居る
こんがりと焼けた餅は夫に似る
巡り合い神のいたずらかも知れぬ

神戸市 松井 文香

一度だけ大輪咲かす老いの夢
落ち込めば師のアドバイス胸に咲く
幸せの花咲き乱れ三コマ目
リベンジの花は見事に咲かせたい
新学期弾む会話に花は咲く

神戸市 山口 美穂

寝直して陽に笑われている暇

開花予報隣の桜眺めおり

古雛もうれしそうですちらし寿し

春が来たよーくぎ煮の香りそこかしこ

ランランラン新ランドセル背で踊る

神戸市 山崎 武彦

シンプルな設計聖火台が無い

長生きはしたくないねとよく食べる

春風に誘われ毬はよく弾む

種を蒔く母は素足に聞いてまく

二輦目の隅にあこがれ立っていた

明石市 梶谷 和郎

読みさしのページが明日を予約する

耳触りの良い現役という言葉

老いたとて賞味期限は未だ遠い

句点のない話に猫が欠伸する

月ひとつポッケに入れて帰館する

芦屋市 黒田 能子

ドレスよりエプロン似合うお母さん

気分よく卵ひとつをポンと割る

好きなようにやってみなさい信じ切る

飾りすぎ元の姿が分からない

自由自在に変身できるのも若さ

芦屋市 竹山 千賀子

お好みの色に染めてと白を着る

自制心の影に隠れている天狗

仲違いならぬ程度の自己主張

お茶一杯でグチたつぷりと聞かされる

ろうそくの灯が揺れている語ってる

尼崎市 市坪 武臣

老いてなお長男として生きる義務

その昔鏡に問うたにきび顔

ほどほどの距離を保持する君と僕

スマホより生きた声かけ笑い合う

余熱もつ名前を胸に包み置く

尼崎市 加川 靖鬼

訳あつて横を向いてる花がある

本来の美人還暦すぎてから

白寿まで生きるつもりを磨く

横坐り男の範囲越えている

神木の櫻千年艶姿

尼崎市 長浜 美籠

釣かっこ付け一日を光らせる

姉妹寄り笑い褒め合いくさし合い

この時とばかりに抜きん出た花芽

好きなればこそ温度差も気にならぬ

春ですな膳にイカナゴ豆御飯

尼崎市 藤井宏造

野球帽Tのマークの似合う孫
善人の顔が並んだ露天風呂
笑いの種豊富な友はよく持てる
落ち込めば水前寺清子を歌う
ストレスが胃の腑の底で耐えている

尼崎市 藤岡りこ

願い手を合わせると欲が出る
青い鳥もオアシスもホラ我が家に
ひとつときめき一つ若返る
休日は若者に街譲ります
夢の中私がわたし探してる

尼崎市 山田耕治

鐘が鳴る小学校の桜よし
九十の母に心配されている
感動もなく三キロの米を買う
母さんがずっと待ってた汽車の音
センターに集う平均的老後

加西市 金川宣子

横綱へ浮かれちゃならぬ四股を踏む
幸せの種が芽吹いてきますよう
ことごとく言うた言わぬで日々過ごす
夫って案外しっかりしてたんや
いかなこの春の香りに立ち止まる

川西市 大坪一徳

リタイアの社名引き摺る尾氈骨
反対と言えず逆さに判を押す
過ぎ去れば激流も良し静も良し
先憂後楽もう流行らない生き方か
一億と言われて碌なことは無い

川西市 山口不動

一枚を脱いで快適散歩
心経を誤飲防止に唱えてる
うるう年オリンピックと決めたん
キッチンに妻と嫁いるお元日
名刺なしストレスなしのリタイア後

篠山市 酒井健二

手術慣れウトウト眠り待つ抜歯
歯を抜いて諸行無常を考える
一目でも二十年先見てみたい
ストリート遊子流れる基地の鳥
レジ叩く別嬪の手も荒れている

篠山市 酒井真由

さすが切れ者怒りを表には出さぬ
男来て種も仕掛けもある話
真実の愛が重たいテロリスト
ほっこりと生きるこの世もあとすこし
山桜また山桜旅つづく

三田市 足立 つな子

老春も見果てぬ夢を追いつづけ
まだ舊門出の春が誇らしい
じゃまされず至福の境地しまい風呂
うぐいすが迎えてくれる郷へいく
春彼岸なぜかおちつく墓参り

三田市 上垣 キヨミ

予報士の棒が列島春にする
コーヒーのミルクに暫し芸術家
このままでふわり逝きたい春の床
クイズ観てまた脹らんだ知恵袋
他人事に思えぬ痴呆列車事故

三田市 尾崎 一子

見つめ合う二人の瞳花粉症
おめでとう二十歳の門出親子風
へそくりにはほの花が咲いた春
一人居のへそくり時に場所忘れ
うかれるなふみはずすなよ風の夫

三田市 北野 哲男

梅ほどの勝ち気があれば咲く私
福耳の地蔵に届くホーホケキョ
杖に凭る婦人健啖バイキング
洗濯機止めて笹鳴き確める
ペディキュアの足が闊歩する季節

三田市 久保田 千代

平成の歩幅に消えぬ血の匂い
振り向かず完歩をめざす友がいる
歩幅合う友いて続く万歩計
お互いにふくらみ見せる老いの齢
冬に咲く花を見習う風に佇ち

三田市 野口 晶子

目ざましの律義さ憎い冬の朝
日向ほこ野生の猿に似た寝顔
漬物石がわりに義母がデンとい
すみません恋をしてます杖ついて
バラおくる一か八かの大勝負

三田市 福田 好文

魚だつて漁船探知機持つ時代
父母の命日忘れたままで年を越す
修理屋がリセットボタン押して去ぬ
汗かくと貧乏神が逃げて行く
先祖代代貧乏神と仲がいい

三田市 堀 正和

流石だねこどもみくじはひらかなだ
おめでとう金ならどんと出してやれ
三代目サラリーマンになると言う
菜園の右も左も師匠さん
禁煙も禁酒もせずに喜寿達者

宝塚市 田 中 章 子

西宮市 緒 方 美津子

夫婦だから言つてはならぬ言葉ある

メル友と静かなおつきあい

働くだけ働き主人かわいそう

旬のうち食べておきたい牡蠣フライ

頭から足先までがヨガになる

西宮市 秋 元 てる

よく見たらあてにもいい所あるウッフ

耳遠く内緒話に皆笑顔

この年齢で「異常なし」とは医師優し

「老衰」は理想だが名が無粋

声高なもてなし要らぬ好きにさせて

西宮市 足 立 茂

燃料が残り少ない老いの愚痴

血も涙もある判決に旨い酒

ニッポンの良さを忘れた日本人

失言の謝罪の奥にある本音

ゴネ得に振り回される無駄遣い

西宮市 梅 澤 盛 夫

旅立ちは酒とつまみと文庫本

静寂に包まれ僕は過去の中

血液型聞いて納得する仲間

天変地異これは地球の慟哭か

狡いこと考えながら爪を研ぐ

三月四月嬉し涙を流したい

初土俵やる気張る脹脛

ぎくしゃくも形にすればくぎ煮春

春帽子数珠を持たない寺巡り

生業とする海静かにと祈る

西宮市 亀 岡 哲 子

単身赴任の子から教わる食べること

大雪にたった一夜できた手紙

エプロンのポッケは母の秘密基地

謎解きが好きで長生きしています

父母の歳越えてときどき父母のこと

西宮市 福 島 弘 子

家族葬あの友の死を後で知る

大泣きで気が晴れました食進む

絆生む被災地の松のお地藏さん

くしゃくしゃのプリント見せにランドセル

クールジャパン新聞にまで雨カバー

西脇市 七反田 順 子

うるう年神様からのプレゼント

ピンチからお助けマンは青い空

初音聞く和気藹藹の最中なり

めざし食べ心は何時もリッチマン

泊ってね孫が拍手で受け入れる

姫路市 古川 奮 水

健康で身軽に歩け歌もある
いい話何度聞いても厭はない
退院へ許可の言葉が心地よい
断捨離に時間忘れて陽が斜め
聞き倦きた話がつづく縄のれん

奈良県 谷川 憲

東北の復興未だ震災忌
それぞれに人生がありクラス会
大見出しに買った夕刊薄い記事
死角にいてひょっこり災禍呼ぶ悪魔
アピールの熱血ブレイ二軍戦

奈良県 中原 比呂志

童心に戻り私の歩む道
泣き笑うでこぼこ道の続く道
字のごとく弱い魚で群の中
蟹の泡真つすぐ向うことできず
リーダーのルール破りで世の乱れ

奈良県 渡辺 富子

フレッシュな意見取り入れ再起する
ビルの谷間頑と動かぬ地蔵堂
原点に戻る汚れた手を洗う
長年の夢がようやく芽吹く春
万策尽き流れる雲を追うばかり

奈良県 安福 和夫

喜寿からは早寝早起きニューライフ
江戸時代まねて二食は少し無理
百越えて尚食い意地の亡母の血が
いつまでも青春維持と豪語する
もう歳は禁句リストに入れておく

奈良県 阿部 紀子

石段を息もたえだえ竹生島
無事産まれお礼まいりに中山寺
西国を巡り足腰鍛えられ
人々がモディリアーニの絵に見える
傘寿過ぎ儂がいないと駄目と自負

奈良市 大久保 眞澄

支え合う普通のことが美談めく
終活にいそしむ元気な老人
知り合いが増えてあの世も悪くない
二つ目の心臓の毛がまた伸びた
おトボケが救う激んだ場の空気

奈良市 加門 萌子

日脚伸ぶ何か得した気分する
光芒がきれいな命を実感す
遠出して雛を見に行く元少女
瓜ざねの顔がしっとり内裏様
今日も無事明日の惣菜みつくろう

奈良市 辻内 げんえい

支え合う伴侶いてこそ出る元氣

共稼ぎ陰で支える爺と婆

カード申請少し様子見マイナンバー

アルバム整理見ているばかり進まない

奥へとは言われたけれどワンルーム

奈良市 米田 恭 昌

沙羅ちゃんは雪の妖精かも知れぬ

永遠のテーマ戦のない地球

眼裏に津波暴れる地獄絵図

被災地の明日へつなぐ槌の音

やっと芽が出たか孫にも内定書

生駒市 飛 永 ぶりこ

端整な義姉の棺に琴の爪

花巡り春をぎゅぎゅつと独り占め

しゃきしゃきの新芽わたしも弾み出す

カフェオーレ底の淀みにある本音

三食の菌応えなんとありがたい

橿原市 居 谷 真理子

空がいい行方不明になるのなら

魂に棲んでる鬼も病んでいる

共に生きて瘤瘤の冬木立

潮汁どんと女笑うとき

新しい私のために買うノート

香芝市 大内 朝子

青空へ白木蓮の咲く天使

誕生日包んでくれる千の風

しおらしく枯れているのに茶茶が入る

桃の花胸に咲かせてまだおんな

風みどり老いを忘れているペダル

大和郡山市 坊 農 柳 弘

フィクションを重ね弥生の月に酔う

今宵だけ良い子になってひな飾り

身の程を悟る淑女の宵化粧

見て聞いて食べてデバ地下ひと巡り

もう何も引かぬ足さない春うらら

和歌山市 磯 部 義 雄

もう五年まだまだ五年爪の痕

飼い猫も傘寿迎えて同い歳

洗濯しアイロン掛けて被災地へ

乱作はするが作れず佳句秀句

若い日のレター密かにシユレッダー

和歌山市 上 田 紀 子

茶の心釜の湯加減から習う

聞く耳を持てば世間の眼が変わる

漂流老人いつか私も通る道

裏表返せど熱い母の愛

勢いに任せて恐いもの知らず

和歌山市 喜田准一

開いてるから入っただけの扉
水嵩が増していい智恵浮かばない
タイガース肴に旨い屋台酒
チャンス来るまでは焦らず立泳ぎ
凡々に生きた証を佳しとする

和歌山市 楠見章子

ストックの祝儀袋が忙しい
恋した頃貯金あろうと無からうと
イケメンで美声サービスしておこう
遊び人のイメージ実は子煩悩
逢えそうな予感スカーフピンク色

和歌山市 坂部紀久子

足腰が駄々を捏ねます坂の道
舞扇過去の自慢話する
タイミング嬉しい嫁のおでん鍋
言った言わないそれからの夫婦仲
勝算はなんにもないがペンをとる

和歌山市 武本碧

アレグロの気性も二幕目はラルゴ
フレンチもいいがわが家のおばんざい
可哀相なんて上から目線だね
お義理でも握手した手は温かった
ユトリ口の街でふわふわパラダイス

和歌山市 玉置当代

鉤括弧束縛されてから無口
幸せの尺度は狂わないリズム
ちよつとした出合いが添うて半世紀
ストープでお湯がチンチン沸いている
根拠ない噂を撒いたつむじ風

和歌山市 土屋起世子

さくらのよう散りたい私春生まれ
菜の花がよいしょと春を連れて来た
春なのに整理しすぎて寒い部屋
七回忌まだ俗名に花咲かす
呱呱の声響き絆が太くなる

和歌山市 福井菜摘

カルチャーで前頭葉に活を入れ
おふくろと呼ばれる距離の温かき
初物を食べて寿命をまた伸ばす
喜びを夕餉の膳に盛り分ける
日記帳余白を埋める子等の声

和歌山市 福本英子

口下手の父の手が飛ぶ雨つづき
お人好し顔色ばかり見て暮らす
徘徊を誰も見つけてくれないの
お向いもお隣りも留守一週間
もう五年まだ五年やと母と娘で

和歌山市 古久保 和子

岩出市 藤原 ほか

無人販売の野菜掘ねたり笑ったり
山菜を摘みにおいでと山笑う

衣更えボタン一つが落ちたまま

お洒落していても輪ゴムが腕にある

日本語に置いてきばりをされている

和歌山市 堀 富美子

薔薇に添うカスミ草は私かも

真田丸夫の遺影持ち歩く

捨てたものじゃない私を探す子等

殻破る勇氣試している一歩

首つ丈辞書が私を離さない

和歌山市 松尾 和香

真ん中に曾孫笑っている家族

息子には言えず嫁方引かれゆく

年金の仕分け自分へ褒美出る

結婚に出産孫へ祝う春

自分への褒美と冬のひとり旅

和歌山市 松原 寿子

平安朝のロマンを抱いて雛飾る

心をほぐす柔軟剤つてありますか

牙を剥き猫が時々笑わせる

少しだけ塗り替えてみる人生譜

のんびりと構えて趣味のまだ途中

身の丈の暮らしゆるりと鍋つつく

満ち足りていつか大地の風になる

この坂を登るしんどさバネにする

弾きたいいつも心は燃えている

負けないよ何があっても日は昇る

海南市 小谷 小雪

叩かれる覚悟謙虚な点でいる

春雨に喜びの芽がほころびる

マイナンバー暗唱したくない数字

そのままを認めてくれる海がある

空気にものりしろにでもある重さ

海南市 堂上 泰女

陽光に誘われ探す早春賦

攻めてくりや攻める譲られれば譲る

逢う人の優しさ拾う散歩道

木蓮の清らを浴びて佇もう

農道の下萌え靴に心地良い

紀の川市 宇野 幹子

絵馬の脚試験地獄を駆け抜ける

石段を踏みしめ神に逢いに行く

カタツムリ焦る心はさらに無い

無駄積んだ皺も白髪もみな宝

正面に座り正邪を見極める

紀の川市 北山絹子

鳥取県 石谷美恵子

真夜中の電話脳波を狂わせる
ブライドを捨てた男のシルエツト
コーナーに私好みの本がある
花一輪挿して空気を和ませる
神様に笑われそうな志

紀の川市 楠原富香

煩悩を断てば見えてくる宝
血が通う介護に緩み出す頼っぺ
沈む日を惜しみ全うする命
食卓の大きき目立つ子の巢立ち
産声で我が家に花が咲きました

田辺市 岡本昇

年金の目減り止めとく医者通い
うまいものうまいと声に出して言う
ささやかな夢です老いの恋心
絶妙のバンドで稼ぐ二番打者
羽ばたきが出来ないのです骨粗鬆

橋本市 石田隆彦

魂の灰汁を仏が削ぎ落す
恋心も断たれ嫁いだその昔
欲持たずへいとおきにと小商い
平均の寿命はきつと百を越す
スポットを当てれど暗い拉致の海

忘れるといふ神さまの救いの手
甘さいまいちただ鮮やかな冬苺
占いにたよる大人の迷い子たち
来客があつて片付く家の中
亡姉に似たひとへ思わず席をたつ

鳥取県 岩崎和子

スプーン持ち呼吸合わせて食すすめ
介添えが済んでベットでひと休み
父母きようだい暮した日々を思い出す
北国の屋根から雪の落ちた音
電話せぬあとに淋しさ残るから

鳥取県 斉尾くにこ

来る来ない春待ついまも好きなとき
久しぶり出会えた春を抱きしめる
そのうちに弁天さまになるつもり
泣いたフリいつもあなたが負けたフリ
自然体なのにステキな日記帳

鳥取県 竹信照彦

寒暖の差に踊らされても負けぬ
三千で汗の出る日と五千歩と
積雪の無い山陰の冬になった
寒梅がしほむと僕のようになる
東北も僕も復興まだ途中

鳥取県 西谷悦子

来た道はいつも真剣歩み来た
薬を飲めば少し治った気分する
人並と思うがこれが難しい
国会はいつも喧嘩をしてるよう
お裾分け貰って晩酌の気分

鳥取県 細田裕花

早々と花粉をキャッチしたマスク
駐車場私の車どこだろう
カタカナ語不明進むに進めない
下書きをしばし発酵させておく
節目付け一本の木になっていく

鳥取県 松川行男

まばたきを忘れた妻の一人言
あのみやげどこで買ったか追憶だ
雪中の晴れ間に君の石碑撮る
生きるのに創意工夫がまだ足りぬ
面取りはとつくにしてる八十路です

鳥取県 山下節子

たとえばの話に本音混せている
いい出会いありそう今日の趣味の会
カニ食べたよブログにのせて自慢する
母さんの料理胃袋満足す
ポチ袋余分に持ってご挨拶

鳥取市 池澤大鯨

底に澱かきまぜないで置いてくれ
底意地の悪いお方だ自信家だ
銀河系底を見た者まだ居ない
七味ふるとたん咳きこむのどの癖
何にでも七味ふりかけ知ったかぶり

鳥取市 加藤茶人

勝者ってなしに長生き地位名誉
独り居て夫婦喧嘩を懐かしむ
子の世話にだけはなりたくない介護
お隣は何する人ぞビルの闇
お役所の考えそうなゼロ金利

鳥取市 岸本孝子

今年また元気で会えたお雛さま
お化粧が面倒なさない女
木の芽吹きに元氣もらって生きようか
広告のレシビ使った晩の膳
亡き父母が彼岸ですねと夢にでる

鳥取市 倉益一瑤

まだ欲があるかと鴉来て笑う
紙一重命の重さ知りました
動かねばわたしが消えてしまいう
初対面ちよつと尻尾を振ってみる
崖っ縁一か八かの芸をする

鳥取市 田中 憧子

母のパジャマゴム緩めたり緩めたり
介護する娘も薬飲みながら
寝返りを数えてやがて朝になる
母の願い通りに父は先に逝き
ジーンズの破れおしゃれと思えない

鳥取市 棚田 大

ビックリボン あのジエジエはどこいった
お金では買えぬ心をゲットせよ
琴バウワ―思わず俺もやっている
育つ子等何故か俺の背無視してる
風を読む俺だが彼女俺を読む

鳥取市 谷口 回春子

我が家にも天下分け目が二つ三つ
深追いでかいた冷や汗二度三度
呆けた振りしながら暮らすこれも知恵
へそ曲がり頑固我が家に居候
終活に心が揺れる古稀迎え

鳥取市 永原 昌鼓

春来たらすぐ夏となる暑がりや
坂登るプライドひとつ携えて
努力へのご褒美届くさくら咲く
母ゆずり背中も丸く老い進む
あと少し心とない一人旅

鳥取市 中村 金祥

とんがった芯で世の中風刺する
生まれ出たような気持で門を去る
ロボットが答弁する日近いかも
びっくりぼんすればのぼせる北の国
氷点の辺りで心揺れている

鳥取市 夏目 一粹

田周率の終わりは俺が死んだ時
不必要な物が詰まっている頭
お人好し人情一つ盗まれる
細心の注意が老いに鞭を打つ
望郷の念を寒さが深くする

鳥取市 西川 和子

騒音の中で捻っている句会
一言を消化しきれぬ腹の虫
先輩の重い話が身に染みる
善人にも悪い人にもまだなれぬ
新調のスーツを纏い逞しい

鳥取市 春木 圭一郎

好転を信じ迷わず前へ出る
昨年と同じではない春がきた
出るために誰でも一度立ち止まる
休むのも大切やと気がついた
枯れながら輝く自己意識する

鳥取市 福西 茶子

この頃はアヒルと同じ歩き方
子守り済み老守りまでの小休止
小休止飛んでみたいが老いすぎた
淑やかさ偽装ときどきお茶お花
プースピーー軒も春の音で鳴る

鳥取市 前田 楓花

その昔胸に甘えた子も親に
ふれ合った心何とも温かい
不用品捨てて断捨離のまねごと
引き籠もりじゃないけど我が家大好き
和紙の里主の居ない家目立つ

鳥取市 森山 盛桜

容赦ない加齢プライドだけ残る
覆面の下は歪んだ顔ばかり
基本的かたちは食パンの四角
すっきりと末路と末期迎えたい
平民は気楽失言しても良い

鳥取市 山下 凱柳

七転び八起き再出発を繰り返す
五年目の春も光はまだ見えず
人間を数字で管理する社会
総中流言われた時代あったとき
受け継いだDNAに愚痴もでる

鳥取市 吉田 孔美子

役所から二重請求弛んどう
やんわりと頼むと顔に画いてある
穏やかなレジの対応見て並ぶ
客しない祭日裏の草むしり
祭り膳一人ぐらしの兄嫁に

鳥取市 吉田 弘子

喧嘩まだできる幸せ気が付かぬ
天秤にかける激安と安全
揚げ物が遠のく老いのメニューから
ハングルの風船山陰へようこそ
限界集落老いが最期を見届ける

倉吉市 猪川 由美子

税率と比例血圧値も上がり
五輪や選挙忙しい年になりそうだ
予め死を念頭に生きてゆく
マイナス金利さてとトラの子どうしよう
寒暖差自律神経狂っちゃう

倉吉市 山中 康子

初産へ健やかなれと手を合わす
明日のことわからないから面白い
空腹へ辞書が味方をしてくれる
じつくりと話せば隅におけぬ人
みてくれは悪いが味は大したもの

米子市 後藤 宏之
びつくりほん軽いことばで流行語

行く逃げる去るで早春梅桜
妖怪のおかげで電車生きのこる
身元調べ過ぎて話が実らない
今年是非お会いをしたい孫悟空

米子市 後藤 美恵子

余寒からしかと蓄を護る萼
皮下脂肪余寒に備え貯える
姿見をはみ出す不安コート脱ぐ
花芽まで剪定されたお手伝い
飼猫猫のもてない春に気が揉める

米子市 竹村 紀の治

ほどほどがクスリだけれど守れない
暖かい言葉も酒も抛り所
足跡を踏んで駄まで雪の道
労わって貰いたいのに叱られる
遺されて知った男の得手勝手

米子市 中原 章子

バス降りる前に料金握ってる
生き甲斐が天まで届くよう祈る
年齢に甘えてレベル落とせない
強い武器頼りすぎると後れとる
早朝の新聞冷氣挟みくる

米子市 成田 雨奇

両親にシヨック与えて生きてきた
雪解けの水飲む山が春を吐く
居酒屋のママが喜ぶジョーク練る
女だものベッキーだつて恋はする
同窓会名簿高卒少数派

米子市 吉田 陽子

クロスワードパズルのようになる私
生き延びて来ました灰汁が頼りです
医療明細重ねて寒き部屋になる
投稿を見たと電話が鳴り止まぬ
姉さんの大ざっぱには徳がある

島根県 伊藤 寿美

その向こうが見たくて立ち位置変えてみる
フジコヘミングのバツハを聴いている褥り
亡母の文笥に残る変体仮名読めず
踏ん切りがついて明日へ向き直る
あれから五年遺構が語り継ぐいのち

松江市 小川 注湖

子らの目が皿の分配睨んでる
秒針がぐるぐる回る定め生き
経験は宝自信を持つている
人生は僕の尺度でこのくらい
春という季節を知って芽膨らむ

松江市 川 本 畔

椎茸のホダ木は未だ怒ってる
五年目の震災記念日目を腫らす
薄暗い光の部屋に救われる
神の前氣分で投げるお賽銭
故郷はいつも草むす中に在り

松江市 藤 井 寿 代

大騒ぎした人は一度も来ない
バーコードつけられCTの列に
今朝の心模様はマイナスの3
芒野を少し迷った帰還兵
綿菓子時間に包まれたハート

松江市 松 本 知恵子

野球少年掛け声響く春が来た
両面を知った上でのおつき合い
のんびりしたいが母と孫が呼ぶ
昼寝して余力貯めてるばば多忙
峠越え卒寿の母へ会いに行く

出雲市 伊 藤 玲 子

冬の底這い出た時の青い空
紙飛行機春を迎えに風に乗る
歎異抄子等の未来に思い馳せ
米と水郷土の誇り醸す酒
「お先に」と寺の辛夷が咲いだす

出雲市 岸 桂 子

仕切り直して八十路の風に立ち向う
無策の日今日は大根でも煮よう
着いたかと問えば食べたという返事
日めくりと一緒に消えて行く記憶
時々心は無駄を遊ばせる

出雲市 小白金 房 子

風化した地蔵へたむけるよだれかけ
登下校見まもり隊に感謝する
菜の花の響きわたしも蝶になる
日本の文化わたしの白いめし
ありがとう四季を色どる花の笑み

出雲市 竹 治 ちかし

日の脚の長さが連れてくる元氣
光年の定規に消えている私
喜んで居れぬ長寿の影を見る
子育てを忘れた親の手にスマホ
果物の食べ方一つにも作法

出雲市 多久和 敬 子

良く似合う言われ鏡の意見聞き
スーパで今日の献立本決まり
春なのに背を丸めてスーパーへ
変人と言われる程のきれいい好き
新品の冷蔵庫にも期限切れ

雲南市 松本 昌

右寄りがやはり力の差になった
人生の末期しみじみ金の事
認知症予備軍となる暮し向き
大根を刻みおしんを思うめし
しあわせは台所にあり朝の音

岡山市 池田 たか子

哀しみの隙間に花の種をまく
年金に安うまモヤシ褒めてやる
花は咲く忘れないよう口遊む
賞味期限はあばの鼻が決めている
春なのに重たいカルテ渡される

岡山市 田中 恵

人間が好きで卒業後回し
あっち向いてほい風が機嫌をとりにくる
ライバルの後姿は温かい
平凡に暮れて感謝のワンカップ
イヤリング密かに春の風を待つ

岡山市 工藤 千代子

神仏は信じたい日と信じぬ日
春風というが昨日と同じ風
時計など捨てていますとカレンダー
スカーフで隠した物は研いだ爪
また挫折今日の予定は明日にする

岡山市 永見 心咲

自画像のサインが未だ決められぬ
同意書にサイン病室まだ揺らぐ
鍵穴を覗けば深い海になる
スタンブを押して私を確かめる
宇野千代の桜でつつむ今日の貌

岡山市 前田 恵美子

振り向けば夢中で走る影がある
無口だと言えば娘が笑い出す
文化祭孫が出るよと触れ歩く
転んだらしばらく蟻になつてみる
曾孫との会話百まで願う父

笠岡市 藤井 智史

大根の長風呂じっと待つゴボウ
サクラサク一週間は赤飯だ
サクラサクミライヘコイハダツシユスル
マシユマロをそつときゅうつと抱いて春
失恋の後はおぬけの殻となる

広島市 岸本 清

杉花粉思考回路を淀ませる
枯れ方の美学を持つて老夫婦
崖っ縁日銀ついにロープロー
自惚れに自覚症状ないらしい
プレゼントよりも嬉しい思いやり

竹原市 岩 本 笑 子

一十一を今日も計算しています

時々春の陽ざしを信じよう

悲しい事があつた春をつれて

テレビからもう元氣はすぐ忘れ

かあちゃんと言つてくれるのこの子だけ

竹原市 石 原 淑 子

ゆれる日も迷う日も佳し仁王の瞳

時代雖今が一番好きらしい

卒業茶会孫のお琴とお扶茶と

私のボッケにいつも笑い声

献立に笑顔のをせる春の彩

府中市 藤 岡 ヒデコ

過ぎた日を後悔するときがない

眠れぬ夜過去を何度も巻き戻す

明日しよう掃除はいつも先のばし

一日がいい日で終る日の恵み

ご近所の老人力に支えられ

宇部市 平 田 実 男

誓いにも賞味期限がありました

原子爆弾より怖い自爆テロ

アベノミクス尻尾見えたり隠れたり

宿題は官僚がする永田町

七人の敵は親友にも勝る

東かがわ市 川 崎 ひかり

コーヒーが朝を奏でる音で沸く

氣を許す友と至福のティータイム

係わればわずらわしさがまた増える

いじめ等ないな笑顔はじけてる

工事中ばかりになったマイロード

松山市 古手川 光

情報化地球を小さく狭くする

前向きに生きると風も味方する

朝ドラのあさ見ましたか議員さん

何処行つた子供がいらないこどもの日

産めよ増やせよ尻叩かれるのも恐い

松山市 宮 尾 みのり

全潔院史学克眼息子の名

一周忌過ぎたに涙まだ枯れぬ

孫という忘れ形見を托される

仏様と孫へご飯を炊いてます

友だちも私もみんな高齢化

大洲市 中 居 善 信

右向けと言うから右を向いていた

岩清水指の隙間を落ちている

死にたいと思つたことも青春譜

雑貨屋が消えて久しい過疎すすむ

この世とや地獄花野とみて来たが

西予市 黒田茂代

目の前に団地景色がまた変わる
少しずつ断捨離それが難かしい
天命に逆らう事はしたくない
わが家には要らない空気清浄器
二人でも四、五人用の冷蔵庫

高知県 小澤幸泉

約束の地の遥かなり我死なず
憎しみの闇の深さを包み込む
揺れながら二つの国を生き延びる
主の前の絵踏み私は何者ぞ
生きるぞと自分言い聞かす

高知県 小川てるみ

謎めいた言葉が春の陽にとける
目標に向かってベンが立ちあがる
虚と実のはざままで青い実が熟れる
鉤括弧歳でくくって欲しくない
千の目に千の視野ある世界観

唐津市 坂本峰朗

燃え尽きるまで待つことにする怒り
背伸びした足に支えが欲しい日日
いい歳の爪先立ちが続かない
新しい恥で隠れた古い傷
いい嫁の側にはきつといい亭主

唐津市 山口高明

紺紙金泥写経で罪が消せますか
核実験粹がるやんちゃ居て困る
疫病神と嫌われ者も居る世間
堅物の父は主流に乗り遅れ
人生の悲哀取り巻き居なく成る

熊本県 岩切康子

欠席を補う資料に友の愛
好物を籠に加える添う夫
意に染んだ事は何んでも苦にならぬ
毛のストール失うほどの暖かさ
雨・雨と予報の嘘に水を撒く

熊本県 高野宵草

笑む妻の遺影にウインク今日始む
正直に内緒も告白した墓前
相談をされて己れの無知悔いる
後悔の看護残して妻が逝き
養老に甘えて認知症が来る

札幌市 小沢淳

海黙す恋しい人を連れて行き
春よ春新幹線が北上す
満漢全席よりも汗したにぎりめし
「百花繚乱」一人一句に僕も載り
ハンドルの遊びが欲しい外交も

札幌市 三浦 強 一

胃袋の限界を知るバイキング
和洋中名脇役となるバセリ
太掉の喜怒哀楽に聞き惚れる
くやみ欄素通り出来ぬ名に出合う
十字架を背負って歩む老介護

青森県 松山 芳生

スマホべらべら君には心見えますか
いつもの道でパントマイムする落ち葉
安定剤飲んで一日積み上げる
人間に戻ると生きる宙がある
吹雪かれて生きる重さに耐えていく

黒石市 相馬 一花

流暢な口説きをママが聞き流す
土壇場で真っ赤になって否定する
UFOが微笑みながらやってくる
中国の野菜が出陣する構え
妖精がすいすい泳ぐ銀河系

弘前市 浅田 隆樹

サスペンス防犯カメラ主役です
タクアンが酸っぱくなったもう春だ
探し物整理はしない方がよい
庭先へボケ防止にとラベンダー
三月の雪はあの刻連れてくる

弘前市 稲見 則彦

喧騒が去った桜と独り言
自問自答やっぱり楽な方をとる
一坪の農園だつて種を選ぶ
プランター菜園腕の見せ所
境界の杭に秘密を握られる

弘前市 岡本 花匠

父母の星われに愛情千の風
目標に生きて幸呼ぶ至福みち
手と足の軽々動き良い目覚め
私から昭和のシミを抜き切れず
横笛の音色に踊る津軽甚句

弘前市 今 愁女

真冬日にはのほの温い灯油の値
梅さくら同時観賞北の春
蝦夷の地にかニ食いに行く日帰り
新幹線北が近づき旅ごころ
核・ミサイル会話できぬか国と国

弘前市 須郷 井蛙

寝たきりに平等ですと爪が伸び
一日も欠かしたことはない紅だ
杖よりも優しいおててが待っている
朝ドラが家族のこころひとつにし
二等兵のままで終った母である

弘前市 高瀬霜石

アイロンをかけてごまかすほどの嘘

あと一歩なのにと言われ半世紀

わかつちゃあいるがついついつい愚痴る

存在感ありますタイムリー・エラー

こっちこっちと手を振っているお葬式

弘前市 高橋洋子

善人の仮面を捨てて日々長閑

ヒーローになって肩の荷重くなる

勝ち負けを競うはおろかマイペース

軒下に鳩が巣作る平和なり

薬より医者の一と言妙薬に

弘前市 富士慕情

夜が明ける僕の一日動きだす

洗顔の水から四季を受け止める

仏膳を供えて朝の経を誦す

朝食を並べて妻を呼びにくい

手抜きする家事も一日すぐ暮れる

東京都 川本真理子

完ぺきに梅一輪が咲いてみせ

梅一輪冬將軍を打ち負かす

風の中いつも誰かを待ちながら

住人はわたし一人の国に住む

ナポリタンでも食えるかと生き返る

横浜市 菊地政勝

残像を追ひ現実を逃避する

生き方と長寿で返す父母の恩

夕焼けに明日のシナリオ組み替える

トロフィーが饒舌となる応接間

息抜きも手抜きもしない実直さ

富山市 島ひかる

伸びきったゴムだと思ふ二人連れ

サプライズした事もなく待つ祝い

カーナビのつもり助手席よく喋る

若い日の娘のおさがりを着て元氣

騙し絵の中でわたしが消えている

可見市 板山まみ子

町の役受けて選挙に出るつもり

都合良くよんどころない事情でき

これからは自分のためと世のために

アリバイになるかも知れぬ領収書

その時になれば解るさ親心

大山市 関本かつ子

物申す顔が最前列にいる

愚痴ばかり拾い集めている眉間

二人共小声になつて日が暮れる

密告と内部告発ちと違う

被災地の声もう五年未だ五年

(小澤幸泉さんは46頁にあります)

自選集

小島蘭幸

観桜会の招待状といふひとり
真ん中に生まれ小さいままである
僕だけが知らぬ真夜中のサイレン
ビートルズひとりで聞いていた真昼
少食になったを誰もまだ知らぬ

都倉求芽

消えることなんか無い君のあたたかさ
消し忘れいつまでたつても肩に乗る
言いかけてまたつまずいたもの忘れ
眠気まだ抜けきらぬのに朝がくる
理科学がどんどん大きくする宇宙

土橋螢

正座して合掌をする刑もある
死ぬことを忘れて仕舞う誕生日
極楽を探して歩く月あかり
花いっぱい植えて寿命と根くらべ
月光に照らされ罪が深くなる

西出楓楽

遊ばねば体も脳も錆びてゆく
弁解で恥の上塗りしたようだ
我が恥をさらし仲間にしてもらう
逆流性胃炎が痛む闇の底
ちよつと無理しないと前へ進めない

仁部四郎

元服の古語十八の選挙権
某国は兵十八の選挙権
誘導にさて十八の選挙権
親たちの声十八の選挙権
まんざらの勘十八の選挙権

前たもつ

人様に分けてあげたいもの見つけ
いい医者だ風邪に薬はありません
決心と覚悟は少し違います
枕元ティッシュハンカチお茶とペン
人類の英知を神が知っている

政岡日枝子

身のまわり若く包んでクラス会
集合写真正直に出る今の顔
老人の手柄もあつて世がまわる
耳はまだ昭和を敏感に掴む
採め事もなく諦めの風よどむ

三宅保州

咲いて良し落花盛んと舞うも良し
顔触れが揃うと踊り出す会議
大人にはなれるが子供にはなれぬ
診断は全治不能の胸の傷
生きていることを忘れた軽はずみ

宮西弥生

昭和期を生きて我慢という嫉
草笛の余韻つかの間だけ詩人
間引かれて自立精神発火する
三寒四温弾けて介護花日和
釜のめし分けて素足がよく育つ

持ち時間

八木千代

春の鬱 狂う手前にさくら咲く
これ以上透けてはならぬ梨の花
忍んで閉じて吐く睡蓮の深い息
いざとなれば自らを刺すバラの棘
終に椿 落ちつつ狂う持ち時間

両川洋々

総理の目きつと徴兵制に向く
フクシマの悲哀線量計が要り
同居などせぬが子守りはして欲しい
無我夢中男の背なは隙だらけ
毒消しは飲んだ毒舌恐くない

板尾岳人

パツと咲きパツと散り逝く花埋み（故水谷正子姉）
地球から滑り落ちない南無菩薩
嫌われる勇氣を持つている海鼠
祭りから帰って来ないベーターベン
有りがとう尊敬しているエレベーター

林瑞枝

晴れという魅力に洗脳されている
浮かれ上手な魅力で誘う美女の声
ふる里の渚はははの子守唄
大山の派手な姿を見て生きる
余生上手に生きよと申すちちの声

川上大輪

片付けてからの行方がわからない
早い者勝ちかもしれない惚けるのも
変なおじさんがいっぱいいるこの世
矢印はいつも地獄を向いている
わたくしのDNAは白紙です

小西雄々

合掌の手のひら温くなってきた
入れすぎた夢へ風船バンクした
記憶力落ちたが年のためという
栗のいが二度目の役はしたくない
手で受けた星の雫は無味無臭

齊藤 荔

土に足しっかりつけて生きようよ
ボール蹴る子らは未来へ向けて蹴る
一粒を採るも一年がかりです

青い鳥に逢いたくなつて来た森だ
旅人を好きでたまらぬ蛇の目傘

新家 完司

いつまでも若葉マークのマイハート
我が町も空き屋廃屋あちこちに
過ぎ去ったことなど煙振り向かぬ
ライバルは五千歩はくは七千歩
血糖値などは忘れて梯子酒

津守 柳伸

満開を誘うハガキのテリトリ
出不精に雨がきつちり味方する
孤独癖ネットカフェに猫カフェ
三寒四温ペット同伴するお宿
原発も一翼担う温暖化

遠山 可住

浅瀬まで逃げた安心するがよい
認知症ハイと元気な手があがる
広告をきれいに捨ててお正月
まだ生きているぞ新聞五時に起き

川柳塔

(つづき)

(前月分) 高知県 小澤 幸泉

安倍さんの居場所安全地帯です
貧しさと戦の残る「昭和の日」

九条が私の胸にビタリ付く

歳月を重ねて仰ぐ初景色

マイナンバーしっかり儲けできました

水煙砂

(つづき)

伊勢原市 小田 幸子

積み立てたお金になぜか課税され

気分変え外に出てみりゃ雨ボツリ

愛なワンを乗せておしますベビーカー

親の介護デザインするも芸術か

静岡市 渡辺 芳子

この人生今が一番若い日か

足腰の弱さに齢を思い知る

老いる事楽しむ心に衣替え

何となく良い事に逢う今日この日

第17回 生駒市民川柳大会

日 時 7月17日(日) 12時開場
会 場 生駒市コミュニティーセンター
(セイセイビル内)近鉄生駒駅より南へ3分
〒630-0257 生駒市元町1-6-12

電話 0743-73-0500

事前投句 「前 向 き」 笹倉 良一 選
ハガキで1句 6月20日(月)消印有効
(出席者に限る)

宿 題 「出しゃばる」 岩田 明子 選
「森」 大楠 紀子 選
「模 様」 木本 朱夏 選
「しなやか」 嶋澤喜八郎 選
「粘 る」 西澤 知子 選

出 句 各題2句(出席者に限る)

締 切 13時

会 費 1500円(発表誌呈)

事前投句先 専用ハガキまたは普通ハガキにて下記まで
〒630-0253 生駒市新旭ヶ丘14-7

松本 柊子 宛

問合せ先 松本柊子 TEL 0743-74-6588

主 催 生駒番傘川柳会

ひらた川柳会40周年川柳大会

日 時 5月22日(日) 開場 10時

会 場 瀬分コミセン(公民館)駐車場

(JA瀬分支所・瀬分簡易局)

参加費 500円(昼食含む) お心付け拝辞

※投 句 500円(切手82円×6枚)

投句締切 5月10日

※投 句 先 持田 俣子

691-0001 出雲市平田町807

TEL.0853-62-3137

用紙自由・楷書・住所・氏名・電話

題 各題2句

「どこいしょ」 但見石 花 菜 選

「ノーベル賞」 新 家 完 司 選

「うっかり」 門 脇 かずお 選

「味 方」 安 黒 登喜枝 選

「比 べ る」 清 水 美智子 選

「女 優」 柳 楽 たえこ 選

「順 番」 眞 野 吞 舟 選

主 催 ひらた川柳会

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

見せ物にしてはいけない原爆忌

弁当にすぎ焼きがある月曜日

一碗の飯で祖先仲がよい

病院の天使お尻へ針を刺す

先輩は軽い財布で無理をする

せんそうがやがてはじまる鳥の影

珈琲と天声人語 父の朝

五月よし女の胸の高さから

敗戦のいのちつないだ芋の恩

新聞を買うだけに行く駅となり

病院もお寺も近いとこに住み

休日の進軍ラッパは妻が吹く

石段の数に信心ためされる

大臣になる心配はない仲間

失恋も作家はましの種になり

進め進め神になれるぞ兵士たち

SLのほかは少年は撮らぬなり

川柳塔の

川柳讃歌

(137)

木津川 計

恥いっばいかいた顔です自信作

川 端 一 歩

はじ多き一生なれど懸命に生きていつか96歳(直木孝次郎)。昨年の朝日歌壇入選作だった。古代史の碩学だった。大学で僕はこの方に歴史を教わった。真実誠実な学究だった。土浦航空隊で終戦を迎えた。昨年末、歌を次々、死ぬといふ訓話を聞きし夜を思ふ七十二年前の雨の夜にきき。特攻を命じた者は安全で命じられたる者だけが死ぬ。

一歩さんもちいた恥だが、直木先生の志をあかつき川柳会で自信を持って継いでいる。

純行の旅で私をふり返る

岩 佐 ダン吉

寅さんは新幹線に乗らなかつた。いつも純行でタンカ売の祭りを追つた。財布の中には五百円しかなかったことがしばしばだった。

ダン吉さんのイメージはなぜか寅さんと重なる。「貧乏人つう者はよ、いちばん辛くて

悲しいときは金持ちに札束でほつたぶつ叩かれるときだ。だから孝行娘を妾に出さなきゃならねえんじやねえか。その辛さ、悲しさがおめえみてえな若造にわかつてたまるか」。

ダン吉さんもそんな悲憤の純行の旅だった。

清く正しく生きよを守り出世せず

小 沢 淳

宝塚歌劇を生み出した小林一三はこう説いた。「其旗幟は簡単にして鮮明である。朗らかに、清く、正しく、美しく、これをモットーとする我党の芸術は即ち高尚なる娯楽本位に基づくところの国民劇である」からタカラジェンヌは皆独身で純潔であった。

察するに淳さんも「清く正しい」純潔を守ろうとしたのだが、独身ではいられなかった。妻帯した時点で「出世」の望みは絶たれたのだ。一三の理想は万人に及ばないことを知る。

そのうちに握手もセクハラと言われ

寺 川 はじむ

二年間少女を幽閉した男はフルネームを自宅玄関先の傘で知ったという。そこから恐慌が広がる。わが子の持ち物に記名しない親が出てきた。蔓延すればどうなるか。一切のネームカードは人物を特定させるから消える。表札は所在を教えるからなくなる。名刺は私でございと告げるから廃絶される。郵便配達は

不能になり、世の中は誰が誰やら分からなく……。確実に無名社会の暗闇に向う。過剰防衛ははじめさんの親愛なる握手も阻む。

ロボットが日毎人間らしくなり

矢 野 梓

僕はもう囲碁、将棋への関心をすべて失ったのである。韓国の世界一といわれる棋士が人工知能に一勝三敗で敗れた。囲碁の難易度は将棋の比ではない。となると将棋は全滅だ。もはや名人戦や王将戦はアカン者同士の競合、二線級、三線級の争いとあつて何が面白い。既に人間を越えた人工知能である。

梓さん「人間らしく」なるロボットです。地球を滅ぼす人間に加えロボットも参戦する。

今更を今からに替え習いごと

藤 原 大 子

その昔、コロムビア・ローズが歌つた。「今更なにを言ってるのさ/気まぐれ夜風に/誠なんかあるものか/捨てちゃえ捨てちゃえ/どうせひろった恋だもの」でローズは「今更」を振り切り「今から」の恋に望みをかけた。大子さんも殊勝である。「今更」を棄て、「今から」に「習いごと」を据えたのが僕を泣かせる。ローズ嬢の色恋ではない。生涯学習にこれからを生きる。この真面目さに脱帽。

(「上方芸能」発行人)

新川柳鑑賞

(51)

麻生 路郎

焼跡の柱草月流に立ち

(一恒)

焼跡の柱が、夜空にニヨキニヨキと立っている情景は実にさむぎむとした感じである。それを作者は「草月流に立ち」と表現したところがこの句のネライである。草月流へ投げた皮肉に興味のつきないものがある。調子もよく整っている。

的確に且つ迅速に金銭が減り

(不二)

カネがグングン減ると云うことは誰もが経験し過ぎるほど経験しているので、使えば無くなることに何んの不思議もない筈だ。ところが斯うして句にされて見ると一種の魅力を生ずるのはどうしたわけかと云うと、「的確に」「且つ迅速に」と云う漢語で、しかも調子のよい表現の力によるのである。何でもない題材を生かすのに、調子や表現の仕方が、かなり強力な役割を果し

ていることの証左としてこの句などいい例であろう。

あけすけにものを云うのも金があり

(夢裡)

誰に遠慮会釈もなく、大きな声で、あけすけに口をきく人がある。こんな人はキツと金がある人だと云うのである。人間にはたしかにそんな一面がある。癪にさわっても、金があるのという世間ではどうすることも出来ない。云うだけ云わしておくより手がないのである。しかし、そんな人に限って、案外握り屋が多いのである。

作者はそうした人に対するレジスタンスでこの句を詠んだものらしい。

小遣を呉れる財布を覗いて見

(一傘)

「お小遣い、幾ら呉れるかしら、たんとお金があるのかしら」小遣を呉れる財布を覗きながらも、そんなこと考えるさまがうけとれるのである。スナッパ的な句ではあるが、非情に面白いと思う。

腹工合わるし大金持たされて

(豆秋)

極く平易に詠まれているが小心翼々とし、極く平易に詠まれているが小心翼々とし、た男の態度をハッキリとつかんだ句である。

多少は作者の実感かも知れない。自分の金でないのと、常に持ちつけぬほどの大金を持たされて、万一盗られてはと思うと、何となく腹の調子が悪くなるものがある。作者はこの間の心理の動きを巧みにキャッチしている。

われと来て游べ財布に金入れて

(望峰)

俳人一茶の

「われと来て遊べよ親のない雀」の引用句であるが、「われと来て遊べ」が奇想天外に引用されているのが面白い。

一茶はせむしでまま子で、友だちもない淋しい生いたちから、親のない雀へ呼びかけているのであるが、この句は悪友への呼びかけである。一茶の句には動物愛が感じられるが、この句にはいささかの友情も感じられないが、なんとなく浮きうきとした情緒があるので捨て難い。

直された癖で語っている語

(梅志)

なんでも聴く人が聴いたら判るし、観る人が観たら判るものである。そうした真理をこの句から知ることが出来よう。先生はよい先生を選ぶことである。



川上大輪選

三田市(故)森 本 みね子

頑張るよ負けてたまるかガン告知

起き上がる達磨根性私にも

窓の月そつと手を出し影遊び

母さんと月を見上げて涙する

そこまでの一步が出ない松葉杖

手鏡に日毎に痩せる頬なせる

佐賀県 真 島 久美子

この胸の中を素通りする時間

距離という敵を味方に変えてやる

美しい夜はここから動かない

信じたい想いが今日を締めつける

泣き顔も笑顔も粘土細工かも

泣けばいい明日はきつと違う花

箕面市 中 山 春 代

吉報を待ってる耳がむず痒い

お散歩のおやつ鴨にも投げてやる

手のかかる今が幸せ乳母車

母の手をスリリと抜けるランドセル

安かった差額で春の花を買う

春はきらい窓の埃が浮いて見え

府中市 岸 田 武

啓蟄や四股でも踏んでみようかな

這いだした孫には這ってあとを追う

バンザイを何回もして会閉じる

につこりと頷く敵は手強いぞ

苦心した嘘のようですありがとうございます

妻が何と言おうと今日はこの背広

三原市 鴨 田 昭 紀

肩書きがすぐ竹光を抜いてくる

玄関の靴が喋っている雛

ウエストのサイズが脅す腹八分

わたくしが吹き零れだす三次会

寛大に見る青春の勇み足

飛び出した星が新天地で光る

大阪市 平井 美智子

切なさが届く故郷の母が臥す
飛び方を忘れた鳥と見る夜空
ぼっくり寺で母の呪文はまだ続く
傍にいてあげるお祈りしてあげる
幸せがやってくるまでひと休み
寝返りの数だけ新しい明日

雲南市 菅田 かつ子

孫が来る頼り無さそな彼連れて
何となくお洒落のしたいいい天気
番犬にしつぽを振って迎えられ
おいおいおいがなかなか来てくれぬ
長すぎた昼寝わたしのロスタイム
まだすこし生きるつもりの木を植える

大阪府 神野 千恵子

茶柱が立つてやる気が顔を出す
日替わりの季節からだの置き所
宝石にそっぽ向かれる年となり
影武者がしゃしゃり出てくる委員会
話し合いなどと結論ありきなり
あの日まで海は友達だったのに

豊橋市 藤田 千休

消しゴムが引張りだこの永田町
蜜の味食りすぎた総入れ歯
愛着が過ぎて今ではゴミ屋敷

都構想湿気た花火に再点火
百年では老舗といわぬ京すずめ
合コンでダイヤを探すお年頃

神戸市 玄番 美恵子

願いて誤解招いた遠い耳
やわらかい言葉が招く怖い畏
シンプルなレシビ閃く冷蔵庫
春の土一直線に蟻の列

うち明けて良かった笑顔取り戻す
亡母さんが忘れて逝ったスベアキ

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

したたかに生きよう仮面つけたまま
道草もしながら人間らしく生き
無駄かとも思うが義理もかかせない
離れない影が未練の風となる
それなりに生きて幸せつかむだけ
遠い春私まだまだ踊れない

大阪市 高杉 力

前の晩鍋だと次の日はおじや
客を見て有線の曲変えている
サンプルは又焼三枚だったはず
ねえさんと呼べばおばちゃん振り返る
営業が長くて深い笑いジワ
ポケットに夢のかけらはないものか

大阪市 磯島 福貴子

旅満喫青春切符古い仲間
クロスワード一問解けりや埋まるのに
人街味出会い求めて旅に出る
営業マン群がる鳩に油売る
道の端ネジバナ何を拗ねて咲く

大阪市 田中 ゆみ子

ひとりとは背のボタンがとめられぬ
悪友が話す亡夫のこんなこと
プライドを捨てて今日から妻の部下
わたくしに戻る仮面が外れない
鮎ひとつ貰う一会の春の旅

大阪市 中島 栄子

年の重み感じるように今日八十路
オッチョコチョイ同じ失敗繰り返す
何を探していたのか忘れついに来た
考える人のポーズで痛み耐え
戻れるなら親孝行を今一度

大阪市 横山 里子

ドーナツの穴の大きさ今日の運
ドライアイ人のことなら泣けるのに
筍のずんぐりとしてまだ平和
コンビニの灯にたむろする子の孤独
もてあます心なだめてしまい風呂

堺市 梅木 澄空

デイの朝母はせかせか落ち付かず
最近は九九も危うい乱調子
罵った老母の行動いま私
息子の笑顔浮かべ牛筋煮込でる
絵文字でも花束うれし子の気持

堺市 羽田野 洋介

力んでもどうせ歩幅は変わらない
手や足は鈍いがまあだ利く機転
如才なくやったつもりがすっぱ抜け
勝手気まま人それぞれの物差しで
ムリするなどうせ最後はムダになる

池田市 上山 堅坊

山村のどこかひかれる暮らしぶり
カマキリに構えられては掴めない
長生きへ効くと信じる酒と恋
同期会みんな病気の専門家
白寿まで泳がせてくれ閻魔さま

貝塚市 吉道 あかね

子を産まぬ女 気楽な旅にする
まだ女まだまだまだという鏡
君のためバントぐらいはまだ出来る
すすくと老いて来ましたサンルーム
禁酒禁煙男の声が萎んでる

河内長野市 穂口正子

速い平成昭和ゆったり流れてた
戦なき希有な間に生きた幸
楽な道行けば良いのに気が強い
好きなだけ食べてサブリの免罪符
グラスワインこれで充分夢ん中

豊中市 荒木郁子

好きなこと言い訳せずに楽しめば
ご自慢の年の功にも油切れ
独りになり老後のブラン宙に浮く
何もかも嫁に任せて気儘旅
土地よりも現金欲しい遺産分け

豊中市 上出修

政治と金終焉のベルまだ遠い
あの政治家を鑑定団に見せたいね
国境線宇宙船から見えません
ブーム来てまどろむ猫のおらが春
シルクハットにステッキ持てば皆紳士

八尾市 前田紀雄

どつしりと構え猫だましはしない
18歳日本の国を救えるか
交差点安心出来ぬ青信号
咲かす花探しています古希半ば
兄逝って突っ支い棒を外される

神戸市 山根弘子

憧れた川柳塔の輪の中に
メ切にぎりぎり送る苦心の句
春の風ねむった恋をめざめさす
世の中をプラス志向で生きたる智慧
淡い夢年金プラス春の風

尼崎市 清水久美子

しばらくは彼に会うまい花粉症
領けるトクホ飲料ひとつある
まどろんで肉じゃがわやにしてしまう
かと言って打つ手ないのでお茶にする
解剖をする気になれぬ鉄面皮

尼崎市 藤田雪菜

三日月が刺してきそうな帰り道
音痴にも好きな歌ありマイク持つ
帽子掛け亡父の匂い残してる
朝ごはんパンとご飯の分かれ道
三寒四温明日はきつと咲く蕾

三田市 今西廣子

エアバック事故らなければ解らない
ああしんどあともう少し生きてみる
嘶家も鳥も見事な口さばき
掃除機に御苦労さんとひとりごと
棚の上マイナンバーは昼寝中

三田市 上田ひとみ

和歌山県 森下よりこ

ひとつ上それだけでもう拍手です
ぶにゅぶにゅとそしてやわやわ二歳です

思い出の品も人にはすべてゴミ
捨てて来た過去思うより今日の幸

スキップは苦手ゆつくり育てたい
カーナビの声にそっくりなんだって

いつまでもときめく種を持っている
気温差が十五度花もめんくらう

同じこと同じ窓辺でティーカップ

無器用なままで古希の日過ぎてゆく

三田市 九村義徳

和歌山県 北原昭枝

目を覚ませいつまで寝てるうちの獅子

春がすみ夢の欠片を胸に抱く
二度寝して初恋のひと擦れ違う

言い訳は通さぬ妻の鋭い目

足音が軽くなってる嬉しい日
味のあることばが残る耳の奥

自由化の名の下進む貧富の差

ちちははの声がきこえる曼珠沙華

風呂敷に包みきれない法螺を吹く

味のあることばが残る耳の奥

重い口開けば軽くなりますか

ちちははの声がきこえる曼珠沙華

宝塚市 井上風花

和歌山県 倉橋悦子

見合写真あればあるほど決めかねる

荒涼のころ面取りから始め
新人がときめきの春つれて来る

金策でミモザの花が金に見える

ふと過る天変地異という言葉葉

仕事さえあれば窓際耐えられる

緊張のうろこ汗にも涙にも

たくさん健康食品選びかね

女偏思いつくまま書く懺悔

ほめられてたまに叱られ自信つく

女偏思いつくまま書く懺悔

宝塚市 太田としお

和歌山県 平田元三

やっかいな隣人ですな中国は

喋らせて乗せる相槌打ち上手

気が付けば父とよく似た癖が出る

実行へ柔いルールを先ず決める

爆買いで日本丸ごと買うつもり

真剣になればつい出る国訛り

涙粒流すだけでは始まらぬ

旧友に会わせてくれたボランティア

九転び十起きなんか序の口よ

反省の演技が刑を軽くする

和歌山市 福呂秀子

お互いの緩みを許す老い二人

ミニ菜園百均肥料役に立ち

乱高下気温に負けず立ち向かう

隣人に心配かける朝寝坊

自然体目指しストレス避けて行く

紀の川市 山東 日出男

出来るだけしんどいことは避けている

物事は禁止されるとしたくなる

一つずつ旅の重荷を解いていく

ニュートンもアッと驚く重力波

機械りを覗く予ひょうの気も解る

米子市 永井 三津子

息子のボトル飲んでスナック散歩する

病まぬ様ボックリ寺へ通ってる

脈が飛ぶ座ってテレビ見てるのに

優しさがほっこり染みる里の旅

風水も頼りにならぬ落ち目時

米子市 森脇 麗

スランプから少し抜け出て春が来る

ながらスマホ春が来たのも気付かない

背伸びするリズムの崩れ自覚する

夫のあとに酒のにおいの湯につかる

真っ白な紙に本音を書き過ぎた

松江市 山根 邦代

芽が伸びて心も動く春の色

方言はふる里の味風の色

こんな時勉強不足曝け出し

傘寿生き証しに貰うシミに皺

雲の色いろいろあつて我が心

岡山県 紫 しめの

風呂炊きをしながら読んだシンデレラ

憎しみも夢もおんなじ胸に湧く

適当な距離で女子会参加する

一回のNOがわたしを孤立させ

夢希望捨てれば就職先はある

瀬戸内市 東 槇 ますみ

余命などふと考えるフライパン

しみ跡もほうれい線も消して飛ぶ

わたくしを女にもどす鍵がない

すっぴんの心へ赤を足してやる

手で掏うひと日ひと日の重いこと

玉野市 片岡 富子

待ち合わせ足音だけでわかる友

五十肩めげず大根おろしてる

港町祭ある度衣裳がえ

4Dの映画の中で固まった

取込み中節分おひな通り過ぎ

竹原市 若年幸子

松山市 郷田みや

春よ春ふくらんだ芽の愛一途

点滴の耳へ妻子の祈る声

句の出来ぬ今日もやっぱり句座にいる

久びさに娘と散歩モカ香る

ちやつかりと拗ねて甘えて居着く猫

岩国市 上村夢香

絵手紙の丸文字今日も温かい

定検を受けて数字に睨まれる

東北に本当の春早く来て

朝ドラを追いかけている深夜まで

叱られてゆっくり今日は暮れていく

宇部市 高山清子

想い出は痛みと共について来る

石橋を叩き渡らぬ天の邪鬼

タレントの笑っていない笑い顔

にこやかな笑顔で急所はずさない

怖いから聞かず聞かないから不安

松山市 栗田忠士

当を得た一言川が流れ出す

神様も迷ってしまう絵馬の数

長らえてポツクリなどと欲を言う

真実は語らぬままの花棺

片ちびの靴に走った跡がある

こんなにも白かったのか母の骨
家族写真ひとり増えまたひとり減り
ため息が未来のドアをロックする
なるようになると雑草抜いている
土筆とる去年と同じ人と採る

松山市 近藤修二

絵手紙で大阪弁の礼届く

行間を読まれぬように詰めて書く

ぶつけ合う言葉に嘘はあるかしら

愛に飢え静かにたたむ裏表紙

喜劇かも最終章は一人です

松山市 神野きつこ

百均のお雛様ですいかがです

学歴を積んでヒト科が退化する

遊び方学んで生きる術を知る

かつおぶし削る我が家の朝ご飯

事件事故もう結構とテレビ消す

松山市 柳田かおる

埋まらないパズルこころの段差です

レットテルを剥がせばただの瓶でした

こぼれ種ヒョッコリ春を覚えてた

老梅へほほえむように花が咲く

きれいごと並べて芯が萎えていく

今治市 渡邊 伊津志

善人を演じた面を茶毘に付す

手を添えて別れを惜しむ演技力

大役を無事に演じた衣紋掛け

フィクションとノンフィクションを生きる蝶

折りたたみ椅子から持論ぶち上げる

大洲市 花岡 順子

ストレスは返事をしない人と居る

うんざりは予定オーバーする祝辞

花言葉彼が知ってるはずがない

寝たきりの父へ母の手温かい

断捨離へ母の形見を捨てられぬ

西予市 西田 美恵子

運なんてボタン一つのかけ違い

ひらがなの形でミミズ干涸びる

羽根布団の羽根を思うと眠れない

愛されて明日が少しいし重くなる

言い切った胸に重たい砂袋

唐津市 吉富 節子

友電話声で体調確認す

漫談のネタになるよな事多し

難病を二つも持ってまだ元氣

同級の独り住まいに足繁く

二時間も抜歯にかかり疲れはて

熊本市 杉野 羅天

年取って目が勾玉になっている

老いを楽しむレジェンドという響き

向う脛三年疵になる重み

放射能じわりと効いてくる世代

涅槃像淑女のような今日の顔

山鹿市 柳田 白沙

卒寿でも今だ恋してはにかんで

病院で八十路の君が大人気

水仙の香りをつめた背のリユック

自然界赤青黄の衣替え

絵に書いた風の香りと風の声

シドニー 坂上 のり子

次の世があるか無いかは逝ってから

飯の世がおもしろ過ぎて逝き難し

見えない神にがんじがらめにされ生きる

うんうんと聞いて趣味また増やしそう

今医者に行っているなと時計見る

弘前市 吉川 ひとし

どうしてもチョコキを出せない僕である

陽を掴みやつと目覚めた春のネギ

八合目あたりで効いてくるサブリ

迷っても認める事はしないナビ

落椿誰も気付いてくれません

男鹿市 伊藤 のぶよし

春風の誘い上手にまた迷う

捨てられた鉢にも付いている蕾

笑顔なら倍で届ける心意気

独り暮らし二合の釜もやつと慣れ

紙にペンやつぱり僕は発芽する

上尾市 中村 伸子

風の電話繋がる先はきつとある

言い訳をしないと決めたはずなのに

日の丸はどこにしまったかを忘れ

赤いもの何か着けたい申の年

痛むのか夫の言葉に和む朝

八王子市 川名 洋子

しまったの顔で咲いてる一二輪

故障中口のチャックがしまらない

ひらがなで書くといつしか恋文に

クラス会名残り惜し気な師の背中

花道は無縁男のやせ我慢

横浜市 川島 良子

A4に収まりきれぬ今日のウツ

実年齢よりも気になる脳年齢

順調に歳を重ねて薬増え

血税をジャブジャブ知事の外遊費

辛口の助言燃える日へたばる日

横浜市 巖田 かず枝

すみませんとありがとうを持ち歩く

さつま芋夫焼酎妻は焼き

皆元氣ただそれだけでそれだけで

孫の顔見れば痛いの飛んでゆき

食いしん坊味覚音痴になりました

横浜市 長島 亜希子

兄が見てる赤信号は渡らない

東京マラソン走つてみたい気にさせる

骨粗鬆症おてんばするのやめなくちゃ

サクラ菜の花バックに笑顔遺影にしょ

もうすぐ終わる朝ドラの先読んでいる

佐渡市 高野 不二

初任給で買った背広がまだあった

女房に云いたい事をひとりごと

戦争体験通ずる人がいなくなり

なくしても気にかからない中国製

あの無口一杯呑むと止まらない

江南市 脇田 雅美

心病むガンバレ言つて叱られる

吊り橋に揺れて怖がる齢過ぎる

天よりも地上の方が危険です

手のひらに雫ポトリと化粧水

打開策少しは譲歩人間味

大阪府 小 栢 こずえ

落葉掃き地球に灸をするように
寒に耐え生きた雑草根が深い
円満の秘訣本音にベール掛け
真似出来ぬ十人十色生きる道

大阪府 高 木 道 子

十人十色その一色が規格外
えらそうに番犬凄むせこい家
早春の耳はマスクにサングラス
老人会御長寿様はもう来ない

大阪府 畑 中 節 子

誉め合つてカラオケボックス時刻忘れ
初鳴きの鷺音符まだ読めず
悩み種老化する脳歳の所為
出来栄えを誉め合い並ぶ道の駅

大阪府 梅 里 南 天

能登のバス途中乗車も下車もなく
華麗なる一族集いお葬式
どの球も魔球に見えて涙拭く
いい夢を見るため高いパジャマ買う

大阪府 大 治 重 信

爺さんはイケメンだったと祖母が言い
話しかけ犬は知らぬと横を向き
風呂も入りめしも食ったが未だ暮れぬ
恋の季を終えてのんびり猫戻る

大阪府 柴 本 ばつは

棚ばたのような嫁さん来たわが家
キッチン匂いほっこりしています
毎日皿二三マイは割る嫁だ
財布にはいつも現金活気ある

大阪府 田 中 廣 子

姪嫁ぐ妹に見せたや晴れ姿
雛飾り孫の成長目が潤む
桃の花一枝さして雛めでる
段かざり孫とならべて若がえる

大阪府 平 賀 国 和

友逝つて人の一生考える
生まれ出る時代選べぬ人の運
涙する特攻兵の五七五
言の葉が脳と心を刺激する

大阪府 前 川 善 之

春の空旅客飛行機西へ飛ぶ
奈良へ来て平和が見える鹿と人
東大寺裏道通る春の風
老人を老朽物と言わせない

大阪府 松 田 聰

再稼働急ぎすぎではないですか
ウォーキング日頃見過ごす物を見る
つまづいた僅かな段差年を知る
失言が多過ぎるのに慣れてきた

大阪市 宮村 満寿恵

交野市 田岡 久幸

甘党は花よりも好き桜もち
花冷えに酒のカイロがホツカホカ
気分だけ颯爽と行くスニーカー
ダイエット意志の弱さに又太る

大阪市 吉田 知之

毎日が新しい日々精一杯
犬散歩猫はうろうろ平和だな
片仮名のニュースがふえて又辞典
改革は誰がやっても難しい

堺市 近藤 治子

さあ四月組が気になるランドセル
子を叱る声におびえているばあば
床の間に椿一輪和を愛でる
ポーズだけ僻んで見せるおばあちゃん

堺市 大和 峯二

挑戦し続けて生きて悔いはなし
限りある余生川柳三昧で
美しく老いる努力は離さない
前頭葉フル稼働して五七五

泉大津市 助川 和美

反戦を詠んで自分に活入れる
すっぴんが自慢の妻が化粧した
はろくそに言いつつホローするオヤジ
障子に穴壁に落書元氣な子

老いぬればグチさえロレツまわりかね
何ものか見つけた猫の胴撓る
許せないこちらを向いて笑う犬
自画自讃する人をどう褒めようか

河内長野市 森田 旅人

五線紙で踊つてようチューリップ
点滴のしずく命をじっと見る
仕舞いには怒るよと母泣きおどし
ナナハンに乗らず仕舞いの古稀の悔い

岸和田市 宮野 みつ江

ケーキ二個仏の分も私食べ
ハッピーバースデイさて何歳になりはった
亡父ちゃんにどこか似ているヒゲだるま
法事する度に遠くなるあなた

高槻市 三谷 白黒

子供等の笑顔が見える街がよい
家事育児あんたも少しやってみて
聞こえてる本格不況の足音が
二階部屋誰も使わずもう五年

豊中市 荒巻 夢

インタビュール行儀よすぎて物足らず
むき出しのライバル意識さわやかに
マイナス金利のせて春風吹き荒れる
高金利求めへそくり迷い出る

豊中市 源田啓生

恋人を待つてるように花を待つ

珍しや旧友が来る梅日和

気をゆるし悩みを言えばそれっきり

なでしこが散つて寂しい野の花に

富田林市 小出修三

けん玉で今日のストレス吹き飛ばす

遊びでも決してしないギブアップ

脳のネジ無駄と知りつつ巻き直す

妻病んで肩替りする荷の重さ

寝屋川市 荒川鈍甲

少女のようになつた妻御を抱いたまま

心中は老老介護果ての果て

利益より軽い命の世に涙

貧困がこの世の闇を深くする

寝屋川市 岡本 勲

極楽に予約がとれて薄化粧

おばちゃんは井戸端会議のスターです

元氣のもととケンカと決めてる爺と婆

我が家には魔除けはいらぬ妻がいる

寝屋川市 大同美江

あの日から復興進まぬ不安感

故里は原子炉がある恐い町

手水鉢赤白うれし落椿

暗がり足が見つけた捜し物

寝屋川市 守家尚世

グロ合わせマイナンプーは何だっけ

孫受験論吉用意し待つ四月

脳トレがストレスに成る五七五

握手して友と言いつつ一途愛

羽曳野市 磯本洋一

宅配の速さ驚く新時代

保育園落ちたが知らん永田町

帰省すりゃ町長私の知己なりき

スマホ人オンリーワンで街歩く

羽曳野市 中川ひろ介

人生の節目に母の知恵袋

オールデイズ・デイスコ爺さん朝帰り

あの世には持つていけない松盆栽

啓蟄に浮気の虫もお出まし

羽曳野市 仲谷真一

大阪に春の訪れ大相撲

一年間この日のために始末する

原発の地震対策できてるの

貯金してお米をくれた郵便局

枚方市 坂本ミヨノ

長寿でも天国地獄独り言

長居客帰ったすぐに寂しくて

オマケです白寿迄でも幸福に

ティールーム読書も飽きてお茶にする

箕面市 大浦初音

夢で乗る電車の駅は里の駅
そよそよと水面に光る春の風
ライバルが逝つてしほんだシャボン玉
反省をしても心は萎縮せず

箕面市 寺井柳童

手づくりのマフラーチョコより暖かい
雪合戦好きな子同士ぶつけ合い
卒園式まるで親子のファッションショー
手をつなぎ夫婦で通うケアハウス

八尾市 田邊浩三

豆まきを終えて八個をやつと食べ
策尽きた一杯飲んで寝るとする
政策をよく見て選べ十八歳
運命と諦められるだけまし

八尾市 山川寧

母狩り全力尽くして腹壊す
カレー牡蠣鍋の進化に感謝する
料理は下手でもエプロンが似合う人
古の清楚なシスター今何処

神戸市 井上忠貞

金欠が立呑みの酒旨くする
沈黙は長くて三日共白髪
アスリート金を目ざして身を削る
行列につられて並ぶラーメン屋

神戸市 興水弘

三分咲きここは満開姥桜
あなただけ言つては風をまき散らす
合唱をさがし求める孤独癖
傷口の奥で悔やみが風を待つ

神戸市 近藤勝正

白球がぼくと故郷をつなぐ春
母が逝く吉野の春を見る前に
初鳴きは少し控え目そつと鳴く
浅蜷貝何がいいたい口開けて

神戸市 細川花門

義理チョコと解つていても胸がキュン
特養というマンションが大人気
自分史を辿る旅路の頁繰る
風邪気味の夫に売薬試供品

伊丹市 平井富夫

お雛さん八十路になると色褪せる
宝くじ振込口座空けてます
札状はつり銭多くくれたから
御無沙汰を許せ愛した怖い妻

小野市 田中辰夫

男児には親父が見せる力瘤
十八歳与党野党にやじるべえ
孫四人集まる部屋も狭くなり
妻ランチテーブルに有るワンコイン

川西市 日野岡 和之

小春日やほっこり散歩腹ごなし
守りぬく決意は固し侘住い
野のスマレほどに小さき春惜しむ
立春や初心に戻る日と思う

篠山市 藤井 美智子

うっかりが多くなる老い巻き戻そ
怒ったらあとは笑顔でしめくくる
辛い目に合う度心深くなる
この友に本音言おうか言うまいか

三田市 宗福 清司

逆風を身体回して順風に
夜な夜な作句運良く抜けてやみつきに
禁煙達成喜寿のお祝いビール増す
勘違い想定外で済めば楽

三田市 多田 雅尚

還暦を過ぎて涙がもろくなり
雨上り気になる風と花粉症
お得感銀行よりも友の会
図書館に一日居ても無料です

三田市 谷口 修平

切っ先が届かぬ位置で吠えておく
素面ではとても出来ない英会話
将軍が核を玩具にして困る
定年後菌がしりしりしなくなった夫

三田市 辻 開子

目覚め良い今日一日を大切に
雛人形親娘孫へと継ぎたいな
ニュース見て明日は我が身と心する
古希過ぎて体の動きが歳とゆう

三田市 東内 美智子

無視される綿100パーの掛布団
期末中間テストつづきの反抗期
久し振り友の電話は選挙前
元氣な目覚め今日も鼻唄弾みそう

宝塚市 丸山 孔一

捨てられる食品群と飢餓の死と
駄目だとは言わず黙って横を向く
喜寿なれど演歌新曲追っかける
ブティックが先の季節へ急ぎ立てる

西宮市 株元 玲子

遂に來たか三本足になりはてる
一日の無事折りつつ日々医者通い
まだ來ぬ春迷い出た芽が泣いている
氣楽になりたいと罰当りの妻

三木市 山口 久子

九十まで生きる力を頂いて
老いの坂進む道には幸せが
豆まきはひ孫九人で鬼払い
おひなさま七段上に鎮座して

南あわじ市 萩原 狸月

デジタルにアナログ足してよい仕事

感謝して亡夫の保険友と旅

花の下写真撮る人騒ぐ人

喚声の消えた校庭花万朶

奈良市 尾畑 なを江

いつの間に夫のうまい目玉焼き

家中に時計が有ってみな勝手

干し柿は幼い頃の味がする

笑顔ほどパワーをくれるものはない

奈良市 高橋 敬子

詐欺しても優しかったと思はれる

いまま弾心の奥に残ってる

ウィッグで若さを競う古希の友

ねらわれる物はいれない金庫買う

奈良市 高橋 仁志

春一番ささえているよ新芽群

支えてもすぐに崩れる小石積み

体中テープで支え立ち上る

もう少し丈夫な支柱が必要だ

香芝市 山下 純子

行き先も予算も組まず一人旅

ゆっくりと力まず歩く趣味の道

四十年互いの頑固築き上げ

突進も足踏みもまた我が人生

岩出市 村中 悦男

四苦八苦なるようにしかなりません

選ばれた感激忘れ泥の舟

冷蔵庫期限切れにもやさしくて

みれん捨て収穫期待する摘果

鳥取県 飯野 菖子

万物が水を求めて生きている

盃を持つと明るい夢が湧く

根を下ろし生きたこの家も空き家とは

七五三晴着が光るいい笑顔

鳥取県 児玉 規雄

球春と聞けば心が踊ります

アルプスは同窓会の会場だ

試合ごとお国訛りが入れ替る

また来いよ敗者に贈る応援歌

鳥取県 下田 茂登子

行く場所も相手もない雪の中

米と味噌汁ただそれだけで足りている

許されるはずのなかった過去の傷

移転した実家の住所すぐ忘れ

鳥取県 田口 清帆

今日も雪か寂しい顔があら向く

三猿も我慢を楯に身を守る

迷い道こころの声を聞いてみる

今年こそ出して見せますハトポツポ

鳥取県 橋谷 静江

ハグをしてくれる孫から愛貰う
庭掃除少しでも一日暮れ
通院の予定暦に書ききれぬ
毎日のように何かを捜し物

鳥取市 大前 安子

疑えばあちこち視線重くなり
野の風に惑いは空へジャンプさせ
お雛様へ灯をつけて笑み貰う
散らし鮎土手のタンポポちよいと添え

鳥取市 奥田 由美

もう五年あの日の事が語れない
姑逝きて嫁とのバトルまた開始
鎖骨でてストップかかるダイエツト
暖冬も姑の法事に雪が舞う

鳥取市 高原 かおる

苦笑いひよいと出てくる独り言
寺参り歩幅に徳がついて来る
頑張るぞ指人形でリハビリを
取り合えずグッスリ眠ることにする

鳥取市 田中 天翔

終活をぼちぼちやるか人並に
何事もぼちぼちですの歳だもの
ほどを知るこれがなかなか難しい
いい出合いバーゲンセール五割引き

鳥取市 津村 律子

目鼻立ち変わらぬ雛も後期高齢
妻になり我が子抱きたい夢のまま
私よりお先に姪がおばあちゃん
かあちゃんと呼ばれないまま逝くのです

倉吉市 岡崎 美知江

くるくると迷ってもどる母の膝
本当の痛さは胸の奥にある
ごめんねがきつかけ絆深くなる
自分史の余白そろそろうめなくちゃ

倉吉市 田中 紀美恵

道草の好きな夫と生きてゆく
あれもいやこれも嫌だと義母だだと
人並みの寿命信じて生きてみる
友の誘い断りつづけ友なくす

倉吉市 中村 毅

五年目の悲しい春がやって来た
売れそうな腹の贅肉撫でてみる
寝め過ぎりや柩の中で照れるかも
コンビニがランドマークになる田舎

倉吉市 堀 かずこ

さみしくてもりガラスに愛と書く
骨董品素人目には高そうだ
清流の音が春呼ぶさわやかに
化粧して鏡を見れば歳はとし

境港市 中井虎尾

春よ来い肌荒れなおる春よ来い
名刺などいらぬ知る人知ればよし
聞き役はうなずき流す芸がいる
へボ将棋外野同士の指示戦

米子市 生田和之

イクメンを果たし損ねて議席退く
ケーキよりばた餅が好き酒も好き
デパ地下のレジに支払う駐車料
芹わらび蒔の臺さえ金で買う

米子市 池岡たけし

人生を耐えて忍んで福まねく
老いた身を振り返りみる人の道
長らえて生きたこの道味が出る
年重ね我が世の春を口遊む

米子市 田村周子

年老いて心配なのは火の始末
スマホってあんなに夢中になるものか
指示されて動くばかりじゃロボットだ
川柳の仲間みんな支えです

米子市 見山温子

うたた寝の夫の姿に老いを見る
娘の荷物釘煮が届き春を知る
重い腰動かす朝の熱いお茶
確執を流し紅さす母の旅

米子市 野川宣子

短い指も大事な役目こなしてる
他所様は詐欺に遭う程あるんだな
啓蟄へ遊びの虫がもぞもぞと
どの色で咲いても許す仲間たち

松江市 相見柳歩

ちよつとした仕草に動く恋ごころ
妻になるひとは百万石の価値
ときめきはないが愛着ありまして
素質だけでは三割に届かない

松江市 中筋弘充

自慢話ほとんどしないカスミ草
酔っ払いの悪口言わぬ酔っ払い
鯉節の十倍もする鮑買う
拌まれて喧嘩できない夫婦岩

松江市 福岡左余

播き時がはしゃぎ出したぞ種袋
草刈機老いを励ますうなり上げ
抜き手切る子の背押してる母の櫛
日本海泳いだ蟹だ今日は膳

出雲市 黒目英男

西沙にも力を伸ばし誇示をする
ひとり旅翼を広げ飛びたいな
根性と意地で勝ち取る夢ひとつ
心棒よしっかりせよと独楽が言う

安来市 原 煩惱児

風の色読んで明日を信じよう
何冀があるから老いの一日旅
老いの意地日帰り旅を無事戻り
結局はせんべい布団が性に合う

尾道市 小畑 宣之

逆風はのらりくらりと切り抜ける
気が重い体も重い欲しい夢
幼馴染みいまは茶飲み友達に
ままごとで分かる日頃の夫婦仲

尾道市 日谷 寛

身を守る嘘に苦悩が滲み出る
戦時下の嘘が平時に裁かれる
嘘だとは言わせぬほどにドキュメント
能面のような嘘です美しい

竹原市 土井 輝恵

国試受け自己採点に笑み浮かぶ
腰痛を騙しだまして介護職
孫が発つ私も始発ヨイドン
信念を貫き通し兄が逝く

府中市 田辺 和子

かわやぎの枝に跳びつく喜寿の春
愛用の夫の鞆亡父のもの
昨日も開いたページまた新た
掃除機の塵の嵩みて生きている

三次市 伊藤 寿子

鬼嫁がインフルBに負けた夜
火の消えた茶の間マスクの要る大人
無休店インフルBもよせつけぬ
江戸の敵打たぬ婆ちゃんお人好し

岡山県 高岡 茂子

花便り待っていたのに来る計報
霧の羽田上空で待つ一時間
こぶし咲く並木通りをいく柩
白も紅も負けずに香る沈丁花

岡山県 山縣 のぶ子

野を訪えばさあ踊ろうとつくしんぼ
うぐいすの声に抱かれて大山寺
まんじゅうの一ヶに皆な跳んだ頃
あさが来た女性の未来つれて来た

岡山市 伊藤 寿子

被災地の咲いた花からでる美談
慎ましく野に咲く花の息遣い
日向ほこ春が遊びにくる予感
春彼岸墓は一気に喋りだす

岡山市 藤成 操江

忙しい時が花だと今悟る
ひと手間を惜しめば軋みだす絆
返信がなくてコーヒー三杯目
人波を泳ぐ私の裏表

倉敷市 安東 澄

電車待ち老いも若きもスマホ見る
電車には若者ばかり座っている
店休日何も買わずに電車乗る
上手くないでも一応はお世辞言う

瀬戸内市 片島 秀月

まだ少し夢もあります老いの春
赤い糸繋ぎ直して先ず元氣
生きて行く証と試練逆らわず
老いて子に従う妻の演技賞

山口県 有海 静枝

虚仮威し中身の薄さ自覚して
おべんちゃらすらすら長く行き過ぎた
言い難い話くねくね尻つぼみ
春色のルージュ綺麗な嘘を吐く

防府市 坂本 加代

風になりあなたはいつも傍にいる
マラソンの二番を走る知能犯
孫いない猫の重さを抱いている
いつくるかあなたの気持ち待っている

高知市 三谷 松太郎

行き暮れてうしろ向いたら微笑みが
声かけて撫でてやったら膝のうえ
シャガールの空を舞う夢またいつか
根曲がりも根性曲がりも風のせい

福岡県 本田 さくら

チューリップ芽が出た早く笑顔出せ
みそ汁に野菜たっぷり愛煮込む
救急車どこにとまるか耳だんば
じじばの風呂におもちゃが何故ないの

北九州市 小松 紀子

あたりまえに感謝感謝足のけが
ネガティブな言葉は吐かぬ今日あした
メールも良いけど私は手紙書く
録画してコマーシャルゼーんぶ飛ばす

唐津市 岩崎 實

花マルの評価意欲をかき立てる
山椿一輪挿しの美しさ
こげ飯のうまさは今も舌にあり
疲れたの声と一緒に今日も暮れ

熊本県 中山 好打

入学と合格祝い二重そう
年金も薬と孫に消えてゆく
目力もなくなつていく高齢化
恵方巻きはおぼる顔のこっけいさ

山鹿市 前田 幸子

晴れた日は首だけ外に出してみる
毛筆のかすれは私の手法です
化粧して白髪かくしの帽子です
お散歩に出かけたおばあ戻らない

山鹿市 三谷直男

何もかも深いお詫びですます気か
若者よ目指すな政治屋教職員
だからとてプロと巨人も考えもん
世界一くだらぬテレビは日本国

札幌市 斉藤宏子

交差点ベンギン歩き春遠く
飛ぶようにアイスバーンのランドセル
花柄のマスクお揃い通学路

三月の遠慮しがちなもどり雪

札幌市 富永恵子

まだ出来るもう出来ないと不安な日
ひとり言心の風が起き出して
旅の宿群れてる鯉に話しかけ
折れた日もあったね花柄ワンピース

登別市 小林碧水

お月様愚痴を聞かせて済みません
寂しいねと聞こえぬ労働歌
遇ったのは病院でしたそれ以後は
新しい背広と仲がいい四月

弘前市 工藤京子

メーデーは出会い記念日亡き夫
デートならリングの花の咲く津軽
岩木山甲田の山にミスリンゴ
息子らに助け守られ日々生きる

弘前市 高森一吞

叔父が乗る零戦輪廻どのあたり
叔父の死も一本松も暮れなずむ
終章は神に仏に逆らって
あの星に居る母の顔父の顔

塩竈市 木田比呂朗

錠剤も湿布も準備して五月
暗号のような言い分けする連夜
仕舞湯にたれば浮かべ寝付かれず
喜寿すぎてまだ終活が揺れにゆれ

つくば市 嶋本 喬

暖冬だ踵の輝が治ってる
赤い実がすべて食われた冬の庭
鶯の声は未だでも餅と梅
ハボマイの他の三島も読めるかな

松戸市 山下明子

野遊びの指先匂う蓬草
指あそび綾とり影絵ボケ防止
めずらしや黄カラスウリは野にありて
したい事あまた身は宙ぶらりんこ

東京都 高岡弥生

整骨院毎日通っておしゃべりを
憧れの独り暮らしは年老いて
心配をする子いるうち親は花
人は皆良いも悪いも紙一重

(小田幸子さん、渡辺芳子さんは46頁にあります)

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

バーで会うだけの友なりバーで会う
友達の定期を借りて来たデート
父の恋茶飲み友達などという
巢立つ日は校長さんからお辞儀する
その恋も最初は歩くだけだった
火は揺れただけ一匹の虫が死に
生来の美貌に金が加わりぬ
顔が近づき体温計をつまみ出し
美智子妃も旅立つ顔になり給い
飯食うて来たというのへ飯を出し
嫁ぐ朝父の散歩に添うて出る
大臣の読む新聞を妻も読む
人生の終りびったりした棺

青年の眉墨染めに著し
清貧を通せば白髪透けてくる
無と書いて和尚祇園へ出かけられ
父親の徳が少うしずつ分かり
歌枕牟婁の旅よし山と海
初恋に竹馬高く高くする
絵の中の馬車にいるのは君と僕
靴履いた頃から旅は墮落せり
悪名も売ればよしとボスらしい
蠅叩き欲深い目になっている
月冴えてくる酒冴えてくる独り
叱るのに長いせりふとなりけり
ガラス吹くおとぎの国の顔をして
咳込んで名句を一つ逃したり
ポスターを女優の卵貼りにいく
五色豆の色の際立つ十二月
ものさしへ祖母の背筋はしゃんとする

英語 de Senryu ⑤③

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

いつしかに 母とおんなじ 美顔水

unconsciously

I use the same lotion

that my mother used to

財産がハッキリわかり 養子逃げ

the received property

is well known

adopted son disappears

unconsciously 知らぬ間に *use* 使う *same lotion* 同じ化粧水 *received* 受け取った
property 財産 *well known* よく判る *adopted son* 養子 *disappear* 消える

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳⑱

さげて来た鼠に巡査欠伸する 美 扇

(*Bringing along a rat, / The policeman / Yawns.*)

bring along 物を持ってくる *rat* 鼠 *policeman* 巡査 *yawn* 欠伸をする

前号に続き、動物を描いた川柳を紹介しましょう。嫌な鼠が登場します。ブライスは、「派出所に運ばれてくる鼠には、いくばくかのお金が支払われた時期があった。何も悪いことは起こらないような温かい午後のこと、巡査は居眠りがちに机にもたれていた。そこに子供が鼠をぶら下げて入ってきた。巡査は業務を果たしながら、目を開けて欠伸をした。」と説明しています。今は外来種のヌートリアやあらいぐまが生息し、田畑や家庭のごみをあさります。都会の夜は肥満のドブ鼠が走り回ります。そして日中といえども残虐な事件が頻発する昨今、派出所に持ち込まれた鼠の川柳に昭和の長閑さを感じます。ブライスは巡査のことは *policeman* としています。現在は男女とも在職する警官を *police officer* と表現することが多くなりました。作者の美扇は不詳です。

誹風柳多留一二篇研究 35

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清 博美

280 哥で昇進シまつたくのひろひもの

細井 頼政は保元・平治の乱で大活躍をしたのに恩賞がお粗末だった。そこで、「人知れず大内山のやまもりは木がくれてのみ月を見るかな」という歌を詠んだところ、正下四位を賜り昇殿をゆるされたが、さらに「のぼるべきよりなき身は木のもとにしるをひろひて世をわたるかな」という歌を奉じたら、三位を賜ったとか。歌を詠んで昇進できるとは、全くの拾い物だといふべき。

人知らぬ山から椎をひろい上

頼政の三位ハほんのひろいもの

六三
四三九

小栗 賛。いうまでもなく「しいを拾いて」

を踏まえているのが手柄というだけの句。

清 同右。

281 そらつ茶をのみく見たりみられたり

細井 劇場、花の山、お講など見合に多用されたが、浅草の二十軒茶屋もよく利用されたらしい。一軒だけでは近すぎるので二軒予約しておいて、男女双方がお互いを観察する、というやり方で本人たちは気もそぞろで、上の空でお茶を飲みながらちらちらと相手方を見ている。湯飲みは空かも知れない。

水茶やを忒けんふさげて見つ見せつ
日をゑつて茶をのみに行はつかしさ

五八

伊吹 賛。一般の水茶屋より二十軒茶屋の方がふさわしいというところか。

小栗 賛。「そらちや」(空茶)は、「日国」に「茶

を飲むまねをすること」、「江戸語の辞典」に

は「空つ茶を飲む」を立項して「からの茶呑み茶碗を口へ運び、茶を飲むように見せかける」とあり、いずれも主題句を引用している。

一方、佐藤要人先生は「水茶屋風俗考」で「気もそぞろで飲んだ気もしない茶」と傍注しておられ、多少ニュアンスが異なる。主題句の場合は句意に大差はないが、言葉の解釈としては、「上の空」の「空」なのか、「見せかけ」の「空」なのか、きちんと押さえておく必要があると思う。「空喧嘩」「空言」「空小便」など、後者の例はいくらもある。

清 小生は、佐藤氏説のように考えていた。

282 わねに青すじで水ツ子だいて居る

細井 胸にも刺青のある厳めしい親分の腕の中に、柔和な生後間もない赤子が抱かれている。硬軟の絶妙な取り合わせ。

さあやろう来いとおやぶん水子抱き

二二
二二〇

赤子をもおやぶんやろうよばり也

天五
智八

小栗 「青筋」は他に類句もないので、刺青と決められるかどうか迷うが、当時はまだ極彩色ではなく、筋彫だったものか。他の文献

で青筋Ⅱ刺青の例を知りたい。
清 右に同じ。あれば用例を知りたい。

細井(再説)「日国」に立ち戻ると「(青筋)②皮膚を透かして、青く見える静脈」とあるので、「静脈が腕に青々と浮き出ている親分(または老人)が赤子を抱いている」としたらどうだろう。

伊吹 この句の第一印象は、赤ん坊に授乳している若い母親の乳房に浮き出た青い静脈。しかし単なる描写句なので没。

清 案外、伊吹説が正解かも知れない。若い母親の透き通った肌か。

283 ぼつずいの小袖を九月こしらへる

細井「前太平記」巻第三、「亡瑞鑑事」に日置九郎が非常に派手で立派な鎧を着て手柄を立てたが、將軍の源頼義に目立つと狙われ易く危険だ、と窘められる場面があるが、我が息子殿は八月十五夜だけでは足りず、九月十三夜に向けて、途方もなく派手な小袖を作ろうとしている。困ったものだ。

ぼつずいのなりだとおやち軍者也 一四四
ぼつずいの夜具と仕立やがく者也

伊吹 句の主題は、困ったというより、『前

太平記』と同じく、息子の将来に暗雲が立ちこめている、と言いたいのだろうか。

小栗 賛。八月十五日の月見の紋日を仕舞い、片月見はならぬと後の月まで仕舞うに及んで、勘当或は座敷牢となるというパターン句の一。八月は帷子を着ていくが、九月は小袖になるということ踏まえた句作で、小袖自体が派手かどうかは、直接問題ではない。帷子と小袖どっちも片月見 一四六九

清 小栗説賛。

284 関札に淋しく僧の帰宅なり

細井 関札は諸大名が宿駅の本陣に宿泊する時、大大名は宿駅の両端に、小大名は本陣の前と来た方角の宿駅の入口に立てる木札で、これが立っていると一般客の利用は出来なかった。宿場にとっても市民にとっても至極迷惑だった。ここ品川宿では、増上寺の僧が登楼しようとして来たところ、関札が立っていたので、致し方なく、すこすこと寺へ帰ることになった。

関札が立って品川げびるなり 七二八
関札か有てめしもり蓋タをされ 明七義二

清 賛。品川宿に関札が立つこともあったのですネ。ちよっと急げば屋敷だったのに。さ

て、実態を詠んだ句か、作った句か。

285 是から八鬼に成りなと後家にいひ

細井「これからは言い寄る男があつても心を鬼にしてその誘惑を払いのけなさい」と後家に忠告している。というのだが、さて、その発言者は誰なのか。親なのか、それとも我こそはという野郎なのか。

かたい後家男をたて、やらぬ也 一二七

山田 賛。但諺「心を鬼にする」を踏まえる。

清 賛。あえて誰と特定することもないのじゃないですか。

286 是もふんどしたとかつぎけて通り

細井 年越の夜に来年四十二の厄年になる男は自分の褌を人知れず、四つ辻へわざと落として来ると災厄を免れるという俗信があつた。年越し蕎麦の出前持ち(担ぎ)は暗がり、で幾つもの褌に出合、蹴っからかして行く。冬から春への節分の夜のこと。

ふんどしをわざ／＼落させつかわり

天七九二五

山田 賛。厄落しの褌。

清 賛。

愛染帖

新家 完司選

(投句 284名)

駐車場どの車から降りたやら

長岡京市 山田 葉子

(評)巨大マーケットの広大な駐車場。うっかり確認もせず降りてしまったのだ。重たい買物袋を提げて探し回るのは大変だ。

スクラムが堅い血圧血糖値

米子市 竹村紀の治

(評)「がんばろうぜ!」と励まし合っているかのように一向に下がらない血圧と血糖。酒を止めるのがベストだが、それは無理。

何度張り直しただろう化けの皮

青森市 守田 啓子

(評)剥がれるたびに丁寧に張り直してきた化けの皮。だが、その厳しい修行のおかげで、本物の皮も磨きがかかって美しくなった。

妖怪は昔妖精だったとか

大阪市 井丸 昌紀

(評)フェロモンを放出している年頃は誰も妖精。いわば「番茶も出花」だが、歳月を経ると「出涸らし」になるのはやむを得ない。

女子会の席は過呼吸症候群

河内長野市 山岡富美子

(評)おしゃべり競争のような女子会。ひと呼吸置くと割り込まれてしまうので、機関銃のように喋りまくらなければならない。

共通の話題にならぬ頭の毛

堺市 奥 時雄

(評)皺やシミや体形などと同じように個性が表われる頭の毛。誰かが不愉快になるようなデリケートな話題は避けたほうが無難。

いい方に解釈すればいい夫

鳥取市 前田 楓花

(評)長所にも短所にも受け取れるのが「人の性格」の面白いところ。願わくば、ずっといい方に解釈していてほしいものである。

新聞のチラシがきめる晩ごはん

八尾市 村上ミツ子

(評)家族からのリクエストに応じているとたちまち財政破綻。チラシの「特売品!」からレシビを練る。賢い主婦のお手本。

酒飲んで今夜はメリーゴーランド

笠岡市 藤井 智史

(評)コントロール不能に陥り粗暴になってしまふのは飲み過ぎ。「うーん、今夜はいい気分!」と、ふらつくくらいで収めたい。

置き土産へこむ座布団酒の染み

男鹿市 伊藤のぶよし

(評)親しい仲間を自宅に招いて愉快的宴

会。盛り上がったのは嬉しいが後片付けが大変。座布団のへこみは直るが酒のシミは……。

佐賀県 真島久美子

手料理でブラックホールへと誘う

大阪市 坂 裕之

激安のチラシにサブリまた増える

河内長野市 穂口 正子

三千円当たったはずの籤が無い

松原市 森松まつお

今のところ予定にはない舞踏会

八尾市 宮崎シマ子

昔のロス取り返すため生きている

羽曳野市 永田 章司

黙祷の付いた記念日欲しくない

海南市 小谷 小雪

昔なら減相もない食べ残し

大阪市 藤田 武人

隣より斜め向かいのかたえくぼ

奈良県 渡辺 富子

お隣もそのお隣も杖をつく

豊橋市 藤田 千休

キャスターの口にチャックをする政治

シドニー 坂上のり子

玄関に男靴置き見張らせる

神戸市 奥澤洋次郎

子が同じ校門くぐる春日和

大阪市 栢尾 奏子

嘘つきの特性持ち合わすヒト科

岡山市 永見 心咲

鮮度なら苺に負けぬ触れてみて
寝屋川市 岡本 勲

妻に説教されるのいやで指示仰ぐ
榎原市 居谷真理子

ぬるい湯で洗うとぬるい顔になる
宝塚市 太田としお

同じ惚けでも一番恐い平和惚け
横浜市 川島 良子

人生の最後のモチ期かもしれない
河内長野市 坂上 淳司

記念日を上手に作る語呂合わせ
島取市 倉益 一瑤

ブランドの関鯖実は回遊魚
田辺市 岡本 昇

夫から花をもらった事がない
吉本に行ってみようか雨三日

オレオレでいいから電話かけてこい
東京部 川本真理子

年寄りに活躍せよと無理言うな
ミサイルも飛び 今日洗濯日和

不可解と青空に手で大書する
豊中市 藤井 則彦

逃げ足が早いと転ぶのも早い
物言わぬ夫婦に猫も遠慮気味

和歌山県 森下よりこ
年金のくらし忘れて翔び過ぎる
五十年自分が植えた柿を伐る

大阪市 柴本ばつは
太くても太つ腹ではない夫

自慢話は二分以内にしましようよ
松江市 中筋 弘充

電話して来ぬと惚けると子を脅す
箕面市 出口セツ子

黒田節しばらく聞いたことがない
三田市 堀 正和

ひとり居てうさぎ小屋さえ広い夜
堺市 矢倉 五月

横になってカレー食べてる独りばち
青森県 松山 芳生

かんたんに曲る背筋もわたくしも
藤井寺市 若松 雅枝

惚けてはおれぬ身辺整理終えるまで
若いとき繋げなかった手を繋ぐ

若かったなあ素直にいい句詠んでおり
古い柳誌読むと捨てられなくなった

大の男が独りブランコ漕いでいる
松山市 栗田 忠士

うるさいが居ぬとさびしい同居人
鳥取市 奥田 由美

逝くときも夫に内緒の夏の恋
断捨離が姑の匂いも消していく

箕面市 中山 春代
長い脚組んで車内の通せんぼ
押し入れに眠ったままのベアルック

大阪市 佐藤 忠昭
爺ちゃんは廃車したのに孫新車

鳥取県 斉尾くにこ
ハンドルを卒業したら足がない

大阪市 高杉 力
電気毛布仕舞う頃には扇風機

奈良市 大久保眞澄
猛妻に注意と門に貼っておく

奈良市 米田 恭昌
貫い手のあった我が家のバラサイト

西宮市 緒方美津子
ベテランの車掌の言葉聞きにくい

岡山市 丹下 凱夫
退屈な一日だった言うて寝る

松山市 神野きつこ
料理とは縁遠そうなネイルケア

松江市 石橋 芳山
座礁したまんまですけど良く喋る

高槻市 片山かずお
手が口ほどに動けば偉くなれたのに

豊中市 松尾美智代
食み出した脂肪を嘆く春の服

羽曳野市 吉村久仁雄
神棚に御札のような宝くじ

箕面市 広島 巴子
元気です終活よりも就活へ

鳥取市 池澤 大鯨
3・11わが家の備え特になし

弘前市 高瀬 霜石
体調管理ビールをうまく飲むために

八尾市 田邊 浩三
万策も尽きた一杯飲むとする

紀の川市 北山 絹子
悪友が今日もてぶらで呑みにくる

倉吉市 大羽 雄大
遠来の友だ地酒と待っている

三田市 村田 博
菜の花は見ても食べても酒の友

堺市 加島 由一
図書館で学び仕上げは立ち飲み屋

堺市 内藤 憲彦
今日の鬱また居酒屋へ捨てに行く

茨木市 藤井 正雄
ライバルの狙いを探る酒を注ぐ

奈良市 辻内げんえい
胸の奥さらしてやっと仲間入り

和歌山市 楠見 章子
酔った時だけの裸のお付き合

三田市 北野 哲男
浄土より馴れた浮世の酒の味

神戸市 松井 文香
過去形が出て来た酔いも深まった

大阪市 古今堂蕉子
言い訳はせぬ方がよい千鳥足

香南市 桑名 孝雄
喜寿組に奉られて二日酔い

枚方市 寺川 弘一
五七五に鬱を沈めている余生

倉吉市 中村 毅
川柳のお陰で指はまだ達者

豊中市 池田 純子
閉め切った窓を春風ノックする

香芝市 大内 朝子
ツンツンと天突く新芽からファイ

堺市 澤井 敏治
義理堅く花粉ゴキブリやつて来る

河内長野市 木見谷孝代
元気かと訊いてすぐ切る子の電話

大阪市 伏見 雅明
讃岐にもうどんな嫌いな人がいる

大阪市 谷口 義
行きがかり上むつかしい顔をする

神戸市 上田 和宏
ごみ屋敷蟲は都と思うだろ

橿原市 安土 理恵
閉店セールほんまに閉店しやはった

橋本市 石田 隆彦
マイホームと二食欲しがる野良の犬

島取市 福西 茶子
帰れ帰れとカラスが見張る墓参り

長野県 丸山 健三
本心で拍手するとはかぎらない

尼崎市 長浜 美籠
割箸ボン動き始めてきた遺る気

藤井寺市 鈴木いさお
推敲を重ねて書いた離縁状

瀬戸内市 宮宅比佐恵
まだ八十路電池は切れていませんよ

和歌山市 上田 紀子
ナポリ見る迄は死ぬねと友元氣

羽曳野市 宇都宮ちづる
笑顔誉められ急に乙女になっている

河内長野市 梶原 弘光
健康な証拠見事な深呼吸

和歌山市 古久保和子
デイサービスの車に町が攫われる

弘前市 吉川ひとし
真っ直ぐな道を歩けぬ年金日

唐津市 坂本 蜂朗
ワイシャツのボタンかじかむ今日の冷え

和歌山市 玉置 当代
花の季節になつても膝はまだ痛む

河内長野市 村上 直樹
介護して知った介護のむつかしさ

三田市 東内美智子
夫人院一人暮らしの初体験

島取市 岸本 宏章
領域を獣に返す過疎進む

西宮市 福島 弘子
ぎくしゃくへ特効薬の孫が来る

つくば市 嶋本 喬
育休で公園デビューババが行く

三原市 鴨田 昭紀
 店頭でアクビしている招き猫
 米子市 森脇 麗
 招き猫抱いても景気上向かず
 枚方市 丹後屋 肇
 亡妻と繋がっている阿弥陀経
 池田市 上山 堅坊
 亡き妻にお休み言うて床につく
 富田林市 片岡智恵子
 ふたり居てやすらぎ気づかないままに
 大阪府 高木 道子
 健やかに老いた手の皺顔の皺
 熊本市 杉野 羅天
 ソーラー発電火星基地かと思わせる
 防府市 坂本 加代
 警官も人間だから要注意
 四条畷市 吉岡 修
 リモコンが三つ一瞬また迷う
 三田市 上垣キヨミ
 別嬪でないから誰とでも話す
 豊中市 水野 黒兎
 太つてもいいフレンチのフルコース
 大阪市 大川 桃花
 本人の予定無視して来る病
 鳥取県 山下 節子
 住所氏名生年月日まだ言える
 倉吉市 山中 康子
 忘れる日きつと来るから書いておく

岸和田市 宮野みつ江
 絵本には泣き虫鬼もいるんだね
 富田林市 山野 寿之
 定年後揉み手治らぬ太鼓持ち
 倉吉市 岡崎美知江
 死ぬ時は一緒よなんてみんな嘘
 河内長野市 辻村 ヒロ
 大阪弁住めば都の半世紀
 羽曳野市 中川ひろ介
 腕昆布削る技術がなにわ流
 紀の川市 楠原 富香
 スープの冷めぬ近さで困る事もある
 紀の川市 山東日出男
 卓袱台にでんと座っている昭和
 岩出市 村中 悦男
 半額は賞味期限を忘れさせ
 松山市 柳田かおる
 良心が頼りなくなる独りきり
 藤山市 二階 幸子
 捨てられずたまに着てます派手な服
 和歌山市 喜田 准一
 的を突く妻の指摘へ黙秘権
 岡山県 田中 恵
 物差しで測ったように畝を切る
 河内長野市 松岡 篤
 苦虫は露天風呂には似合わない
 府中市 田辺 和子
 別宅の息子もどって食う煮しめ

京都市 都倉 求芽
 マンションの隙間隙間に道がある
 京都市 榎本 宏子
 玄関に花一輪のおもてなし
 枚方市 海老池 洋
 忙しない人間笑う象の鼻
 鳥取市 吉田 弘子
 ダイエット忘れてました嬉しい日
 紀の川市 辻内 次根
 繰り言を聞いてやるかと受話器とる
 和歌山市 土屋起世子
 颯爽ともう歩けないハイヒール
 大洲市 中居 善信
 反論をしない男を軽く見る
 大阪市 田中ゆみ子
 傷つけて傷つく覚悟なく孤独
 高槻市 原 洋志
 春一番 画鋌だらけの掲示板
 岡山県 山縣のぶ子
 良寛の軌跡たどってヤマツツジ
 今治市 渡邊伊津志
 長生きの夢が叶って惚けている
 河内長野市 大島ともこ
 忙中閑猫を追いかけ日が暮れる
 米子市 成田 雨奇
 野におけば鉛筆さえも新鮮だ
 和歌山市 福井 菜摘
 言葉では伝えきれずにハグをする

共選欄

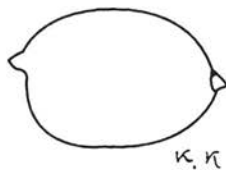
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 381名)



「削る」三浦 強 一選

シンプルがベストと言うて削られる
身を削るほどの恋などしてみたい
身を削り駆けた昭和の燃え残り
これ以上削ると骨に突き当たる
明日は雨予定を一つ削られる
オブションを一つ削ってフルムーン
粗削りの球児にプロの目が光る
粗削りながらパワーは秘めている
リストラで削られそうなのは私
晩酌を削れと迫るゼロ金利
削るのはお酒と妻のご裁決
虚飾みな削って差して勝負する
見積書届いて夢が削られた
止められぬ時間に命削られる
いつからか削られてゆく恥じらいよ

岡山県	山縣のぶ子	神戸市	細川 花門	神戸市	奥澤洋次郎	藤井寺市	高田美代子	京都市	都倉 求芽	姫路市	古川 奮水	大阪市	升成 好	堺市	村上 玄也	奈良市	辻内げんえい	堺市	柿花 和夫	河内長野市	村上 直樹	高知市	小川てるみ	大阪市	柴本ばっは	弘前市	吉川ひとし	鳥取市	倉益 一瑤
-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	----	-------	-----	--------	----	-------	-------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

「削る」長 浜 美 籠 選

晩酌を削ると生きた心地せぬ
お昼代もう削れないワンコイン
削ったら三分間で済む電話
年金暮らしおかず一品削られる
身を削る我が子のために命まで
年金の目減りへ削る趣味ひとつ
これ以上削るところのない財布
削られて主役を降りた花カツオ
粗削りの球児にプロの目が光る
ワンコイン弁当二つ買い笑う
鉛筆の削り方にもある個性
とんがった鉛筆に見る几帳面
預けても手数料いるゼロ金利
地を削る津波へ用意怠らぬ
少年の未来削ってどうするの

鳥取県	竹信 照彦	奈良市	米田 恭昌	西予市	黒田 茂代	和歌山市	楠見 章子	寝屋川市	富山ルイ子	横浜市	菊地 政勝	和歌山市	古久保和子	西宮市	足立 茂	大阪市	升成 好	大阪市	川端 一步	佐渡市	高野 不二	三田市	久保田千代	堺市	大隅 克博	八尾市	宮崎シマ子	奈良市	加門 萌子
-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	------	-------	-----	------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------

一徹を通した父の肥後守	大阪市	津守	柳伸
脳天も削られている齒科の椅子	貝塚市	吉道あかね	
思い出のふるさと削る核汚染	堺市	澤井	敏治
削ったら三分間で済む電話	西予市	黒田	茂代
夫よごめん食費削って趣味に飛ぶ	鳥取市	福西	茶子
かつお節削る母さん見て育ち	藤井寺市	鴨谷瑠美子	
しゃかしやかと潮の香削るかとおおし	豊中市	水野	黒兎
今日も無事願ってかつおぶし削る	和歌山市	玉置	当代
柚の皮仕上げに削り母の味	堺市	矢倉	五月
これ以上削ると本音でてしまう	瀬戸内市	東横ますみ	
毒舌も削り落せば愛が見え	河内長野市	辻村	ヒロ
その先の修羅は添削許さない	大和郡山市	坊農	柳弘
鼻ちよつと削ってやろうピノキオの	桜井市	安土	理恵
営業がしのぎを削る棒グラフ	大阪市	高杉	力
正論を削って海を埋め立てる	沖繩県	森山	文切
周平に睡眠時間削られる	大阪市	大川	桃花
道場に鎬を削る竹刀拵	唐津市	山口	高明
堅物を世間の流れまるくする	三田市	九村	義徳
年毎に削られちびて行く記憶	岸和田市	宮野みつ江	
削除キー押してしまつてからの悔い	東大阪市	佐々木満作	
唇に歌哀しみを削除する	海南市	堂上	泰女
鉛筆を削るとしゃんとする左脳	富田林市	中井	アキ
鉛筆を削ると見えてくる母校	大洲市	花岡	順子

味気ない卒業証書の以下同文	西宮市	福島	弘子
憤るペンで削っていく不正	富田林市	山野	寿之
煮え切らぬ男に押した削除キー	三田市	上垣キヨミ	
身を削る思い分からぬ反抗期	鳥取市	加藤	茶人
頑として第9条は削らせぬ	尼崎市	清水久美子	
少子化が日本の柱細くする	高槻市	富田	保子
荒削り円空仏に愛がある	札幌市	小沢	淳
鉛筆を削り明日の夢を編む	箕面市	大浦	初音
営業がしのぎを削る棒グラフ	大阪市	高杉	力
定数を削る約束何時になる	三田市	堀	正和
睡眠も削った入試さくら咲く	大阪市	宇都満知子	
削るだけ削って肥える国防費	松江市	藤井	寿代
介助犬身を削る程主に仕え	富田林市	片岡智恵子	
ホワイトデー妻も外されないひとり	堺市	加島	由一
消しゴムの優しさ欲しい削除キー	弘前市	稲見	則彦
身を削り尽して今日は定年日	茨木市	藤井	正雄
削ったらメシフロネルになつていた	大阪市	原田すみ子	
削られたそが言いたいとこだった	大阪市	古今堂蕉子	
色鉛筆孫と絆のヌリ絵ぬる	弘前市	高森	一吞
愚痴よりも小遣い削る山の神	八尾市	前田	紀雄
いつからか削られてゆく恥じらいよ	鳥取市	倉益	一瑤
年金を削って孫のおひな様	岡山市	伊藤	寿子
凝り性の夫が削る鰹節	三田市	北野	哲男

鉛筆を削り明日の夢を編む
鉛筆を削れば言の葉に鬨志

添削でスリムになった私の句

添削をつきつめ元の句に戻る

身を削り消しゴム佳句を待っている

削るだけ削った言葉隙が無い

魂を削り続ける一行詩

ライバルとしてのぎを削る一行詩

百句から十句に削る選をする

削り過ぎもとの姿を見失う

お花代削りましたよ仏様

わが春闘小遣いさらに削られる

福祉費を削って戦車弾丸を買い

議事録を削り失言消したがる

年金を削る算段またしてる

頑として第9条は削らせぬ

削るもの削り匠の技光る

荒削り円空仏に愛がある

削られてみ仏として拜まれる

秀句

改竄で平和を削ることなかれ

能面に削り出される人の業

自惚れを削ると風がやわらかい

大浦 初音

箕面市 松井 文香

神戸市 山中 康子

倉吉市 大本 和子

尾道市 石谷美恵子

鳥取県 前田 楓花

鳥取市 平井美智子

大阪市 松尾美智代

豊中市 土橋 螢

鳥取市 川本真理子

東京都 田中 天翔

鳥取市 清水 英旺

京都府 小林 碧水

登別市 生田 和之

米子市 津田シルク

藤井寺市 清水久美子

尼崎市 武本 碧

和歌山市 小沢 淳

札幌市 谷口 修平

三田市 大内 朝子

香芝市 大坪 一徳

川西市 太田扶美代

藤井寺市

身を削りこの人立てて尽くします

無理をせず一つ削った予定表

思い出のふるさと削る核汚染

お花代削りましたよ仏様

私色削ると風も和いでくる

老いという時間が削る記憶力

肥後守筆箱で鳴る昭和の日

歳月が無情に削り去る若さ

美辞麗句削ると君の本音見え

粗削りのままに傘寿も過ぎました

年金の削減ポディーブロー効く

身を削る母の棺は軽かった

削りたくない日本の言葉わびとさび

無駄省きのつべらぼうになる暮し

コストダウン先ず削られる派遣職

子のために今日もせつせと脛削る

四捨五入されてリストにない私

削るだけ削れば鬼になるお面

溢れ出る思い鉛筆尖らせる

秀句

焼け野原母の着物が米になる

将来に期待がもてる粗削り

住所録計報来る都度薄くなる

伊丹市 平井 富夫

芦屋市 黒田 能子

堺市 澤井 敏治

鳥取市 田中 天翔

枚方市 海老池 洋

鳥取市 石谷美恵子

宝塚市 丸山 孔一

香芝市 大内 朝子

岸和田市 宮野みつ江

松原市 森松まつお

枚方市 丹後屋 肇

芦屋市 竹山千賀子

尼崎市 藤岡 りこ

奈良市 渡辺 富子

池田市 上山 堅坊

岡山市 紫 しめの

枚方市 伊達 郁夫

青森県 松山 芳生

和歌山市 武本 碧

大阪府 坂 裕之

弘前市 福士 慕情

三田市 村田 博

民族の詩歌 (47)

北米万葉集・矛盾の中で

三 好 専 平

『台湾万葉集』が主として現地台湾の人たちによって編まれたものであるのとは違って、これは日本から移住した邦人たちの短歌を集めたものである。その特徴を大岡信は「矛盾した心のねじれを歌う」と。

一旗揚げようとして移民に加わったけれども、こと志と違つての、差別と貧困のなかでの、苦しい生活、そこから生み出された歌。酒・女・バクチに身を持ち崩す人も多かった。集英社新書に約五百首。その一端を。

1、日中戦争が始まるまで

独りにて降るアメリカに年を経て廻りあはなむ人よいづくに

高柳 沙水

異国での孤独を詠む。どれほどさみしかったことであろうか。

今年こそ故国に錦飾らんと意気まきかへすわがレタスなり

移民の多くが農村からであつた。朝は朝星、夜は夜星。

新しき時代が生める〇〇××日本の書の読み難くせし

泊 良彦

治安維持法による言論弾圧。日本では詠めない歌である。かれはまた、「日本のファッショ運動あげつらひこの国人ら吾らを圧迫す」と米国を詠む。

2、日中戦争が始まつて

鬼神さへ泣かむ勇氣とふるさとの新聞は弟の戦死を書けり

長穂悠紀子

侵略戦争を始めた祖国を信じ、「お国のために」逝つた弟も永遠なれ、と。

大和魂にアメリカカンスピリッツ織りそへて世界平和に道しるべせよ 馬場 白川
聖戦を信じ、アメリカを信じ、まさかそのアメリカと戦争するなんて。

一生を賭けし若さを今にして思ふも笑まし写真結婚

岩田 立枝

当時、移民や軍人との写真結婚は、当たり前であつた。不安と希望。

3、太平洋戦争が始まつて

名にしおふ日系市民の矜持もて米国軍人の範たれ吾子

塚本星見草

日系二世たちは戦争に駆り出される、というより自ら進んで戦争に協力し、アメリカに忠誠を誓つた。

入所手続き済みて入り来しバラックの粗床の上に涙おちたり

中村 郁子

なおかつ、強制収容所に入れられる。

祖国より慰問の書物着きにけり万葉集も薬紙にして

秀島 孤舟

乾坤の破れて崩えんか硫黄島の決戦

ニュースにまじろ轟音

岡田 文枝

1945年3月17日、日本軍玉砕と発表される。死者一万七千人。

「配る」

(投句 231名)

黒岩 靖博 選



こつちにも配られてきた春の風
川柳の入り口えんぴつを配る
隔てなく笑顔配る赤ん坊
配意には配意感謝も盛り合
何げない心配りが身に染みる
心配りが上手になつて狭くなる
心配りの域は越さない御節介
どの子にも同じ心配りしたつもり
配られたマイナンパーが眠つて
初めての名刺法事で配つて
心配りがかえつて仇となる迂闊
産声が過疎地に配る安堵感
生老病死最後のカード待つ身なり
待ちぼうけ今日も素通り郵便屋
お裾分けぐるぐる回りまた回る
旅費よりも高くついたぞ土産代
被災地へ笑顔配るボランティア
心配りで止まらぬ軒決め手なく
神様が配ってくれた羞恥心
目配せへさつと応える飲み仲間

四條巖市 吉岡 修

河内長野市 梶原 弘光

池田市 奥園 敏昭

岡山市 永見 心咲

大阪市 藤原千恵子

鳥取市 福西 茶子

大和郡山市 坊農 柳弘

可見市 板山まみ子

松江市 中筋 弘充

堺市 奥 時雄

東大阪市 佐々木満作

米子市 後藤美恵子

弘前市 高瀬 霜石

シドニー 坂上のり子

河内長野市 大島とも子

三田市 堀 正和

藤井寺市 鈴木いさお

河内長野市 松岡 篤

藤井寺市 太田扶美代

池田市 上山 堅坊

池田市 上山 堅坊

心配りの届いた嫁で疲れます

老人へ笑顔配るボランティア

まごころを無償で配るボランティア

目配せをしなきゃいけない人が来る

葬儀屋が配る予約のCM紙

お近付きの印配ったのは昔

幸せを宅急便が持つて来る

マイナンパー否応無しに配られて

海の幸鮮度一番おすそ分け

人間のドラマを配るローカル車

号外の見出し吸い込まれるマナコ

平等のつもりで配る不平等

佳句

いませんかねずみ小僧次郎吉は

心配りがうまく出来ない鬼瓦

ばらばらに配ってくれた目鼻口

母ちゃんの包丁がさえる五等分

すみっこの子にも笑顔配りたい

人

揚げひばり天から春を配ってる

地

心配りを汲みとり合える人という

天

突然にテスト用紙を配る鬼

軸

ご近所に配る自慢のくぎ煮たく

貝塚市 石田ひろ子

大阪府 米澤 俣子

富田林市 山野 寿之

大阪市 坂 裕之

橋本市 石田 隆彦

河内長野市 坂上 淳司

笠岡市 藤井 智史

堺市 矢倉 五月

河内長野市 木見谷孝代

三田市 上垣キミヨ

青森市 松山 芳生

神戸市 松井 文香

大阪市 江島谷勝弘

弘前市 福士 慕情

大阪市 榎本日の出

香南市 桑名 孝雄

海南市 小谷 小雪

豊中市 水野 黒兎

長岡京市 山田 葉子

弘前市 稲見 則彦

河内長野市 黒岩 靖博

河内長野市 黒岩 靖博

河内長野市 黒岩 靖博

河内長野市 黒岩 靖博

河内長野市 黒岩 靖博

河内長野市 黒岩 靖博

河内長野市 黒岩 靖博

河内長野市 黒岩 靖博

「自信」

(投句 235名)

玉置当代選



花いちもんめ自信があつた記憶力
熱唱をしている酔っているマイク
まだ行ける自信背な押すひとり旅
ミリのミリ任せてくれと町工場
石の目を見抜く石工にある自信
自信などないが笑顔を忘れない
恥かいたことが自信になつて
下積みで長さを自信つけた芸
幾たびの修羅場くぐつて得た自信
練習を重ねて自信積み上げる
努力する気質貫き湧く自信
練り上げた技は自信を裏切らぬ
苦い水自信の素になりました
判断は正しかったと思つて
白寿まで歩きますよと足の裏
取り戻す自信脳トレ五七五
自信たつぷりいつか時代を制覇する
健康の自信過剰が落とし穴
長生きの自信ぐらつく日のカルテ
三分粥になつて自信が湧いてくる

堺市	遠山	唯教	堺市	矢倉	五月	和歌山市	松尾	和香	札幌市	小沢	淳	大阪府	米澤	俣子	池田市	上山	堅坊	堺市	内藤	憲彦	茨木市	藤井	正雄	堺市	村上	玄也	島取市	永原	昌鼓	和歌山市	福井	菜摘	松山市	栗田	忠士	海田市	小谷	小雪	西子市	黒田	茂代	札幌市	三浦	弘一	和歌山市	磯部	義雄	紀の川市	北山	絹子	米子市	後藤美恵子		奈良県	渡辺	富子	高知市	小川	てるみ
----	----	----	----	----	----	------	----	----	-----	----	---	-----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	------	----	----	-----	-------	--	-----	----	----	-----	----	-----

誉めてはめて誉めて自信をつけてやる
親になる自信を湧かす母子手帳
自信あるから悠然とティータイム
直視する自信ないからサングラス
潔い散り際の種なる自信
振り返る道で拾ってきた自信
点々と自信をこぼしながら生き
ちよつびりの自信なんとか生きのびる
なるようになると思っている自信
七転び八起きでやつと自信つく
自信ある指は飾りを欲しがらぬ
きつぱりと言いい切るくちびるの動き

佳句

方円の水が溢れてゆく自信
臍曲がりへその角度を競い合う
躰きとところどころにある自信
一本のペンが自信を取りもどす
てのひらのために自信の逆上がり

人

かくし味母の自負です春サラダ

地

自信満々赤信号が視野にない

天

真つ直ぐの拳手は自信がある証

軸

自信過剰になつてそれから疎まれる

横濱市	川島	良子	貝塚市	石田ひろ子		八尾市	高杉	千歩	弘前市	福士	慕情	富田林市	関	よしみ	シドニー	坂上のり子		東京都	川本真理子		八尾市	村上ミツ子		貝塚市	吉道あかね		大阪府	若本	安代	高槻市	富田	保子	青森県	松山	芳生	紀の川市	宇野	幹子	弘前市	高瀬	霜石	和歌山市	武本	碧	倉吉市	岡崎美知江		香芝市	大内	朝子	大阪市	柴本ばつは		藤井寺市	太田扶美代		紀の川市	楠原	富香
-----	----	----	-----	-------	--	-----	----	----	-----	----	----	------	---	-----	------	-------	--	-----	-------	--	-----	-------	--	-----	-------	--	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	------	----	---	-----	-------	--	-----	----	----	-----	-------	--	------	-------	--	------	----	----

初しぎ教室

題一 飽きる

山口 光久

歩道橋渡る子を見て母帰り

遮断機をくぐりあの世に旅をする

飛び出すな車は急に止まれない

右の三句は川柳でしょうか標語でしょうか。いずれも五・七・五という調べになっています。外形だけでは川柳かも、標語かも、狂句かも知れません。川柳とは標語と字数の上での形式は似ていますが、性格は全く異なります。

標語の場合は、目的をすばり表現しなければなりませんし、訴える力が必要になってきます。余情や詩情は要りません。

はじめの二句は詩性と含みがあり、心に残るものがあります。その観点から川柳と言ってもよいでしょう。

「歩道橋」の句は東京・品川区の交通安全標語として川柳を使ったもの。「遮断機」の句は電鉄会社の踏切事故防止運動で募集した川柳です。「飛び出すな」は交通標語です。

【添削】

原 拡大鏡ライト付きです必需品 加代

今月の題は飽きる、でした。先月の題が鏡でした。間違いの無いように。

原 ティールーム読書も飽きるお茶にする ミヨノ

ティールームは喫茶店、お茶室ですから、ここで読書をされていたのでしょうか。ごく普通に図書館としたら。

添 図書館での読書も飽きてお茶にする

原 飲んで寝てまだ飽き足らず庄助さん 律子

民謡「会津磐梯山」の小原庄助さんのことでしょうか。歌を思い出します。下六になります。いつその事、夫としたらどうでしょう。

添 飲んで寝てまだ飽き足らぬ夫です

原 飽きるほどのスイーツ食べて卒業す 圓和子

「卒業す」が気になるところです。喫茶店の午後三時はスイーツを食べる女性で一杯です。それをイメージしてみたら如何でしょう。

添 飽きるほどスイーツ食べる午後三時

原 ドラマ見て筋がわかると飽きてくる 圓廣子

よく分かる句ですが、倒置法で替えてみましょう。感じが変ってきます。

添 あらすじが分かれると飽きてくるドラマ

原 三ヶ日神も疲れて飽いている まさる

添 三ヶ日神も疲れて横になる

原 もう飽きた峡に住む性落葉掃き こずえ

添 峡に住み落葉炊きにはもう飽きた

原 チンメシに飽きてお迎え妻実家 辰夫

チンメシを心配して、里帰りしている奥さんからお迎えが来たのでしょうか。

添 チン飯に飽きて外食里帰り

原 母さんは寿司作ってた飽きるほど 澤

添 母さんは寿司ばっかりを作ってた

原 倦むことなく戦は駄目と声上げる 国和

添 倦まずたゆまず戦は駄目と声上げる

原 飽きがこぬ好きな川柳嵌つてる 英男

添 嵌つてる川柳だから飽きはこぬ

原 時わすれ飽きることなく文字を追う 澄子

添 時忘れ飽きることなく辞書を繰る

原 飽きること知らぬ追っかけレポーター ゆかり

レポーターは追っかけけるのが仕事。飽きることなどありません。ファンの追っかけを想像しました。

添 飽きること知らぬ追っかけ大ファン

原 玉の奥主婦業すべて人まかせ 東美智子

添 玉の奥主婦業任せ趣味に生き

原 飽きる程勉強した事なかったな 高弥生

中八になっています。気をつけて。

添飽きる程勉強したらよかつたが

原飽きられぬうちに撤退じエロ役

添飽きられぬうちに退散じエロ役

原飽きる日が来ないと祈る夫の愛

来ないと祈るは可笑しい。

添飽きる日が来るかと祈る夫の愛

原飽きるほど見ている景色の雨上り

綺麗な句になっていますが、中八です。

い抜き言葉で、中七にしたら。

添飽きるほど見ている景色の雨上り

原飽きないのはケンカの種類があるおかげ

ケンカの種類は夫婦間の事に限定される様

な感じ。話の種類は全てに通じる感じ。

添飽きないのは話の種類があるおかげ

【少しの工夫でよくなる句】

原飽きない様夢ポケットに蒔いておく

添飽きぬよう夢ポケットに蒔いておく

原カラオケでいつもの歌で皆欠伸

添カラオケのいつもの歌で皆欠伸

原その話もう飽きたけどじっと聴く

添その話うんざりするがじっと聴く

原松葉蟹三食付いて食べ飽きた

添松葉蟹朝昼晩で食べ飽きた

原好きだけどカレー三日目もう嫌だ

添好きだけどカレー三日目飽きが来た

原米だけは酒に化けても飽きません

添米が好き酒に化けても飽きません

原聞き飽きた苦勞話を聞き介護

添聞き飽きた苦勞話を聞き介護

【入選句】

飽きもせず朝からスマホ深夜迄

飽きもせずスマホでゲームうちの爺

勉強はすぐ飽きスマホ飽きない子

さつまいも戦後食べ飽き今高値

昭和史のお皿が飽きたイモ南瓜

飽きるほど食べる御飯を今日も欲し

コンビ二弁よりも食べたい妻の粥

飽きるほど作る癖未だある孤食

飽きもせずいつまで続く立ち話

飽きもせず畑の草を取るも趣味

好きな事飽きる事なく続けている

嫁はんは飽きられぬよう付いて行く

飽き性が酒と女は別と言う

日本に飽食の箸飢餓の箸

飽きるまで頑張りきれぬ意気地なし

飽きの来ぬ色と言われて買う破目に

鍋鍋鍋まだ飽きません今日も鍋

永遠に飽きることない白まんま

飽きるほどみつめていたい貴方です

風花

「記憶ない」その答弁は聞き飽きた

殺し合わなくてもみんな死ぬものを

長すぎる講話に飽きて一眠り

五十年飽きずに夫婦しています

飽きる程食べてみたいないくつうに

食べ飽きた言ってみたいねぶぐ料理

【佳句】

たればの話ばかりで飽きが来る

病室のむつりしてゐる白い壁

今日もまた妻の繰り言耳にたこ

五十年飽かず過ごせた共白髪

聞き飽きた話に耳の栓をする

【今月の推せん句】

飽きるほど遊んで子らは大の字に

外で目一杯遊んで、帰ったらごろり。大

の字になつて寝転がる子の成長が楽しみ。

芋かぼちゃすいとん汁に飽きた日々

戦後の食糧難が思い出されます。飽きる

ほど食べられた人は数少ないのでは。

飽きるまでやつたと言えるものが無い

丸山 孔一

飽きるまでやつて、達成感を味わえるの

は最高でしょうが、中途半端で放り出すの

が凡人。死ぬまで努力でしょうが。

【私の句】

亜希子

ひろ介

開子

福貴子

満寿恵

保雄

和之

前洋子

勝正

尚也

昭枝

高橋 敬子

大

斉藤 宏子

宏子

宏子

宏子

宏子

宏子

宏子

宏子

宏子

宏子

川柳塔鑑賞

同人吟 安土理恵

— 4月号から

もう少しこの世の隅で種を蒔く

今井 万沙子

奥床しい方、花の？野菜の？恋の？何の種かは問いますまい。どうぞうつくしい残りの人生を。

お目出たいヤツだと僕は誉められた

江島谷 勝弘

誉めて貰って憮然としているらしいのが面白い。逆説的にほめられたのだとしても誉れ高い評価を受けられたのですから素直によるこんで下さい。

反面教師息子は酒をたしなまぬ

大川 桃花

うらやましい、私共は反面教師になれず三人の子等は揃って、たしなむの上をいつております。

そない毎日笑える事つて無いものよ

矢倉 五月

本当にそうです。ですがかなしいかな作り笑いは絶やさない、で、誤解されるのです。楽しくて明るい人よ。つて。ここから笑える日つて月に何回？

新聞を広げ美談を探してる

松岡 篤

暗いニュースしか採り上げないのかと思うほどの昨今の紙面にはうんざり。で

老人は早起き誰のことだろう

岸本 宏章

平成の老人は大変忙しい、趣味の会、旅行、孫の守り、間にリハビリに歯医者。日中のくたくたに早起きできるわけがない「誰のことだろう」が愉快。

まな板の鯉が薄目をあけている

木本 朱夏

覚悟はできていますよ、どうぞその出刃包丁振り下ろして下さい。でもどんな板前さんかしら、アラ、意外とイケメン、よかったワ、ナムアマダブツ…。

満月もいいけど三日月の悲哀

高瀬 霜石

三日月へ想いを走らせる時の作者には、きつと哀しいできごとがあつたはず。凍てつく北の空の三日月はことのほか哀しく美しい。存分に悲しみに浸って下さい。さくらさくら母にはあつた心意氣

谷口 義

日本の窮地を桜の花が何度も救つて

くれた気がします。心意氣も桜が育んでくれたもの。氣高い句姿にひかれました。

老木も同じ花びらつけて咲く

伊達 郁夫

花びらの一枚一枚に寄せるころ優しい観察眼に打たれています。親としての老木、子としての若木、寄り添って同じ花をいつまでも、と願うばかり。

賞罰ゼロそれが勲章かもしれぬ

川端 一步

履歴書に「賞罰なし」と書く時、ほんの少しホツとしてほんの少し淋しい気がします。真面目に折り目正しく生きて来た人だけが「勲章」だと言ひ切れるのでしょうね。

腕組みをといたら見えるものがある

岩佐 ダン吉

ウーム、そうですね、考えること中断して、ご近所ひとつ走り、きつとイイコトに出会うでしょう。やっぱ汗かかなかん。

も、いい話を見つけた時は、本当にホツとします。災害、難民、テロ等々、悲惨な事件も勿論ニュースとして大事なのですが、わずかでもいい、心にビタミンを下さい。

両の手で普通の暮らしつかんでる

井上 照子

ジーンとききました。平凡な毎日を大切にしていられしやる様子が目に浮かびます。『両の手』がとても効いています。

同じ字で何度も辞書の世話になる

片山 かずお

アハハッて思わず膝を叩きました。私も同じですから。もう辞書なしでは漢字も仮名も送り仮名も自信が持てなくなつて。

待たせたら言い訳がいる早く行く

江見 見清

言い訳にもいろいろありまして、相手によつて使い分けせねばならず疲れますね。嘘をつく事だつてあるでしょう。早く行くに限ります。

虚飾だらう真赤に熟れた冬梅

安芸田 泰子

ハウス栽培の冬いちご、大変な研究と工夫を重ねてののですが、あの美しさ

立派さはどこか嘘っぱい、虚飾さだ言い切る気持ちにはよく解ります。高価ですね。

手を合わす子の事ばかり頼んでる

北澤 稠民

親というものは哀しいもの。子離れてきているつもりでも神仏に手を合わすと必ず子どもの事を思っています。もう立派な大人になっていてもです。連れあいのことはどうなのでしょうね。

水の音組板の音妻の音

北野 哲男

妻を恋う詩、ですね。「音」の三つ重ね、哀しみにつながる「音」を強調されたのは心の底から湧いた音でしょう。声に出して読むと流れるようなリズムの良さ。格調高く哀しみに満ちた詩。

よく揺れる偉人ばかりの乗った船

西口 いわゑ

偉人ばかりの船、作者の穿ちに拍手しています。それぞれに独自の意見ある偉人ばかりで揺れ止まず、怖い、怖い。

辿らねばならぬ道なら迷わない

岸 桂子

潔い句。抗いきれぬと悟ったら、運命と覚悟をきめて迷わずつき進むしかあり

ません。高僧のお説教を受けたよう。

あわてるな敗者復活戦がある

田中 恵

そうやった、そうやった、最後のチャンスがあつたんや。ヨッシャ、今度こそがんばらな、なあ、あんだ。人生こんなふうにいきたいものです。

鬼の面一番下に仕舞い込む

坂本 蜂朗

己の中に隠し持っている鬼の面、できれば誰にも見られたくないものです。一番下にの表現に作者の気持のすべてが込められていますね。引出しであれ、押入れであれ、本棚であれ、とにかく一番下なんです。一番人目につかないところへ。でも決して捨てることのできない面、人間の性ですから。

まだ悩むまだ人間である証

松山 芳生

人間である証は悩むことであると明確に詠まれています。お見事です。悩み多き者に大きなエールを送って下さいました。この度の、この鑑賞に大いに悩まされた私もうれしいことにまだまだ人間で居られそうです。ありがとうございます。

水煙抄鑑賞

— 4月号から

坂上淳司

立春と書く毛筆の撥ね具合

小林 碧水

極寒の地にお住いの碧水さんならではの一句。春を迎える喜びが墨痕にまで現れているですね。春の字の撥ねが、まるでカイズル髭の先のようにピンと。

姫ばかり四人も揃い僕の負け

柴本 ばつは

三人娘の仲間に山の神ばつはさんも加わった華やいだ団欒に、ご満悦の旦那様なのに、僕の負けやなんて羨ましい限り。

うたた寝に毛布をかけるほどの愛

田口 清帆

毛布をかけるだけの愛と、控え目な愛情表現をなさる清帆さんですが、何の何のお優しいこと。

本当のちっぽけな愛なら「風邪引きまっせ」と揺り起こすのが関の山。

ゆずられた席嬉しくて淋しくて

松田 聰

初老の紳士に席を譲つたら「馬鹿にするなっ！」と一喝された中学生の投書が大きな反響を呼びました。

少年の勇氣ある行為には「ありがとう！」で応えたいですね。

従順な妻を演じて早や傘寿

山根 弘子

弘子さん、角隠し姿でほぼ六十年過ぎられたとか。

放浪記の森光子さんといひ勝負の演技。どうぞこのまま演じ切って下さいね。

証明写真僕を証明していない

長島 亜希子

私の障がい者手帳の写真は十八年前の現役最後。運転免許経歴証は写真ボックスのモンタージュ様。亜希子さんののは？

痒み止め出された薬七種類

多田 雅尚

一錠毎に行先を書いて無いけど、ポイントも切り替え、治療を要する臓器まで薬は間違ひなく行き着くのですね。考えてみれば不思議な話です。

雅尚さん、痒み治りましたか？

途中下車なじみの店で棘を抜く

川名 洋子

外出先では何かとストレスが多いもの。帰宅する迄にリフレッシュしたいですね。

私ならさしずめ立ち飲み屋ですが、洋子さんの棘を抜いてくれるお店って、きっと素敵な所なのでしょうね。

光り物縁が無かった亡母の指

野川 宣子

推測するに宣子さんの母上は、戦中戦後の激動の時代を生き抜かれたのでありませんか。

そう言えば、私の亡母の指にも光物はありませんでした。ひよつとすると、宣子さんと私の母も、大切な指輪をお国の為と、金属供出に応じたのかも。

保険屋が不安にさせる万が一

萩原 狸月

保険と言えば、私も退職時に癌保険に入入、喜寿の去年まで息災。もう癌でもあるまいと解約しました。するとどうでしょう。半年後の去年夏に大腸癌を発症二週間のオペ入院に保険給付無し。後悔先に立たずを実感しました。

狸月さん、こんなこともあるんですよ。



ベストシーズンを詠う

本誌五月号が配送されるのは四月末。それから五月上旬にかけての、いわゆる「ゴールデンウィーク」あたりが一年中でいちばん過ごしやすい季節でしょう。もともと、この時期の那覇での最高気温は平年で26℃前後、札幌では17℃前後、そして、青森の弘前公園では「さくらまつり」の真つ最中で、日本列島すべて同じ条件ではありませんが、いずれも、まずベストシーズンと言えるでしょう。

寒暖の差や天候などに影響されず、いつだって元氣澀刺なのが理想ですが、やはり、ロボットではなく生身の身体の私たち。極寒酷暑の厳しい季節より、爽やかな今日この頃のほうが心身ともに伸び伸びするのは当然です。

光熱費始末のできる春が来る

春である証異性が美しい

春ですと大きな顔で寝坊する

あくびしてああ定年と知る五月

さわさわと頭の虫が騒ぐ春

糠床の春愁をかき混せている

エアコンを主とした光熱費がいちばん少ない「家計に嬉しい季節」もこの五月から六月にかけて。川柳作家の視点はそのようなことから春の到来を喜んでいます。また、フェロモンの発散が活発になり異性が美しくなるのも、朝寝坊するのもこの季節。良いことばかりではなく、なんとなく気怠さに捉われるのも「季節の変わり目」の所為でしょう。

奥澤洋次郎
栃尾 奏子
田中 天翔
磯部 義雄
井丸 昌紀
守田 啓子

フーテンの寅になりたい木の芽時

ツンツンと持病顔出す木の芽とき

木の芽とき喪服の多いターミナル

鶯が啼き爺さまの目が笑う

新緑は夏日の前のプレゼント

新緑を訪ねて浴びる紫外線

昔から「木の芽とき」と言われている春先は、精神的に不安定になりやすい時期です。これは朝晩の温度差が大きいことによる「自律神経のバランスの崩れ」によるとのこと。フーテンの寅さんの気分で出歩くのもいいですが、家族を心配させない程度にしたいもの。「喪服が多い」と感じたのは、明るい日差しの中での黒服に違和感を持ったのでしょうか。

新緑の美しい日々のは後はすぐに夏日。この束の間の爽やかさをたっぷり楽しみたいものです。紫外線を避けながら……

日本にまだ夢がある鯉のぼり

少子化にもめげずに泳ぐ鯉のぼり

町内がみんな見上げる鯉のぼり

鯉のぼり団地サイズが跳ねている

山村を元気にさせる鯉のぼり

鯉のぼり酸いも甘いも呑み込んだ

この季節で嬉しく目に入ってくるのは「鯉のぼり」です。最近では、「お子さんのいないお宅に配慮して……」とか「我慢しているようで……」等の理由で掲げるのを遠慮することもあるとか。しかし、私が配慮される立場なら「それほど狭量ではない！」と主張するでしょう。蒼天に悠々と泳ぐ鯉のぼりは、いつまでも伝えてほしい麗しく優雅な習わしです。

藤本 直
大内 朝子
高島 啓子
土橋 螢
斉尾くにこ
岡田 史郎



(投句221名)

「爆買い」の次は何と
「爆花見」などと、騒々
しいニュースが飛び
交った春も過ぎました。

だからと言って、世
界中のニュースが瞬時
に飛び込んでくる昨今
です。次々と起きる出来事に耳目を
休める暇はありません。

そんな時はこの「インスピレーション・
ナビ」で、ひととき精神を自由に遊ばせ
て頂きたいもの、では、どうぞ。

乾杯だ同姓婚が認知され

(評)閉鎖的な日本社会の一部分に穴が開
けられたということでしょうか。賛否イ
ロイロ、人権についてむずかしい。

かき混ぜてしぼんだ夢をふくらます

(評)かき混ぜて空気を入れることによつ



てふくらむ夢、何回も何回も、諦めるこ
とはありません。

違うところ三つありますのでしよう

(評)同じように見える二枚の絵に違いが
三ヶ所、さっと見つけられる人、ちっと
も見つけられない人。さあ、どっち。

アリバイを防犯カメラ映し出す

(評)巷を席巻している防犯カメラ、無意
識のうちに撮られるのは嫌ですが、本当
にアリバイ証明してくれませんか？

不甲斐ない自分へたつぷりとレモン

(評)レモンを絞りに絞るのは(不甲斐な
い自分)、自己に厳しい御方はきつと他人
には優しいのでしょうか。

ブランドの水に負けない井戸の水

(評)何も手を加えていないのに美味し
い、そんなフツツの水、結構身近にあり
ます。有り難いことです。

喫茶店オトコの方が泣いてはる

(評)一度決心すればオンナは揺るぎませ
んゾ。反省するから別れないで、なんて
泣いてももう遅いのです。

隅っこにしこり残しているなんて

(評)丸く納まったように見えて時間が経

てば少しずつ頭をもたげてくる、しこり
とは本当に厄介なものですよね。

あれからの二人に何があったのか

(評)想像してみると、さまざまなドラマ
が浮かび上がって来ます。当事者でなけ
れば無責任この上なし。

水割りの底に溜っている失意

(評)この場合の対処方ですが、一気にグ
ラスをあおってしまったのがいいのでは、
何て余計なことを思ったりします。

中和する春をたつぷり吸い込んで

お立場が似た者同士隅で飲む

アリバイをじわりじわりと攻めて来る

隣の水やっぱ甘い気がするな

さあどうぞどちらロシアンルーレット

与野党もコップの中は嵐かも

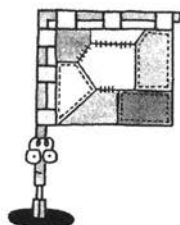
今日限り飲めぬ男と別れます

今日限り飲めぬ男と別れます

鳥取市 土橋 螢
珈琲にミルクが溶ける春隣
海南市 堂上 泰女
はけまずぞ向上心の無い夫
鳥取市 山下 凱柳
尿検査ばかりさせられ嫌だわね
大阪市 井丸 昌紀
困ったなまだ言い訳が浮かばない
弘前市 高瀬 霜石
バツイチのふたり気が合うわけがある
大洲市 中居 善信
ストローで焼酎飲むと旨くない
藤井寺市 若松 雅枝
二枚目の舌がポツリと喋り出す
大阪市 石橋 直子
ドーピングしたい政治家たんといふ
河内長野市 藤塚 克三
君は合格僕は予備校つらいなあ
香芝市 大内 朝子
コップにもそれなりの役顔がある
笠岡市 藤井 智史
空っぽの頭で二人立つ野原
米子市 生田 和之
バツサリと背なに嫌味が飛んで来る
大阪市 柴本ばつは
移り気な方とご一緒にいます
鳥取市 吉田孔美子
右左その間隔が問題だ
大山市 金子美千代
おしゃれして来たが気後れする都会

大阪市 大川 桃花
ほんとうの狙い隣の赤い花
岡山市 永見 心咲
百態のコップのふち子さん買つて
和歌山市 古久保和子
沈黙へもう結論の出た女
池田市 上山 堅坊
さあ五時だそろそろ行こう居酒屋へ
佐賀県 真島久美子
転勤が決まり時間が動かない
貝塚市 石田ひろ子
飽食と飢餓一杯のミルクから
松山市 神野きつこ
外に出て恋をしようよドレミファソ
松江市 石橋 芳山
散髪を待つサムライは無言なり
橿原市 居谷真理子
年収を大阪弁がズバリ訊く
河内長野市 山岡富美子
いつからか微妙にずれるベアグラス
西宮市 梅澤 盛夫
突然の別れも例の純喫茶
豊中市 上出 修
正社員涼しい顔で派遣見る
可見市 板山まみ子
ペアルックそんな物には興味ない
西宮市 亀岡 哲子
文系と理系の恋の初デート
藤井寺市 鴨谷瑠美子
思い出を混せてみるのも名案だ

7月号発表
(5月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箋に2句

和歌山市 平田 元三
ついて来いなんて男はいないよな
藤井寺市 津田シルク
リトマス紙横におかれちゃたまらんね
富田林市 片岡智恵子
仲直り仲裁役がもめている
大阪府 米澤 俣子
触れないで只今恋は発酵中
吹田市 須磨 活恵
生い立ちを静かに語る春の宵
富田林市 古田 千華
毒舌を吐きつつ二人ちよつとハゲ
高知市 小川てるみ
毎日を幸せごっこしています
堺市 澤井 敏治
あす検査きょうは辛抱しときます
尾道市 大本 和子
支払いに不安の兆すレストラン
和歌山市 土屋起世子
春うらら待つ身の辛さ忘れたか
吹田市 山本希久子
別々のこと考えているベアカップ

第四回 春の川柳塔まつり誌上大会

第四回春の川柳塔まつり誌上大会に際し、北は北海道から南は沖縄まで 639 名のご参加、ご支援を戴きました。ありがとうございました。

また貴重な誌面に誌上大会要領をご案内、ご掲載賜りました各川柳社、個人的にそれぞれご紹介くださいました各位のご厚情に、心よりお礼を申し上げます。

ご投句戴きました作品は、無記名の句箋のまま 6 人の選者にお送りし、選句をお願い致しました。返送された句箋は受付番号と照合して作者名を記入致しました。選者の皆様のご労苦に深く感謝申し上げます。

入選作品は各題とも平拔 111 句、秀句 10 句、特選 1 句、計 122 句です。なお、各題特選にはささやかですが、賞品をお送りしました。

各 題 特 選 句

雑 詠	重 い	包 む
小 島 蘭 幸 選 海鳴りが止まぬ少子化のあした 大阪山岡 富美子	新 家 完 司 選 幸せの財布は丁度よい重さ 奈良 居 谷 真理子	政 岡 日 枝 子 選 旅の雪わたしを包むのは私 鳥 取 八 木 千 代
赤 井 花 城 選 ヌーボーとした日溜まりに半世紀 奈良 松 本 粧 子	菱 木 誠 選 生きてゆく重さぶらりと象の鼻 大阪 平 井 美智子	川 上 大 輪 選 包んだらこんな小さくなりました 兵庫 中 岡 千代美

包

む

政岡 日枝子 選

背を踊る希望包んだランドセル
にこにこと来た赤白のお饅頭
おもいっきりハグして孫の不安とる
両手包む母の温もり抱いている
春の陽につつまれ笑顔弾ける
おかえりと暖を包んだ灯が迎え
バンダナで包む戦鬨的頭
ふるさとを唐草模様包みこむ
望郷の思いをいまだ包む胸
ただいまを包んでくれた母の胸
ていねいに包み解いていく蕾
真心を両手で包むありがとう
包まれた愛に気付いた崖っ縁
包まれた愛がしだいに邪魔になる
包んでくれる人に言いたいことを言う
ひとり居へ元気と勇気包み持つ

大阪 山室 光弘
大阪 平松かすみ
大阪 宇都宮ちづる
大阪 小山恵美子
佐賀 矢ヶ部登志子
大阪 中島 一彌
島根 石橋 芳山
秋田 加藤 晨風
広島 飛田 陽子
兵庫 萩原 狸月
奈良 増井 純子
奈良 細田 貴子
和歌山 上田 紀子
兵庫 山口 光久
和歌山 坂部紀久子
兵庫 藤井美智子

辛抱を包みこんでる座りだこ
リハビリを愛に包まれ堪えてます
傷ついた夢に包帯まいてやる
持って帰れと母が包んだ残り物
コート脱ぐふと春風に包まれる
小春日が私を包む一万歩
球春の熱気がこもる甲子園
地球ごと包んでくれている夕日
泣かないで春をあなたにラッピング
手を出して墓穴を掘った包み金
普段着の言葉で包み込む介護
この僕をまるごと包む山の神
春が来て包む機会が増えてくる
包んだ嘘大風呂敷が開けたがる
ほんのりと春を包んだ京和菓子
寒がりで過剰包装おばあちゃん
生き様を包む風呂敷小さすぎ
ほんわかと家族を包む鍋の湯気
包み込む笑顔に負けたなと思う
真心を包んでそっと捧げたい
オブラートで包み話をやわらげる
新聞で包み焼イモらしくなる

和歌山 三宅 保州
大阪 田中 廣子
鳥取 藤原 鬼桜
愛媛 中居 善信
大阪 吉岡 修
鳥取 飯野 菖子
愛知 藤田 千休
兵庫 成定 篤
大阪 穂口 正子
和歌山 岡本 昇
大阪 平井美智子
奈良 木嶋 隆盛
鳥取 春木圭一郎
大阪 古今堂蕉子
大阪 荒木 郁子
三重 北田のりこ
和歌山 楠原 富香
大阪 津村志華子
大阪 升成 好
大阪 中川 一男
奈良 森野 政利
大阪 森松まつお

夕刊で包む夕日と焼き芋と

作業着が包むと背筋しゃんとする

難間は全部包んでポイと捨て

弁当箱包む昭和の新聞紙

古時計我が家を確と包む音

ワコールで補整しているおんなです

知恵袋包んだままで職閉じる

やけどしなやと焼き芋を包まれる

一枚の海苔で包んだ男めし

年金に包まれ妻と掘炬燵

地方紙を着せて送った吊るし柿

いくつもの恥を包んで生きている

包みこむような握手をして別れ

包み抜け自由闊達わたしで生きる

体温をそのまま包む国訛り

満足を包みきれない人の欲

約束を包むプロポーズの重さ

風呂敷に包む役者だと思ふ

風呂敷に包んだ母の有りつ丈

両の掌にそっと包んだ母の骨

ふる里をギュッと包んで父が来る

病人を包む家族のオペラート

和歌山 古久保和子

和歌山 土屋起世子

兵庫 今井 治美

福岡 奥 正之

鳥取 細田 裕花

大阪 美馬りゆうこ

愛知 橋本 律雄

大阪 河内 天笑

広島 瀬戸れい子

和歌山 宇野 幹子

佐賀 横尾 信雄

大阪 針生 和代

兵庫 山田 耕治

島根 福岡 左余

広島 田辺与志魚

大阪 原田すみ子

青森 鈴木みさを

岡山 国塩志保里

大阪 谷 久美子

大阪 柴本ばつは

愛媛 松本 宗和

東京 上原 稔

風呂敷を活かし昭和を生きた母

ふんわりと包まれた日の父母を恋う

傘寿の日小さな包みのチョコレート

気配りをそっと包んだ小風呂敷

押入れで待つブランドの包装紙

一粒の種が包んでいる未来

たおやかな窓の光の授乳室

花柄で包むと記念日の形

生きる意味謎に包んで生かされる

クレームもやんわり包む京ことば

包んでもどこかで漏れていた内緒

どん底も名誉も包む紙おむつ

この愛で包んであげる大丈夫

しっかりと包んで過去を捨てて来た

老いの恋ふんわり包む夕茜

死ぬまでの月日をてのひらに包む

セピア色にくるんで過去にしてしまう

自分史を包む紙にもある好み

夕焼けが包む心の里帰り

ありていに言えば包んでほしいのだ

ありがとうを包むよれよれのティッシュ

オペラートに包みゴクンと陀羅尼助

佐賀 山口 亮栄

福岡 中嶋 政枝

大阪 指宿千枝子

大阪 若本 安代

愛知 彦坂 石転

愛知 南 いずみ

香川 大高 正和

大阪 立蔵 信子

奈良 山田 順啓

大阪 大西 晴雄

大阪 河内 月子

青森 木村奈生美

秋田 伊藤のぶよし

兵庫 上田 和宏

大阪 上山 堅坊

大阪 森中恵美子

奈良 松本 柎子

茨城 藤井 杏樹

奈良 大内 朝子

大阪 都 武志

奈良 森田 昌子

大阪 鈴木いさお

いやなことそつと包んで断捨離へ
 チリ紙に包んでくれた祖母の汗
 裸でごめん論吉一枚握らせる
 年金を削って包む熨斗袋
 お見合いで包んだウソが五十年
 風呂敷で心を包む結び方
 新聞に包み実家の御裾分け
 包み紙解けばほろほろ里の芋
 愛情で包むわたしのやり方で
 必需品朝昼晩のオブラート
 不器用でまだ包めない過去がある
 ふわふわの未来包んでコウノトリ
 夢だけを包み断捨離しています
 ラッピングして嫁がせるやんちゃな娘
 こっそりと加齢を包むオブラート
 ころあいの夕陽だゴタゴタを包む
 ほっこりに包まれ春の靴を買う
 親兄弟子どもが包む我がくらし
 やわらかく眠りを包む母の膝
 ねんねこにくるむほんわかな子育て
 七難を包むまんなはほは笑み
 包みを開くその瞬間がたまらない

大 阪 羽田野洋介
 岡 山 工藤千代子
 兵 庫 太田としお
 岡 山 片島 秀月
 京 都 放示 和彦
 和歌山 辻内 次根
 大 阪 西澤 司郎
 大 阪 三好 専平
 兵 庫 吉田向日葵
 青 森 稲見 則彦
 大 阪 中村 恵
 愛 媛 郷田 みや
 長 野 石田 一郎
 兵 庫 福田 好文
 鳥 取 森山 盛桜
 奈 良 岡谷 樹
 愛 媛 山本 聖子
 岡 山 高岡 茂子
 静 岡 鈴木千代見
 奈 良 池田みほ子
 鳥 取 斉尾くにこ
 愛 媛 西田美恵子

割烹着割れたお皿を包んでる
 包むにはあまりに嘘が大きすぎ
 食後には色取り取りの糖衣錠
 背く子を両掌で包む母の海
 包装紙期待もたせてイミテーション
 包装紙同じ中味に格をつけ
 てのひらで月をつつんだことがある

秀 句

たとう紙に包んだままで年を取る
 くるまれて命育む一〇五歳
 風呂敷で包む文化が薄れゆく
 嘘ひとつ包み正座がくずされぬ
 善人を包むと神も眠くなる
 過大包装したばかりに売れ残る
 御包みにポワツと赤ちゃんの笑顔
 真っ新のいのちを包む母となる
 両の手でだきしめないと子が迷う
 黙祷へ心ひとつに包まれる

特 選

軸 吟

鳥 取 西村 久江
 大 阪 神野千恵子
 大 阪 大隅 克博
 岡 山 伊藤 寿子
 大 阪 高杉 千歩
 茨 城 照沼 智
 青 森 野沢 省吾
 岡 山 紫 しめの
 奈 良 山本 昌代
 奈 良 胡内 敏雄
 広 島 渡辺 典子
 兵 庫 河内谷 恵
 高 知 小川てるみ
 大 阪 片山かずお
 愛 媛 柳田かおる
 兵 庫 尾崎 一子
 兵 庫 相元 世津
 鳥 取 八木 千代
 鳥 取 政岡日枝子

包む 川上大輪選

反抗期スキンシップで包む愛
 包装紙山程溜めて捨てました
 単身へ家族の温み着く包み
 方言がやさしく包む山の宿
 若い種包みすぎたか芽が出ない
 スマートな別れは霧に包まれて
 中国が北を包んで離さない
 アガベーで地球丸ごと包みたい
 いざというときの風呂敷持つて出る
 ありていに言えば包んでほしいのだ
 諭吉さん包み大事にしてもらう
 ばれぬよう二重に包む下心
 なかなか抜け出せぬ妻の包囲網
 日本の心を包むにぎりめし
 左遷地で優しい風に包まれる
 包むのが上手になってまたギョーザ

大阪 佐々木満作
 島根 西坂 瑞人
 山梨 内藤 巖
 茨城 檜村 日華
 京都 笹井ます子
 岡山 福力 明良
 神奈川 山崎 修二
 大阪 出口セツ子
 岡山 丹下 凱夫
 大阪 都 武志
 奈良 森田 昌子
 広島 鴨田 昭紀
 大阪 長井 善純
 大阪 海老池 洋
 佐賀 矢ヶ部登志子
 大阪 榎本日の出

真相を包み隠している記憶
 繭かたく娘は羽化が出来ぬまま
 今だから包み隠さず言えるけど
 母の風呂敷善も悪をも包みこむ
 後悔が包むゴメンネ言えなくて
 好きだった花で包んであげました
 読み終えた余韻わたしを包み込む
 風呂敷に包んだ嘘がにじみだす
 地球が怒るCO₂に包まれて
 拳骨に父の涙が包まれる
 難問は全部包んでпойと捨て
 お宝をふんわり包む紙おむつ
 青空を包んで母に持ち帰る
 九条に包まれてきたこの平和
 セピア色にくるんで過去にしよう
 平常心のあなたにいつも包まれて
 赤外線包まれた謎解き明かす
 誉め上手すべてを包む年の功
 色褪せた過去を包んでいる表紙
 喜怒哀楽包んだままで逝った母
 思惑の包みしばしば泳ぐ
 母の胸迷う羊を包み込む

和歌山 山東日出男
 奈良 太田のりこ
 広島 坂本 澄子
 兵庫 奥田みつ子
 大阪 藤原 大子
 愛媛 郷田 みや
 大阪 石田ひろ子
 茨城 照沼 智
 鳥取 牧野 芳光
 兵庫 内橋実三郎
 兵庫 今井 治美
 大阪 初代 正彦
 奈良 高田まさじ
 北海道 三浦 強一
 奈良 松本 柊子
 兵庫 為広 鈴美
 大阪 荒木 郁子
 山口 吉村 正枝
 愛知 石川 典子
 岡山 田辺たかき
 大阪 田付 絹枝
 大阪 津村志華子

オブラート破れ本音がついばろり
弁当の包み解けば母の顔

両の掌に包める愛で良しとする
ふんわりと包む言葉に棘がある
恋に包まれて出口がわからない
古時計我が家を確と包む音

まごころで包めば角も丸くなる

オブラートに包む程度の秘密もつ

愛情で包むと色が変わる

やんわりと包む言葉に裏がある

どのように包んでみても出る阿修羅

破れたら愛がこぼれるオムライス

ブランドに包みこまれている孤独

ほとくの角包みきれないオブラート

羊水に包まれヒトとなる時間

懺悔する心を包む仏の灯

網棚の包みに走る緊張感

ていねいに包み解いていく蕾

ラッピングして嫁がせるやんちゃな娘

可も不可も笑顔で包むうちの嫁

包む時からがパーティーです餃子

コート脱ぐふと春風に包まれる

兵庫 藤原 紘一

兵庫 岡島 錦子

兵庫 濱邊稲佐嶽

岡山 奥田 佳子

佐賀 坂本 蜂朗

鳥取 細田 裕花

大阪 松尾美智代

兵庫 田中 章子

大阪 鈴木 栄子

鳥取 前坂美佐枝

和歌山 武本 碧

三重 橋倉久美子

神奈川 菊地 政勝

青森 高瀬 霜石

岐阜 相田みちる

和歌山 楠原 富香

大阪 松岡 篤

奈良 増井 純子

兵庫 福田 好文

和歌山 松尾 和香

大阪 矢倉 五月

大阪 吉岡 修

国民を包む空気がちよつとヘン

それぞれがそれぞれ包む熨斗袋

いくつもの恥を包んで生きている

包んでも包んでも浮く油染み

良し悪しそつと包んで夫婦仲

感情を包みきれずにいる拳

病室がやさしい嘘に包まれる

何もかも包んで母の割烹着

向き合えば包まれそうなお人柄

懐の深さが包む涙つば

不器用でまだ包めない過去がある

残った包んで帰る戦中派

身を包むすべて東南アジア製

玉葱の皮が包んでいる中身

両の手で抱きしめない子が迷う

焼き芋を包む新聞斜め読み

どん底も名誉も包む紙おむつ

包装の中味に潜む落し穴

両の掌にそつと包んだ母の骨

人間の弱さを包むオブラート

包むにはあまりに嘘が大きすぎ

裏表上手に包む二枚舌

鳥取 成田 雨奇

島根 竹治ちかし

大阪 針生 和代

奈良 安土 理恵

愛知 彦坂 石転

福井 中嶋 政枝

広島 松本壽賀子

東京 川本真理子

兵庫 山田 耕治

和歌山 倉橋 悦子

大阪 中村 恵

大阪 大川 桃花

大阪 江島谷勝弘

鳥取 竹信 照彦

兵庫 尾崎 一子

兵庫 小谷みちよ

青森 木村奈生美

大阪 林 澄子

大阪 柴本ばつは

大阪 澤井 敏治

大阪 神野千恵子

宮崎 いたうゆうこ

一枚の海苔で包んだ男めし
 本命のチョコだけ違う包装紙
 気が置けぬところは省く包装紙
 包みを開くその瞬間がたまらない
 マグマという餡こ包んでいる大地
 胸奥に包んだ恩を小出しする
 大丈夫俺が責任被ったる
 夕焼けの中コロッケを包む音
 病院の廊下心を包みかえ
 傷ついた夢に包帯まいてやる
 寒がりで過剰包装おばあちゃん
 包装が下手で悪口透けて見え
 包まれて引っこむ心出る心
 包んでも包んでも地球風邪をひく
 輝いた過去は包んで取ってある
 夕景が包んでくれたロスタイム
 日向ぼっこ昔むかしに包まれる
 形見着て母の匂いに包まれる
 過大包装したばっかりに売れ残る
 老いふたり静止画像に包まれて
 母からの包みを解くもどかしさ
 三角を包んで丸にして返す

広島 瀬戸れい子
 大阪 高杉 力
 大阪 大隅 克博
 愛媛 西田美恵子
 鳥取 岸本 宏章
 兵庫 大黒 政子
 兵庫 太田としお
 神奈川 杉山 太郎
 奈良 牧浦 完次
 鳥取 藤原 鬼桜
 三重 北田のりこ
 兵庫 高井 節子
 東京 辻 直子
 鳥根 松本 文子
 兵庫 久保田千代
 徳島 小畑 定弘
 岡山 田中ケイ子
 鳥取 岸 桂子
 高知 小川てるみ
 鳥根 藤井 寿代
 岡山 藤原 秋月
 鳥取 平尾 正人

包まれて包んで風になる番
 オブラート無用叱って欲しいから
 包まれてうずうずしてる正義感
 来ないかな現金入りの菓子包み
 両の手に包む眠っている螢
 包まれて踊る阿呆になる私

秀句

紫の袱紗に包む世間体
 春夏秋冬とても素敵な包装紙
 嘘ひとつ包み正座がくずされぬ
 取りあえず包むシッポは出たままで
 多ければ茶封筒でもいいお礼
 辛抱を包み込んでる座りだこ
 包んだら余計に騒ぐスキヤンダル
 包みから出したとこまで覚えてる
 包まれた愛がしだいに邪魔になる
 包まないところは褒められたところ

特選

包んだらこんな小さくなりました
 軸吟
 丁寧に剥がした跡がある包み

大阪 土田 欣之
 大阪 小川賀世子
 愛知 脇田 雅美
 静岡 山田 勝笑
 広島 小島 蘭幸
 和歌山 堀 富美子

鳥取 倉益 一瑤
 青森 濱山 哲也
 広島 渡辺 典子
 和歌山 古久保和子
 大阪 日野 愿
 和歌山 三宅 保州
 大阪 井丸 昌紀
 大阪 古今堂蕉子
 兵庫 山口 光久
 鳥取 斉尾くにこ

兵庫 中岡千代美
 和歌山 川上 大輪

重 い 菱 木 誠 選

両の手に受けた命の重いこと
重税の国とも知らず新生児
手のひらが水の重みで窪んでいる
ドクターの口の重さで知るカルテ
十八の肩に未来がのしかかる
番号になった私は重いだけ
重い口開けさせたのは週刊誌
傷跡を重く残している昭和
九条の重さだ誰も殺さない
沖縄をオキナワにした重い付け
片仮名が重い ヒロシマフクシマも
いのちより銃の重さが先走る
一本のペンが重たいことを言う
朝刊を折り込みチラシ重くする
軽々と重い命が散る戦
またしても地球が沈む自爆テロ

和歌山 宇野 幹子
大阪 川端 一步
沖縄 森山 文切
兵庫 長浜 美龍
兵庫 藤原 紘一
兵庫 河内谷 恵
大阪 松岡 篤
島根 竹治 かし
大阪 岩佐 ダン吉
大阪 山岡 富美子
岡山 紫 しめの
広島 笹重 耕三
山形 相田 みちる
大阪 杉谷 和雄
山口 有海 静枝
東京 山田 こいし

再稼働重い決断迫られる
重い口開く古老の戦中記
鎮魂へ陛下の旅の重すぎて
見栄と義理どっさり重いのに袋
子に孫に重過ぎないか核のゴミ
気前よく返事はしたが荷が重い
気負うから針一本が重くなる
よいしょされ重い荷物を背負う羽目
汚染土の重さを知らぬ街灯り
原発へ重い最終処分場
三陸の海が残した重いつけ
重い荷を星になるまで分かち合う
伝統の重み噛みしめ神楽舞う
覇者の靴重くするよな下り坂
重いのも自分のギアで春を呼ぶ
技術国貧しい汗が支えてる
重力のままにオッパイ下を向く
重い闇引きずる悲しみの増嶋
降り続く雪独りの屋根が重くなる
一年がこんなに重い古稀の春
何もかも濾過してこころ軽くなる
ときめきが重いわたしの不整脈

京都 西山 竹里
奈良 細田 貴子
大阪 島田 誠一
青森 野呂 吞舟
静岡 山田 勝笑
徳島 手塚 都樹子
大阪 鈴木 栄子
富山 紅出 れい
栃木 荻原 鹿声
鳥取 竹村 紀の治
兵庫 北野 哲男
福井 みつ木 も花
大阪 阿部 俊八
秋田 伊藤 のぶよし
奈良 飛永 ふりこ
鳥取 斉尾 くにこ
和歌山 柏原 夕胡
大阪 井本 健治
島根 伊藤 寿美
香川 谷本 淳
広島 飛田 陽子
愛媛 大内 せつ子

重い重い決断だった尊厳死
 かあさんの涙温くて重かった
 実印を押したら重くなる届
 フリーターの産科に重いドアがある
 核心に触れると口が重くなる
 休耕田どんどん鍬が重くなる
 いつまでも待っていますと重い鍵
 百歳の一言ずつにある重み
 いい人を演じて重くなる仮面
 裁かれる人に重たい鉄のドア
 あなたとの愛の重さに誤差がある
 改札を抜けると靴が重くなる
 遺されて命だんだん重くなる
 重くなるもの曳きずつて何処へ行く
 日暮れなお重い言葉が身を責める
 戦争の講話鉛を飲む思い
 消すことの重み知らないスマホ族
 紙一枚二人で名前書く重さ
 崩してはならぬ平和の字の重み
 地球より重いと知った愛だった
 一族というには重い背の荷物
 観念をしたのか重い口開く

広島 大森 昭恵
 大阪 村上 直樹
 鳥取 岡崎美知江
 和歌山 楠見 章子
 高知 小川てるみ
 青森 高瀬 霜石
 兵庫 中岡千代美
 大阪 西出 楓楽
 青森 木村奈生美
 兵庫 久保田千代
 大阪 美馬りゅうこ
 三重 青砥たかこ
 大阪 吉村久仁雄
 鳥根 松本 文子
 山口 吉村 正枝
 和歌山 倉橋 悦子
 大阪 神野千恵子
 愛知 南 いずみ
 鳥根 岸 桂子
 岡山 山縣のぶ子
 高知 常石 麗子
 和歌山 上田 紀子

戦争を知らない人が撃ちたがる
 除染した土が重くて運べない
 ごめんねの言葉だんだん重くなる
 御先祖の宝重荷になってくる
 生きてゆく重さ支える介護の手
 発言の重さ炎上したブログ
 ひと言が重い心に灯を点す
 冤罪を晴らしたあとの荷が重い
 約束の重さに耐えている手帳
 胃袋がびっくりしてるバイキング
 青りんご愛の重さをまだ知らぬ
 軽い気で押したハンコが重くなる
 この人も派遣社員が重い口
 重い腰あげて綻び縫い直す
 ひとつずつ重荷を捨てて行く花野
 積載量越えて日本の航海図
 ずっしりと愛いっぱい募金箱
 口堅い分だけ尻が重くなる
 身長で負け体重で勝ちました
 責任の重さを知った役ひとつ
 法よりも口約束にある重み
 去年までひょいと担げた米俵

青森 岩淵 黙人
 鳥根 田中 堂太
 和歌山 小谷 小雪
 和歌山 堂上 泰女
 大阪 鶴田 寿子
 兵庫 萩原 狸月
 奈良 佐藤 辰雄
 岡山 山崎三千代
 鳥取 平尾 正人
 大阪 鈴木 益子
 和歌山 北原 昭枝
 神奈川 菊地 政勝
 東京 辻 直子
 京都 今井万紗子
 香川 川崎ひかり
 奈良 下谷 憲子
 奈良 胡内 敏雄
 奈良 安福 和夫
 大阪 川畑まゆみ
 大阪 沢田 和子
 広島 北村 善昭
 奈良 田中 秀貴

漬物石も家紋もわたしには重い
 相続税誰も住めない家がある
 亡き妻の小言日増しに重くなる
 なにくそと重い病に立ち向かう
 肩の荷の重さは言わぬ蟻の列
 両親の期待でたわむ僕の肩
 辛酸をなめた言葉にある重み
 重い荷をおろしアルバム整理する
 ため息の深さ未来を重くする
 人それぞれに重い時効を抱いている
 歳月の重さを語る古時計
 薄給が責任ばかり重くする
 母の文行間にある重い愛
 反対の意見重たく受けとめる
 断れぬ誘いに今日も胃が重い
 重すぎて受け止められぬその想い
 お荷物のローンが残る二度の職
 虐待死重い命を軽くみる
 重い荷を下ろして風になる準備
 重い荷と一緒に背負うのもご縁
 両腕の中に重たい染みがある
 70億地球の自転鈍くなる

鳥取 倉益 一瑤
 奈良 大久保眞澄
 大阪 上山 堅坊
 愛媛 古手川 光
 和歌山 木本 朱夏
 兵庫 前川 淳
 和歌山 土屋起世子
 兵庫 山田 耕治
 石川 藤村 容子
 愛媛 西田美恵子
 愛媛 重岡 薫
 和歌山 山東日出男
 広島 日谷 寛
 岡山 小澤誌津子
 香川 みよしすみこ
 埼玉 中村 伸子
 大阪 中野ふづき
 岡山 岩崎 幸子
 大阪 土田 欣之
 兵庫 酒井 真由
 岡山 近藤 朋子
 岡山 目賀 和子

目れがだんだん重くなってくる
 もぎ立ての言葉に重量感がある
 重いことメールで軽く言うてくる
 老老介護未来が重くのしかかる
 年金へ鉛のようなガン告知
 万年筆も見舞うことばも重い
 マイナンバー紙一枚が重すぎる

秀句

重心を下げて丸ごと受け止める
 月一度抱く手にひと月の重さ
 花びらの重さを知っている水面
 札束と比べるにんげんの重さ
 重いなあ介護するのもされるのも
 延命はしない綿毛が重くなる
 あの雲はもう見たくない重い雲
 明日へ切る舵が軋んで重くなる
 神様がくれた重たいスケジュール
 重すぎる拒絶へことば見失う

特選

生きてゆく重さぶらりと象の鼻
 軸 吟
 三月のファイルどんどん重くなる

大阪 日野 愿
 岡山 福力 明良
 大阪 村上 玄也
 大阪 北村 賢子
 宮城 木田比呂朗
 大阪 森中恵美子
 兵庫 七反田順子
 奈良 松本 柊子
 大阪 矢倉 五月
 佐賀 真島久美子
 広島 鴨田 明紀
 大阪 宇都満知子
 愛媛 柳田かおる
 大阪 宮守 正博
 岡山 奥田 佳子
 鳥根 藤井 寿代
 大阪 神田 良子
 大阪 平井美智子
 奈良 菱木 誠

重 い 新家 完司 選

正月から三キロ増えたままである
 やんわりと重みのかかる犬と住む
 軽々とやっていったこといま重荷
 重い重いドアの向こうの桃源郷
 陽が落ちるおひとりさまの掌に受ける
 重い役絶対来ない軽い口
 重荷じゃないよ私の支えお母さん
 向かい風今日もノルマの歩が重い
 靴裏の泥さえ重い外廻り
 すっぱりの黄砂に絹のスカーフで
 過重にも弱音を吐かぬピンヒール
 神様がくれた重たいスケジュール
 重圧を敵に味方にメダリスト
 70億地球の自転鈍くなる
 身長で負け体重で勝ちました
 去年までひょいと担げた米袋

大阪 江島谷勝弘
 岡山 古山はつ子
 大阪 羽田野洋介
 兵庫 安部 美葉
 奈良 太田のりこ
 大阪 谷口 東風
 岡山 河相美代子
 兵庫 金川 宣子
 大阪 穂山 常男
 大阪 関 よしみ
 愛知 藤田 千休
 島根 藤井 寿代
 愛知 安藤 なみ
 岡山 目賀 和子
 大阪 川畑まゆみ
 福岡 奥 正之

年ごとに鍋が重たくなってくる
 重力のままにオッパイ下を向く
 電動に抜かれて重いベダル踏む
 凡人で重い葛籠を取りたがる
 煩惱が足重くして走れない
 苦勞して送ってくれた学資金
 老いの身に背負う持病と消費税
 責任の重さを知った役ひとつ
 重い話関西弁が軽くする
 重い重い決断だった尊厳死
 発言の重さ炎上したブログ
 一年がこんなに重い古稀の春
 気が重い三面記事の鉛色
 歳月の重さを語る古時計
 トリアージ責任重くのしかかり
 黒雲を閉じ込めている胸の中
 棒グラフ遅れとつてる気が重い
 腕く程苦しみふえる重い雪
 ため息の深さ未来を重くする
 胆石を囲っています重いです
 責任の重さずっしりややを抱く
 締め切りが迫る次第に申し掛かる

鳥取 山本ふみ子
 和歌山 柏原 夕胡
 大阪 宇都宮ちづる
 和歌山 木本 朱夏
 鹿児島 平瀬 芙蓉
 和歌山 石田 隆彦
 兵庫 細川 花門
 大阪 沢田 和子
 奈良 澤山よう子
 広島 大森 昭恵
 兵庫 萩原 狸月
 香川 谷本 淳
 兵庫 為広 鈴美
 愛媛 重岡 薫
 鳥取 田中 天翔
 岡山 松田龍せん
 大阪 藤井 正雄
 大阪 中野 健吾
 石川 藤村 容子
 奈良 安土 理恵
 京都 三宅 満子
 佐賀 西村 正紘

義理人情よりも重たい親心
 ばあちゃんのお愛が重くて孫ゆがむ
 口重い息子が喋るハイとウン
 副作用それも承知の薬漬け
 お荷物のローンが残る二度の職
 メールより絵手紙の文字ずつしりと
 義姉さんに父の痴呆を教えられ
 曇天の重さを傘の所為にする
 米粒の重さもいつか思い知る
 もぎ立ての言葉に重量感がある
 女房の重しでぶれぬ夫婦仲
 風邪はいま五分粥ほどの重さです
 特売日提げて帰れぬほどの欲
 何が重くて毛を鷲掴みする兄よ
 終活の重さと通帳の軽さ
 とときめきが重いわたしの不整脈
 札束と比べるにんげんの重さ
 たからかな声ヒョウ柄の重戦車
 お見舞いの帰りの足が重くなる
 土砂降りにビクともしない地藏さま
 力石持ち上げ神の声を聴く
 重いなあ逆走ばかりする私

佐賀 矢ヶ部登志子
 京都 笹井ます子
 愛知 彦坂 石転
 兵庫 松井 文香
 大阪 中野ふづき
 山口 上村 夢香
 兵庫 山田 耕治
 大阪 太田扶美代
 静岡 佐野由利子
 岡山 福力 明良
 静岡 萩原まさ子
 島根 長谷川博子
 静岡 山田 勝笑
 青森 千葉 風樹
 大阪 柿花 和夫
 愛媛 大内せつ子
 広島 鴨田 昭紀
 島根 石橋 芳山
 大阪 片山かずお
 茨城 岡本 恵
 広島 村上 和子
 愛媛 柳田かおる

子に孫に千兆円の重い枷
 先達の生き様の句にある重み
 縄電車縄がこの頃重いなあ
 七十億の一人と添うた重い縁
 夕方になると仮面が重くなる
 金棒が重い頼りない鬼だ
 ご指摘は重く受け止めそのまんま
 背伸びしていた時は荷が重かった
 十八の肩に未来がのしかかる
 三日月にひとりぼっちという重さ
 引力があるのでドッコイショと背負う
 義理よりも重い私のナルシズム
 重責を担うポストに腰がひけ
 ページ繰る鉛の靴の脱げるまで
 既読済みいいね！が少しだけ重い
 増え過ぎた雑誌に床が悲鳴あげ
 山寺の鐘が重たくなる平和
 尊厳死の重さ問いかける
 ペンさえも重く感じる申告日
 病院へ連れ行く妻は約一トン
 気負うから針一本が重くなる
 育児論熱く語られ気が重い

大阪 水野 黒兎
 大阪 佐々木満作
 広島 岸田 武
 大阪 古今堂蕉子
 宮崎 間瀬田紋章
 鳥取 森山 盛桜
 北海道 三浦 強一
 和歌山 三宅 保州
 兵庫 藤原 紘一
 大阪 宮野みつ江
 和歌山 辻内 次根
 佐賀 仁部 四郎
 茨城 照沼 智
 福井 みつ木も花
 鳥取 平尾 正人
 埼玉 根岸 方子
 熊本 杉村かずみち
 愛媛 栗田 忠士
 大阪 平松かずみ
 兵庫 香西 眞也
 大阪 鈴木 栄子
 大阪 高杉 力

重いのに軽そうに持つのも美学
 スタジオで鑑定されて重くなる
 傘寿とや重たくなったチェンソー
 戦力外宣告された日の夕陽
 子供まで拝金主義で気が重い
 少子過疎もう限界をこえている
 ベートーベン時代の重さ伝える
 乗る位置を変えても体重計の針
 子育ては楽しかったが重かった
 重いから勝つと限らぬ大相撲
 重いから落ちるわけではない枯れ葉
 休耕田どんどん鍬が重くなる
 ふる里の母気がかりな重い雪
 神様が重いでしようとかさす雪
 もう飛べぬ母を見舞って重い足
 重いなあ介護するのもされるのも
 長い介護終えて老い見る老い迫る
 乳母車よりも重たい車椅子
 鉄よりも重い赤紙くる気配
 忘れ得ぬ肩にくいこむ重い銃
 ひきずっています戦時の重い傷
 戦争を知らない人が撃ちたがる

大阪 原田すみ子
 広島 土井 輝恵
 愛媛 中居 義信
 青森 石澤はる子
 大阪 大隅 克博
 鳥取 藤原 鬼桜
 鳥取 成田 雨奇
 奈良 久田年須美
 兵庫 黒田 能子
 広島 小畑 宣之
 三重 橋倉久美子
 青森 高瀬 霜石
 東京 上原 稔
 岡山 国塩志保里
 富山 熊木 保子
 大阪 宇都満知子
 鳥取 門村 幸子
 茨城 毛利 由美
 大阪 中崎 深雪
 鳥取 岡崎美和江
 大阪 江見 見清
 青森 岩淵 黙人

崩してはならぬ平和の字の重み
 この星を滅ぼすに足る核の数
 春は未だフクシマに降る重い雪
 再稼働重い決断迫られる
 原発へ重い最終処分場
 汚染土の重さを知らぬ街灯り
 除染した土が重くて運べない

秀 句

どっちが重いヤドカリとカタツムリ
 娘に送る重いキャベツとお小遣い
 人生の重さを知っている軍手
 飲み仲間妻の話題は口重い
 善人だ口は重いが身は軽い
 生きてゆく重さぶらりと象の鼻
 人間が重たくなってきた地球
 魂が重くて飲んでいいるのです
 腕力を鍛えて妻を介護する
 目に見えぬものの引き摺っている踵

特 選

幸せの財布は丁度よい重さ

軸 吟

脚力をつける重たい靴を履く

島根 岸 桂子
 兵庫 堀 正和
 奈良 大西 將文
 京都 西山 竹里
 鳥取 竹村紀の治
 栃木 荻原 鹿声
 島根 田中 堂太
 兵庫 南谷 到
 岡山 永見 心咲
 青森 濱山 哲也
 大阪 長井 善純
 佐賀 角田 幸美
 大阪 平井美智子
 大阪 海老池 洋
 広島 小島 蘭幸
 兵庫 萩原 典呼
 大阪 嶋澤喜八郎
 奈良 居谷真理子
 鳥取 新家 完司

雜

詠

赤井花城選

身の丈の暮らしマイナス金利でも
とびきりの笑顔で今日を締くくる
五七五総活躍の僕の脳
消費期限まだいけますと妻の鼻
争って手に残るもの何もなし
つくづくと地球が嫌になった月
春を待つ森の小人のファンファーレ
接木して夢の子供がや々と出来
見て聞いて言うこと言うて生きていこ
時間みなスマホが食べて暇がない
ふところの辞表が持っている気迫
持ち前と言える物など何もない
夕暮れにメールごっこという孤独
清貧を貧乏神に褒められる
通い合う絆我が家は本真もん
前向きに生きる気迫が過疎にある

広島 石原 淑子
香川 川崎ひかり
大阪 前田 紀雄
大阪 大川 桃花
兵庫 大黒 政子
和歌山 辻内 次根
大阪 米澤 俣子
兵庫 今井 治美
兵庫 藤原 紘一
兵庫 福田 好文
大阪 藤井 正雄
岡山 松田龍せん
広島 北村 善昭
北海道 三浦 強一
大阪 谷 久美子
岡山 奥田 佳子

人間の裏を覗いて失語症
まあまだまだ迷うことある八十路坂
七十年響く軍歌を夢に見る
気根な子知恵の輪はずしい笑顔
好奇心口笛吹くといいて来る
お互いの気儘に添うて夫婦独楽
労りのことば温くも寂しくも
私を磨いていますボランテア
しあわせは消えやすきもの冬の虹
過去はみな忘れて遊ぶケアハウス
わがさととはひらがなのさと雪ふわり
米を研ぐ音に明日を膨らます
集まると女が起すつむじ風
息子には今も弱みを見せてない
爆買いの後はたこ焼き食べてはる
あくせくと日本支えて来て孤老
君が代を素直に開けた国技館
春だからやさしい恋をしたくなる
好きな人と逢う信号多い街
断捨離がすぎて昔が残らない
誤字脱字みんな含めて私です
妬心むきだしに柘榴は熟れている

兵庫 内橋実二郎
大阪 羽田野洋介
岡山 小野真備雄
兵庫 古川 奮水
岡山 目賀 和子
和歌山 堂上 泰女
兵庫 上垣キヨミ
和歌山 三宅 保州
愛媛 黒田 茂代
広島 鴨田 昭紀
兵庫 嵯峨里かほる
大阪 井本 健治
大阪 宮崎シマ子
大阪 穂口 正子
大阪 大西 晴雄
大阪 坂上 淳司
愛媛 土居 新山
東京 上原 稔
青森 松山 芳生
高知 小川てるみ
茨城 樫村 日華
広島 野村 賢悟

これも断捨離シンプルにするおつきあい
ちゅうぶらりんに伸びて一本の眉毛
恋をした覚えないうまま逝きそうな
マイナンバー私はいったい誰なんだ
連帯で押す実印の重い枷
輪になって節目ふしめを祝う膳
書き順をまた間違えた凸と凹
ぎゅつと抱くH.Oだけ残る
ステツプの君は桜の花びらだ
子育ても介護も終り緩む春
たまらなく泣きたいのですお月さま
全員が前向き騒がしい家族
春愁や真後ろからの息遣い
がむしやらに生きる形にこだわらず
だれひとり逆走が出来ないあの世
枝分かれしても原色忘れまい
革命は成らずさくらはみな散った
冗談に紛れ込ませている本音
春近し隣のピアノうまくなり
運に終り運に始まる人の世や
好きでない人にもあげる投げキッス
ぜんまいのブリキの兵が動きだす

三重 北田のりこ
青森 野沢 省悟
大阪 榎本日の出
青森 斉藤ふみ子
佐賀 山口 高明
香川 神内 澄子
兵庫 足立 茂
大阪 森井 克子
大阪 栃尾 奏子
岡山市田 鶴邨
兵庫 上田ひとみ
佐賀 真島美智子
兵庫 長島 敏子
大阪 嶋澤喜八郎
島根 藤井 寿代
大阪 上嶋 幸雀
島根 長谷川博子
大阪 上山 堅坊
大阪 石橋 直子
大阪 指宿千枝子
三重 吉崎 柳歩
島根 田中 堂太

究極の省エネ温い猿だんご
ストレスを溜めた地球が恐ろしい
ほほ笑みを返せば解けた蟠り
歩けるってすごいことです寒椿
まっすぐに生きて一膳の白い飯
最後まで人間演じ切るつもり
天の夕顔届け夜空へ冬火花
最初はグーたまにはチョキも出すものよ
句が笑いが泣いてきた七十年
信じれば心に春の風が吹く
剪定をして剪定をして ワタシ
散り際のたとえ嫌っているサクラ
桃桜わたしも喜寿をふわり咲く
友だちはいいねリズムが合っている
人間が好きで嫌いで顔洗う
スランプはがんばっている証なり
光る海きつと珊瑚の泪だろ
いつまでの二人だろうか雲流る
落椿愛されたかっただけなのに
巡る忌の速さ砂時計の速さ
地の言葉おぼえて帰るボランティア
ルンルンと弾む春日のトウシューズ

京都 三宅 満子
広島 岸本 清
奈良 中山恵美子
高知 坂本紀美子
広島 瀬戸れい子
大阪 岩佐ダン吉
岡山 中力美美子
愛知 伊賀 武久
広島 日谷 寛
広島 木梨 瑞穂
青森 高瀬 霜石
宮城 木田比呂朗
大阪 小川賀世子
兵庫 梶元 世津
島根 松本 文子
大阪 大浦 初音
島根 伊藤 寿美
兵庫 黒田 能子
大阪 横山 里子
大阪 若本 安代
大阪 渡辺たかき
愛媛 山本 聖子

てにをはと懇ろになり厭きもせず
可も不可もない一日が涅槃なり
弱腰を叱るがごとく冬木立
忘れ得ぬ時代を生きて戦中派
かごめかごめ太陽だつて挫折する
弱酸性いごちがいい古本屋
置き場所も捨て場所もない核のゴミ
人生のゴールは華やかにルンバ
亡き夫の重い約束果す春
人間が好き人間の詩を書く
友情の男結びのまま朽ちる
袋とじここから母は入れない
堤より汚染土除去を待つ市民
耳をたて春のノックを待っている
ブランコを漕ぐこの空のある限り
スカートの暖色僕を匂にする
福寿草女史の名句が蘇る
悲しいな喧嘩の種をよく忘れ
野仏の答えはくれずまだ他人
すいとんは好き戦争は大嫌い
そんなことどうでもよくなつてさくら
海鳴りが止まぬ少子化のあした

奈良 毛利 元子
兵庫 長浜 美籠
富山 紅出 れい
島根 松本はるみ
奈良 田中 秀貴
岡山 丹下 凱夫
鳥取 池澤 大鯨
高知 岡村 千鳥
和歌山 松尾 和香
大阪 升成 好
大阪 荻野 浩子
岡山 河相美代子
大阪 田付 絹枝
大阪 小林 わこ
福井 みつ木も花
和歌山 小谷 小雪
兵庫 七反田順子
兵庫 田中 章子
奈良 佐藤 辰雄
静岡 山本 智子
大阪 谷口 義
大阪 山岡富美子

生き延びる為に魚鱗を光らせる
列島の四季ほがらかでいて欲しい
転ぶたび起こしてくれたのは情け
春を待つキリンが一人胸に住む
晩学にスイッチバックの坂がある
風神に春一番を賜れり
丹田の焰を断やしてはならぬ

秀句

マリオネットの微熱はきつと愛だろう
一つずつ介護の呪縛とれて春
土くれになるまで父が居た棚田
優しさを使い果して母が病む
メールからメールへ虹が立っている
ほろほろとやさしい嘘におぼれそう
師の年譜辿る文学館の春
薄氷を踏んできつとを待ち侘びる
糸屑をとった背中が行ったきり
ストレッチしながら待っているさくら
ヌーボーとした日溜まりに半世紀

特選

軸吟

相聞の返歌まだ来ぬ春の薔

愛知 石川 典子
大阪 美馬りゅうこ
大阪 平井美智子
神奈川 加藤ゆみ子
広島 大森 昭恵
兵庫 北野 哲男
栃木 荻原 鹿声
山口 中前 幸子
大阪 神田 良子
長野 石田 一郎
大阪 太田扶美代
大阪 赤松ますみ
鳥取 岡崎美知江
広島 小島 蘭幸
大阪 山野 寿之
島根 伊藤 玲子
大阪 松尾美智代
奈良 松本 柊子
兵庫 赤井 花城

雑詠 小島蘭幸選

心まるめて一日の和を保つ
とびきりの笑顔で今日を締めくくる
ラブレター往復はがき使おうか
どん底を味わった眼だ揺るがない
人生に老後はないと靴のひも
すぐ顔に出る質お見舞いは苦手
わたくしの胸に修飾語が遊ぶ
回転ドアの向こうに声を置いてくる
リフォームがきかぬ身の内枯るる音
叱ってくれたのは無人改札機
二番目に好きだったのが夫です
春を呼ぶ十八歳の選挙権
母の川跳んでみたけど届かない
太陽だ今年沈まぬタイガース
燃え尽きた男が戻る始発駅
春が来た大地揺らして春が来た

鳥取 政岡日枝子
香川 川崎ひかり
島根 西坂 瑞人
兵庫 吉田向日葵
兵庫 萩原 典呼
大阪 片山かずお
愛媛 大内せつ子
大阪 赤松ますみ
岡山 池上和佐納
奈良 岡谷 樹
大阪 柿花 和夫
大阪 前田 紀雄
島根 多久和敬子
鳥取 田中けいこ
徳島 小畑 定弘
奈良 居谷真理子

クレヨン画知らない鳥が飛んでいる
埋み火を吹いて時々確かめる
屠蘇を酌む前にいつもの薬飲む
温もりを確かめたくて手をつなぐ
周波数あわない会話孫とする
くたびれた鞆の中の夢一つ
置き場所も捨て場所もない核のゴミ
「幸せですか」心のドアをノックする
酔いを一升瓶がみんな飲む
飯の世のドラマ共演ありがとう
迎えに行く傘は一本だけにして
幸せといつも自分に言い聞かす
列島の四季はがらかでいて欲しい
旧暦で暮らすと光りだす季節
スポーツ紙読めば阪神独走か
笑い声破れ障子にして帰り
難しい話は止そう万国旗
焼牡蠣の匂い国道まで届く
人生のゴールは華やかにルンバ
ガラケーで充分僕もガラパゴス
カラカラと幸せ連れてくる引き戸
断捨離がすぎて昔が残らない

鳥取 牧野 芳光
鹿児島 平瀬 芙蓉
鳥取 成田 雨奇
兵庫 黒田 能子
岡山 高岡 茂子
奈良 大西 将文
鳥取 池澤 大鯰
兵庫 竹山千賀子
大阪 山野 寿之
島根 伊藤 玲子
愛媛 郷田 みや
大阪 海老池 洋
大阪 美馬りゅうこ
鳥取 平尾 正人
奈良 森野 政利
兵庫 金川 宣子
岡山 藤原 秋月
福岡 奥 正之
高知 岡村 千鳥
佐賀 真島 清弘
大阪 川畑まゆみ
高知 小川でるみ

家庭内別居外ではベアルック
 スランプはがんばっている証なり
 血液がサラサラになる記事搜す
 ポジティブな心に咲いている万華
 友情の男結びのまま朽ちる
 非正規の夢を枯らしている日本
 寒椿心の底に敷きつめる
 失言を冗談にする吟醸酒
 酸欠になる恋人とふたりきり
 坂のある街表情を持つっている
 グランドへ大の字になるノーサイド
 何故僕が合格なのか腑に落ちぬ
 迷ったら等身大になってみる
 前向きに生きる気迫が過疎にある
 二月堂あたりでまたも見失う
 鈍行の揺れに私を取り戻す
 これも断捨離シンプルにするおつきあい
 強くおなりよまだすこうしは生きられる
 スクロールされた私は通過点
 戦争のころの話はせぬ世代
 ぼつんと喋る父の背中 of 哀愁よ
 春だから結んだように解けない

山口 平田 実男	山形 片倉 卯月	愛知 浅井 典子	大阪 荻野 浩子	奈良 池田貴佐夫	愛媛 重岡 薫	広島 松尾 信彦	岡山 木下 草風	愛媛 黒田 茂代	鳥取 竹村紀の治	岡山 松田龍せん	和歌山 武本 碧	岡山 奥田 佳子	奈良 下谷 憲子	富山 熊木 保子	三重 北田のりこ	奈良 太田のりこ	和歌山 佐藤 倫子	鳥取 後藤 宏之	大阪 辻 光子	佐賀 真島久美子
----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	----------	---------	----------

金メッキしたら途端に盗まれた
 二次会のグラスに痾り解けてくる
 転がってきたのか痛いともいわず
 漂流をしながら笑顔とりもどす
 ストレッチしながら待っているさくら
 雀友の三人あの世から招く
 林立のビルに遠吠えして一人
 まっすぐに生きて一膳の白い飯
 傘借りてお返しする日逢えますね
 ジーンズの穴から情緒不安定
 よくやった時どき僕に声かける
 領いてほしくて弱音吐いたのに
 無駄話ですが刺激になりました
 カウントダウン私の椅子が朽ちてゆく
 ぜんまいのブリキの兵が動きだす
 そんな事あんな事です万華鏡
 ペンを研ぐ剣より強くあれと研ぐ
 断捨離もできず欲しいものはない
 菜の花の海で溺れてみたい毬
 美しく老いる努力を友とする
 丹田の焔を断やしてはならぬ
 自分には甘い二幕目のドラマ

大阪 内藤 憲彦	広島 吉川美佐子	青森 月波 与生	鳥取 前田 楓花	大阪 松尾美智代	大阪 谷口 東風	愛媛 松本 宗和	広島 瀬戸れい子	大阪 宮野みつ江	島根 石橋 芳山	大阪 岩佐ダン吉	鳥取 福西 茶子	鳥取 細田 裕花	山形 相田みちる	島根 田中 堂太	奈良 増井 純子	愛知 沢田 清敏	奈良 森田 昌子	兵庫 為広 鈴美	大阪 大和 峯二	栃木 荻原 鹿声	岡山 山崎三千代
----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------

慈悲か罰か近く日のことは分らない
 個人情報あふれ出てくるクラス会でんぐり返り出来なくなつてスクワット
 末席を楽しんでいる春の鬼
 ひとつだけ私を飾るものが欲し髪を梳くしぐさ女に歳はない
 コンビニで三食たべて飢えている
 一つずつ介護の呪縛とれて春
 訳あつて非常階段から下りる
 将軍が核をおもちゃにして困る
 青春切符で喜寿も傘寿も大はしゃぎ
 さびしいと言いたくはない吾亦紅
 夕暮れにメールごつこという孤独
 チューリップみんな咲いたねありがとう
 革命は成らずさくらはみな散つた
 全員が前向き騒がしい家族
 コンビニが出来てコンビニが潰れる
 黙礼の陛下に居すまいを正す
 好きな人と逢う信号多い街
 君が代を素直に開けた国技館
 爆買いの後はたこ焼き食べてはる
 五郎丸の指の形で咲く蕾

大阪 澤井 敏治
 高知 小原 圭二
 島根 松本 文子
 奈良 小林すみえ
 広島 岸田 武
 鳥取 岸本 宏章
 兵庫 瀬谷さくら
 大阪 神田 良子
 大阪 宮守 正博
 兵庫 谷口 修平
 大阪 坂上 淳司
 和歌山 木本 朱夏
 広島 北村 善昭
 兵庫 山田 耕治
 島根 長谷川博子
 佐賀 真島美智子
 和歌山 三宅 保州
 大阪 上嶋 幸雀
 青森 松山 芳生
 愛媛 土居 新山
 大阪 大西 晴雄
 岡山 田中ケイ子

ソクラテスみたいな猫と日日暮らす
 左手首あたりに弱点が潜む
 そうかそうかと明日へ向かう足さする
 優しさを使い果して母が病む
 好奇心老いには老いの玩具箱
 祈りは天に届くでしょうか 多分
 喪があげて婚活列車動き出す

秀句

歩けるつてすごいことです寒椿
 そんなことどうでもよくなつてさくら
 真冬だと言うのに菜の花が咲いた
 過去はみな忘れて遊ぶケアハウス
 すいとんは好き戦争は大嫌い
 さむらいの昼飯いつもワンコイン
 反論をしない男を軽くみる
 剪定をして剪定をして ワタシ
 輪になって寒いはなしを聞いている
 土くれになるまで父が居た棚田

特選

海鳴りが止まぬ少子化のあした
 軸 吟
 退職後もう十年という多忙

大阪 次井 義泰
 大阪 立藏 信子
 奈良 細田 貴子
 大阪 太田扶美代
 広島 村上 和子
 兵庫 酒井 真由
 岡山 永見 心咲
 高知 坂本紀美子
 大阪 谷口 義
 大阪 河内 月子
 広島 鴨田 昭紀
 静岡 山本 智子
 鳥取 森山 盛桜
 愛媛 中居 善信
 青森 高瀬 霜石
 大阪 鶴田 寿子
 長野 石田 一郎
 大阪 山岡富美子
 広島 小島 蘭幸

第四回 春の川柳塔まつり

誌上大会参加者

総数 639 名
順不同・敬称略

【北海道】	小沢 淳 三浦強一	【長野】	石田一郎	荒木郁子	池田純子	井澤壽峰	磯島福貴子
【青森】	稲見則彦 岩淵黙人 石澤はる子	【富山】	熊木保子 島ひかる 黒田留美子	石橋直子	磯本洋一	井上照子	指宿千枝子
【工藤京子】	濱山哲也 高瀬霜石 木村奈生美	【石川】	岡本 聡 西 千鶴 藤村容子	井丸昌紀	井本健治	上嶋幸雀	岩佐ダン吉
【千葉風樹】	月波与生 野沢省悟 斉藤ふみ子	【福井】	中嶋政枝 村井長雄 安斎あさひ	植村喜代	上山堅坊	榎本舞夢	内田志津子
【福士慕情】	野呂吾舟 松山芳生 鈴木みさを	【岐阜】	武藤敏子	海老池洋	江見見清	大浦初音	宇都満知子
【村井規子】	木田比呂朗	【静岡】	中田 尚 山田勝笑 佐野由利子	大川桃花	大隅克博	大治重信	江島谷勝弘
【秋田】	加藤晨風 伊藤のぶよし	【愛知】	山本智子 鈴木千代見 萩原まさ子	大谷篤子	大西晴雄	荻野浩子	榎本日の出
【山形】	片倉卯月 相田みちる	【伊賀武久】	石川典子 恵利菊江 沢田清敏	柿花和夫	笠嶋惠美	河内月子	大島ともこ
【福島】	菊田信子	【高柳閑雲】	橋本律雄 彦坂石転 藤田千秋	河内天笑	川端一步	神田良子	太田扶美代
【茨城】	岡本 恵 櫻村日華 照沼 智	【南いづみ】	脇田雅美 八甲田さゆり	北村賢子	久世高鷲	栗田久子	小川賀世子
【栃木】	萩原鹿声	【三重】	吉崎柳歩 青砥たかこ	黒岩靖博	小出修三	小林若芽	片山かずお
【埼玉】	中村伸子 根岸方子 星野育子	【北田のりこ】	橋倉久美子 毎熊伊佐男	小林わこ	坂 裕之	酒井紀華	川畑まゆみ
【東京】	上原 稔 辻 直子 川本真理子	【京都】	清水英旺 曾根田夢 今井万紗子	坂上淳司	佐藤忠昭	澤井敏治	木見谷孝代
【山田こいし】	菊地政勝 杉山太郎 加藤ゆみ子	【西山竹里】	放示和彦 榎本宏子 笹井ます子	沢田和子	島田誠一	初代正彦	古今堂蕉子
【神奈川】	三宅満子 山田葉子 杉浦多津子	【大阪】	穂山常男 浅野房子 赤松ますみ	鈴木栄子	鈴木益子	杉谷和雄	小山惠美子
【山崎修二】	油谷克己 阿部俊八 荒川鈍甲 石田ひろ子	【大崎深雪】	中崎深雪	助川和美	須磨活恵	関よしみ	齋藤さくら
【山梨】	内藤 巖	【長尾奏子】	内藤憲彦 中井アキ 出口セツ子	大同美江	田浦 実	高杉 力	佐々木満作

中村 惠	西澤司郎	西出楓楽	中野ふづき	九村義徳	黒田能子	香西眞也	奥澤洋次郎	森野政利	山田順啓	山本昌代	高田まさじ
萩尾紀子	畑中節子	早泉早人	西川ひろし	梶谷和郎	酒井真由	榊 洋子	奥田みつ子	米田恭昌	渡辺富子	徳重美恵子	
林 澄子	針生和代	春木一恵	羽田野洋介	佐藤健彦	塩河和代	釋 翔空	久保田千代	飛永ふりこ	中原比呂志	中山恵美子	
藤井則彦	藤井正雄	藤田武人	原熊知津子	菅野泰行	梶元世津	宗福清司	小谷みちよ	長谷川崇明	久田年須美		
藤塚克三	伏見雅明	藤原大子	原田すみ子	高井節子	竹内 肇	多田雅尚	藤谷さくら	【和歌山】	岡本 昇	尾崎善英	根田よしこ
古田千華	日野 愿	平賀国和	平井美智子	田中章子	谷口修平	為広鈴美	清水久美子	上田紀子	上野 寛	宇野幹子	坂部紀久子
穂口正子	前たもつ	前田紀雄	平嶋美智子	富永恭子	中島憲三	長島敏子	竹山千賀子	磯部義雄	石田隆彦	柏原夕胡	山東日出男
前原正美	増田啓次	升成 好	平松かすみ	長浜美籠	成定竹乃	二階幸子	谷口加代子	喜田准一	北原昭枝	木本朱夏	土屋起世子
松浦五月	松岡 篤	水野黒兎	藤島たかこ	野口晶子	萩原典呼	萩原狸月	中岡千代美	楠原富香	楠見章子	倉橋悦子	古久保和子
都 武志	宮西弥生	宮守正博	藤原千恵子	福田好文	藤井宏造	藤岡りこ	七反田順子	小谷小雪	佐藤倫子	武本 碧	辻内次根
三好専平	村上玄也	村上直樹	松尾美智代	藤原紘一	古川 淳	細川花門	濱邊稲佐嶽	堂上泰女	堀富美子	松尾和香	松原寿子
森井克子	森 茜	森 廣子	宮崎シマ子	堀 正和	前川 淳	松井文香	東内美智子	三宅保州			
矢倉五月	大和峯二	山室光弘	宮野みつ江	丸山孔一	三谷智子	南谷 到	藤井美智子	【鳥取】	飯野菖子	池澤大鯉	岡崎美知江
山根妙子	山野寿之	雪本珠子	宮村満寿恵	山口不動	山口光久	山崎武彦	松下比ろ志	岩崎和子	大前安子	門村幸子	後藤美恵子
横山里子	吉岡 修	吉田知之	森中恵美子	山田耕治	嵯峨里かほる	東馬場美和子		岸本宏章	岸本孝子	倉益一瑤	斉尾くにこ
米澤俣子	若本安代	森松まつお		松本ゆかり	吉田向日葵	吉村めぐみ		後藤宏之	近藤秋星	新家完司	坂本とも湖
安田美紗江	山岡富美子	山本希久子		【奈良】	安土理恵	安福和夫	池田貴佐夫	竹口清信	竹信照彦	田中重忠	竹村紀の治
吉内タカ子	吉田喜代子	吉村久仁雄		阿部紀子	白井 淳	大内朝子	池田みほ子	田中天翔	津村律子	中井虎尾	田中けいこ
渡辺たかき	宇都宮ちづる	美馬りゅうこ		大西将文	岡谷 樹	加門萌子	居谷真理子	中田房江	中村金祥	中原章子	谷口回春子
【兵庫】	足立 茂	安部美葉	足立つな子	木嶋盛隆	胡内敏雄	小西貞子	大久保眞澄	夏目一粹	成田雨奇	西川和子	春木圭一郎
市坪武臣	今井治美	今西廣子	上垣キヨミ	五味尚子	佐藤辰雄	下谷憲子	太田のりこ	西浦小鹿	西谷悦子	西村久江	前坂美佐枝
梅澤盛夫	上田和宏	大黒政子	内橋実三郎	高橋敬子	田中秀貴	谷川 憲	岡本美喜江	林 瑞枝	平尾正人	福西茶子	政岡日枝子
岡島錦子	尾崎一子	加川靖鬼	上田ひとみ	土井京子	林ともこ	古川洋子	小金澤貫一	藤原兎桜	細田裕花	前田楓花	山野すみれ
金川宣子	株元玲子	亀岡哲子	太田としお	細田貴子	牧浦完次	増井純子	小林すみえ	牧野芳光	松本理子	宮田風露	山本ふみ子
河内谷恵	北澤潤民	北野哲男	緒方美津子	松本柊子	毛利元子	森田昌子	澤山よう子	森山盛桜	森脇 麗	八木千代	山下凱柳

山下蟹郎 山下節子 山中康子 吉田弘子
 河川洋々
【島根】 相見柳歩 石橋芳山 井塚たけし
 伊藤寿美 伊藤玲子 今岡健柳 小白金房子
 岸 桂子 黒目英男 古浦青帆 多久和敬子
 田中堂太 西 博美 西坂瑞人 竹治ちかし
 藤井寿代 藤井 寛 福岡左余 長谷川博子
 松本文子 山根邦代 山根雪代 松本はるみ
 松本知恵子
【岡山】 市田鶴邨 伊藤寿子 池上和佐納
 岩崎幸子 奥田佳子 片島秀月 池田たか子
 片岡富子 片山玲華 木下草風 小澤詩津子
 近藤朋子 坂口敏明 高岡茂子 小野真備雄
 田中蛙鳴 丹下凱夫 永見心咲 河相美代子
 原 脩二 福力明良 藤井智史 工藤千代子
 藤原秋月 丸山威青 宮本信吉 国塩志保里
 紫しめの 目賀和子 山縣宣子 古山はつ子
 田中ケイ子 田辺たかき 中力美美子
 前田恵美子 松田龍せん 丸山ツヤ子
 宮宅比佐恵 山崎三千代
【広島】 石原淑子 大森昭恵 瀬戸れい子
 鴨田昭紀 岸田 武 岸本 清 田辺与志魚
 北村善昭 木梨瑞穂 小島蘭幸 松本壽賀子
 小畑宣之 坂本澄子 笹重耕三 吉川美佐子
 若年幸子 土井輝恵 土居直子 飛田陽子

川柳グループ草原句会 100 回記念川柳大会

開催日時 6月8日(水) 開場午前10時30分
 会場 京都府立総合社会福祉会館
 (ハートピア京都) 3階 大会議室
 京都市地下鉄烏丸線・丸太町駅下車改
 札を出て⑤番出口からエレベーター
 で会館入口

参加費 1000円(発表誌呈)

課題と選者

*各課題の選者は当日、投句終了後に抽
 選で決定いたします。

課題 (各題2句・席題なし)

『頭』『眼(目)』『耳』『肩』
 『爪』『手』『足(脚)』『鼻』
 『首』『背』

選者の方々

安土理恵 井上一箇 北村幸子 徳永政二
 中林典子 中村幸彦 藤本鈴菜 八上桐子
 矢沢和女 中岡千代美

出句締切 12時00分

披露開始(予定) 13時30分

欠席投句

A4の用紙一枚に各課題(10題×2句)と、
 住所・氏名・電話番号を明記
 参加費(千円)を添えて下記あてに5月30
 日までに封書でご投句願います。

欠席投句送付先

〒603-8302 京都市北区紫野花ノ坊町56-1
 山本早苗 TEL 075-461-3792

その他問合せ 中野六助(携帯 090-7107-2006)

主催 川柳グループ草原

日谷 寛 野村賢悟 松尾信彦 村上和子
 元吉慶子 六田半徳 若野茂青 渡辺典子
【山口】 有海静枝 上村夢香 楠川道子
 坂本加代 中前幸子 平田実男 吉村正枝
【徳島】 小畑定弘 橋本征介 手塚都樹子
【香川】 谷本 淳 宮内泉都 川崎ひかり
 神内澄子 大高正和 みよしすみこ
【愛媛】 除田六郎 土居新山 大内せつ子
 松本宗和 西村寛子 重岡 薫 柳田かおる
 栗田忠士 古手川光 中居善信 西田美恵子
 山本聖子 郷田みや 黒田茂代
【高知】 岡村千鳥 楠瀬美香 小川てるみ
 常石麗子 小原圭二 藤田和恵 清水由紀子
 坂本紀美子
【福岡】 奥 正之 永多一博
【佐賀】 仁部四郎 山口高明 江川寿美枝
 山口亮栄 横尾信雄 岩崎 實 真島久美子
 坂本峰朗 西村正統 真島清弘 真島美智子
 角田幸美 矢ヶ部登志子
【熊本】 杉野羅天 杉村かずみち
【宮崎】 井とうゆうこ 川崎敬女
 間瀬田紋章
【鹿児島】 前田洋子 平瀬美蓉
【沖縄】 森山文切

本社 四月句会

◇四月七日(木) 午後一時
アウイーナ 大阪

花散らしの雨が降りしける中、四月句会は百二十一名(投句者七名)の参加で開催。初出席は奈良市の花田文聰さん。句会に先立ち、二月に亡くなられた同人井上桂作さん(守口市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は三宅保州氏。題は「川柳六大家の語録と名句」六大家と聞いて、全員の名前を挙げられる人は、どのくらいおられるだろうか。ほぼ同時期に活躍し、戦中戦後の川柳会を支え続けた路郎、水府、紋太、雀郎、周魚、三太郎の六人の師の語録と代表句を、りっぱな冊子で紹介され、ユーモアたっぷり口調で、日頃忘れがちな六大家を身近に引き寄せてくださるお話だった。六人を代表して、路郎師の語録と代表句から

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ (眞澄)
月間賞は居谷真理子さん(樺原市)
(司会)蕉子・真理子 (協取)千代・まつお
(受付)久仁雄・美智代 (清記)憲彦

席題「転」 河内 月子 選

回転といえばレシーブだった頃
転んだらお仕舞ですと医者真顔
二転三転やっと手術にこぎつける
栄転と左遷桜に見送られ
ときどきはわざと転んで空気読む
転んだら食われるサバンナの掟
決ちんが欲に転んで笑われる
意地ひとつ炎となった逆転打
ころんだら起きるがむつかしくなった
転んだら何か拾って立ち上がる
ライバルにそっくり転ばないダルマ
転出の人はかり来る町役場
足あげたつもり布団にけつまずく
蚊も飛ばし虫も転がる脳回路
転がっていくらか丸くなりました
転ぶなと支える骨のメッセージ
足隠し転べば速い団子虫
荷造りへ不安も詰める赴任先
転落の一步あの夜の悪い酒
転んだら朽ちると膝が悲鳴あげ
移転しましたと天国から便り
責任転嫁いつでもできる秘書を置く
ころびなや息子におどされています
逆転の無罪しばしばある怖さ
寝転んだだけで救急車を呼ばれ

久仁雄 葉子 希久子 楓 誠 唯 寿 蘭 唯 久美子 狸 六 敏 蕉 千 克 昌 保 眞 美 堅
博 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
五月

転勤で麻雀の貸し取りそこね
転勤が続く転がる石に似て
性転換孫が言うたらどうしよう
転ぶなら美人の前と決めている
転んだらどこか骨折る脆い僕
転んだらあかんあかと娘に言われ
栄転で母から遠くなっていく
何度でも転んでやっとな並みに
父ちゃんと一緒に転ぶのはいやよ
転んでもすぐ立ち直る肝っ玉
自信あるカモシカの足よく転ぶ
転んだら転んだとこで立ち上がる
佳
たたみでも転ばないようしています
転ぶたび学び覚えて来た受け身
踏み切りで転んだことは内緒です
回転の悪い頭を持て余す
久々に回転しない寿司を食う
人
関電をやめて大阪ガスにした
地
転け方もだんだん様になってくる
天
あの時に転んで脱皮できました
軸
庭に出て私ひとりが転がった

玄也 保州 一步 則彦 武臣 すみ子 耕治 富美子 朝子 朝子 宏子 倅子 天笑 好 瑠美子 桃花 英夫 勝弘 義 富美子

兼題「果物」 藤井 宏造 選

種無しはタネも仕掛けもあるスイカ
五等分母は上手にメロン切る
種のないブドウはどこか頼りない
初七日が食べ頃ですというメロン
腫れ物を触るがごとく桃を剥く
ウインクのとても上手なサクランボ
店頭に並ぶ果物みな美人
定年後やつとリンゴが剥けました
手の届く位置にいつでも居る蜜柑
お見舞のメロンを毒見する仏
玉音を聴いた西瓜と井戸の水
知恵と業アダムとイブのリンゴから
あの頃は僕も黄色いサクランボ
一年中果物実る国に住み
等分するケーキいちごは罪深い
頃合いのメロンに秘密にぎられる
薫りたつミックスジュース朝は金
宝石とみまがう色と値のイチゴ
風雪に耐えたリンゴが赤くなる
山の神言い得て妙のラ・フランス
温室の過保護な苺時知らず
焼け野原リンゴの歌に見た希望
熟れてきたもうすぐ桃もお嫁入り
フルーツが出ると気持ちは二次会へ
仏だんで食べ頃待っているメロン

芯のない男を笑う枇杷の種
サクランボいつもペアーで睦まじい
あいらしい兎に化けているリンゴ
泣くまいと青いリンゴを丸かじり
夕張で元氣あるのはメロンだけ
メロン一口笑顔残して母は逝く
ご近所にマンゴの食べ方聴き歩く
I Tの王リンゴかじった跡がある
愛情も一緒に桃の袋掛け
熱の子に母がおろしたリンゴ汁
桃のよう赤ちゃんそつと抱きかかえ
あまおうの人氣を妬むとちおとめ
佳

洋
光 久
朝 子
唯 教
勝 弘
舞 夢
忠 昭
美 津 子
ひろ 子
ひろ 月
克 己
い さ お

果物が言い訳下げてやってくる
衣替えレモンライムの娘たち
夏みかん甘くするのは許せない
バナナ一本わたしの朝を弾ませる
人ひとり許せずレモン絞り切る
人
憎しみの形で割れている柘榴
地
柿たわわ幸せだった母が居た
天
貫いた愛へ檸檬を真つ二つ
軸
レモンからデコボンになる妻の膝

弘委智
真理子
敏 治
あや 子
武 彦
誠 一
万 紗 子
ばつは

兼題「ひどい」 矢倉 五月 選

パパゴルフ約束したと泣きじゃくる
ひどい雨漏りまだローン残るのに
女房は寝起きの顔を見せません
一年中閉店セーラーやつてはる
メーリング手の自転車にぶつけれ
十年の介護無視した遺産分け
少女の二年返せ監禁ひすぎる
ひどい恥をかいて人間脱皮する
見つともない白鵬関の猫だまし
ひどい人なんて優しくにらまれる
花粉症大の男も泣かされる
監視カメラ露天風呂にもあるらしい
この頃ひどい脱け毛尿もれ物忘れ
ひどい字の上に此の頃手が震え
注意した歩きスマホに殴られる
倫理観欠落五体不満足
相続へ位牌と母は売れ残り
三月ごとたらい回しをする医療
殺された女性販大受かつてた
女優似だねそっくりだよね樹木希林
贅肉はたつぷりなのに骨粗鬆
たまに逢つてもスマホばかり見てる君
私の子なのに孫かと聞いてくる
寝てなさいメシはどこかで食べるから
大阪市ひげが処分になるなんて

つな 子
雅 明
英 旺
弘 光
希 久 子
美 津 子
賀 世 子
唯 教
淳 司
まっ お
克 己
とし お
美 智 子
宣 子
六 点
誠 一
哲 男
進
宏 子
富 美 子
ひろ 子
かず お
眞 澄
一 歩

二日酔いなのにゆっくり寝ておれず

洗脳で自爆テロへと駆り立てる

口車に乗って虎の子持つてかれ

ひどい話ひとさを足して言いふらす

下流老人好んでなつたわけじゃない

起業資金オレオレ詐欺で稼ぐとは

遺言の本プレゼント我が子から

介護せず遺産ばつちり取る息子

不摂生した翌朝のひどい顔

よほどイヤだったかメール切りされる

上司風吹かせて音痴聞かされる

父母に殺される子も名を持てり

佳

整形だった口もお目目も乳房まで

ずる休みしてたらひどくなつた風邪

逃げ道を残して責めて欲しかった

ブランドをいっぱい買わせようなら

搜索のチラシこんなにかわいい子

人

「好きです」とメール四月の一日に

地

ユルキヤラの中は地獄の暑さです

天

いじめには負けぬ優しさに負ける

軸

九時に来て葉支払いすめば二時

月子

玄也

寿子

美智子

英夫

桃花

日の出

富子

いさお

かずお

眞澄

耕治

としお

敏治

葉子

楓楽

耕治

理恵

靖鬼

好

兼題「埋める」 山岡 富美子 選

七秒のお辞儀で埋める謝罪席

愛犬が家族の隙間埋めている

高倉健の隣に埋めてほしい

穴埋めに来たのは心太だった

きこちゃん風を飴ちゃん柔らげる

行間に火種を埋めて封をする

新緑のシャワーで胸を埋めつくす

来し方の穴埋めばかりする余生

リスたちが埋めたどんぐり森守る

花の下西行を埋めほくを埋め

数合せ役にたたないのに呼ばれ

居酒屋へクヨクヨ虫を埋めに行く

桃のタネ庭に埋めたの見たポチ

家計簿の隙間を細腕が埋める

人間のほやきで埋まる赤のれん

庭に金埋めてちよつこら旅に出る

親不孝を埋める積りです介護

何かしら大事なものを埋めたはず

空白を埋める現ナマの威力

ジグソーパズルの中にわたくしを埋める

桜色で埋める私のスケジュール

ジーンズの穴埋めるよなおせつかい

もっと深く埋めぬと魔女は目を覚ます

眠れない夜を雑念埋めつくす

遺言書の余白をありがとで埋める

キヨミ

英旺

義

義

賀世子

寿子

寿子

則彦

天笑

久仁雄

美智子

憲彦

みつ子

いさお

弘委智

月子

ひろ子

見清

柳弘

蘭幸

ふりこ

すみ子

克己

希久子

進

溝埋める努力はしない嫁姑
人柱埋めた話が残る橋

たいくつの隙間を煩惱が埋める

わたしの行間勝手に埋めないで

道草の縁で埋める以下余白

マイコンがお湯を埋めたり喋ったり

至らぬ点わたし埋めると言つたよな

おにぎり祈りに祈りのごとく埋める梅

人間の罪が地中に埋められる

埋めあわせ蛸焼き十個くれただけ

樹木葬猪口も一緒に埋めてくれ

沈黙がほつこり隙間埋める仲

佳

冬埋めた種が知つてる春の音

歳を経て仮面と顔が同化する

影を埋めると残り時間が見えてくる

丁寧な掘りますあなた埋める穴

カブセルのサつちゃん三つ編みのまんま

人

捨石が社史の要所に埋めてある

埋め立てた池に眠っている民話

天

溝埋めてから夫婦という強さ

軸

バスタブに花びらひとときの卑弥呼

はこべ

哲男

希久子

賀世子

誠一

弘光

(安)和夫

真理子

妙

勝弘

直樹

堅坊

千恵子

葉子

瑠美子

理恵

とーな

六点

扶美代

千代

兼題「メルヘン」 江島谷 勝弘 選

産声が次々メルヘンの森だ
本棚の絵本を孫が揺り起こす

蘭 幸
満知子

兼題「景気」 小島 蘭幸 選

小島 蘭幸 選

メルヘンが並んだ春の遊園地

扶美代

お菓子のお家子の夢はパティシエで

賀世子

日本の景気知ってる作業服

たもつ

素っ裸の王様ですよ北の殿

としお

添い寝して童話聞かせた子にも髭

哲男

年金の増加を待っている景気

堅坊

メルヘンを公約にして金バッヂ

狸月

メルヘンに三つ指ついた妻がいる

久仁雄

産声が景気をつける過疎の里

黒兎

畦道をたどってメルヘンのくにへ

美津子

おばあちゃんと呼ばれメルヘンかき消され

希久子

増税を足踏みさせている景気

洋

茅葺きで囲炉裏があった少年期

天笑

爺さんはメルヘンよりもデカメロン

忠昭

不景気になったと知っているカラス

洋

ひらひらと蝶が舵とる花筏

靖鬼

囲炉裏端古老河童になっている

英旺

福島に景気戻れと買う地酒

黒兎

ツカガール追った名残りのプロマイド

山妙子

メルヘンの世界でしようか黄泉の国

ひろ子

好不況どこ吹く風と父の歟

直樹

キティちゃん切手になってこんにちは

安和夫

散骨でスターダストになるわたし

満知子

不景気でも酒の二合は必需品

一篇

ドラえもんもアンパンマンも孫と寝る

洋修

おとぎ話の常識悪は栄えない

いさお

好況のいつまで続く雨期乾期

洋

金太郎浦島太郎桃太郎

憲彦

メルヘンのひととき花の通り抜け

富美子

爆買いの景気に躍るキタミナミ

すみこ

我が輩は猫になりたいブルドッグ

博

アナと雪歌って踊らされる古希

利子

爆買いがもたらす景気ふわりふわ

満知子

黒猫が腰掛けている鎌の月

敏治

ムーミンとトトロになって飲み交わす

完司

屈かないところで笛を吹く景気

寿之

メルヘンの世界で遊ぶデイズニート

裕之

メルヘンを追いかけてきて圏外へ

富美子

行楽地へ花が誘っている景気

信子

メル友らしいよくまモンとブーさん

眞澄

図書館の隅で賢治とデートする

弘光

景気よく飲んで語らう古希の宴

武臣

ライザップ次の標的ムーミンか

宏造

あれ以来うさぎは昼寝しなくなり

武臣

花道も奈落もありました景気

保州

人間を批判しつつづけてる河童

天笑

羽衣の駅で天女とすれちがう

まつお

タンズ預金深い眠りに落ちてゆく

葉子

メルヘンからほとりと落ちた毒りんご

信子

羽衣の駅で天女とすれちがう

まつお

爆買いという不可思議な好景気

いさお

夢を見えますマッチが消えるまで

眞理子

そつと触れ花の気持をきいている

葉子

アドバルーンだけでも景気よく上げる

玄也

シャボン玉君を映して輝いて

恭子

そつと触れ花の気持をきいている

葉子

羽振りよく見えて質素な妻が居る

進

靴脱げた外反母趾のシンデレラ

眞澄

そつと触れ花の気持をきいている

葉子

景気よくならず悪法だけできる

瑠美子

冷え性でガラスの靴の合わせぬ姫

黒兎

メルヘンの世界にいます孫の守り

軸

景気よくならず悪法だけできる

光久

消費低迷心当りがございます

景気とは無縁老人バスを持ち

退職後不景気の風吹いたまま

こめかみと眉間にこびりつく不況

好景気未来があった笑ってた

リタイヤのおとこ日経手離さず

景気とは無縁の街のプラランター

ガイドマップ三ヶ国語ではもう足りぬ

職人の技が景気の波を超え

景気よく飲め割り勘の時ぐらい

景気いい話に酒の味変わる

花見酒は景気良さそうに見えます

佳

スカイツリー景気の底がよく見える

招き猫五匹並べた店閉じた

ジャンプ傘バカツ景気もこのように

経済が見捨てた美しい日本

景気よく生きよう桜が咲いている

人

家族葬ばかりと葬儀屋がはやく

地

爆買いの話にぎやか蓬摘む

天

半額に群がる老いの背を見たか

軸

景気よくなるか観覧車が回る

耕 治

耕 治

靖 博

楓 楽

万 紗 子

りゅうこ

扶美代

修

久仁雄

六 点

理 恵

信 子

宣 子

蕉 子

完 司

真理子

義

一 步

美津子

居谷真理子

句 会 燦 燦

三月句会を読む

岩 崎 眞里子

あつけない最後未だにまだキョトン

激論に勝って虚しい隙間風

大阪場所千秋楽の結び、白鳳対日馬富士の一番を思い浮かべた。あつけない幕切れの中、勝者の胸奥に去来した虚しさは、

激闘を思い描いていた観客以上だったのかもしれない。

開けた窓ころりと春が落ちてくる

大凶に何度もなく春を引き直す

殺意など無いとは言えぬ台所

ころりと春が落ちて来る……という愛らしい表現に納得。だから、やつと迎えた春に「大凶」は嫌だとかじを引き直す気持ちも分かる。さて気分直しの台所で、春の食材を前に腕まくり！

寒行の素足へ沁みしてくる読経

人生観ころりと変える本に会う

激流に石もわたしも磨かれる

寒行の体験は無いが、五感の先から沁みしてくる感覚は大切だ

と思っている。人や本との出遇いも、激流に磨かれるという受け止め方も、その時々に通り得た人生観の表れとも思う。

毎日が新鮮 宇宙人の孫

老いという新鮮な日を生きている

題詠を雑詠の感覚で鑑賞しているこの欄だが、こんな作品に

遇うと爽やかに浄化された気がする。愛すべき宇宙人のような

孫の居る景色には明日が輝き、眺めている老いの身に日々変

化するワクワク感が生じる。受け止め方の妙を教えられた。

百歳の笑顔は今日も生まれて

真つ新の「おはよう」きみに差し上げる

「生まれたい」という表現に導かれて、百歳と新生児が無垢

の微笑みで繋がった。そんな作者と笑顔の百歳、そして春満タ

ンの句会作品達に、私も真つ新な「おはよう」を差し上げた。

ふりこ
寿之

洋次郎

万紗子

比呂志

富子

希久子

武彦

宏造

楓楽

眞理子

梅和夫

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

眞理子

をせぬ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

動物は可愛がられて我を消す
うわさ消え選挙に出たら再燃す
消しゴムで消せない父の鞭のあと
新しい出会いが過去を消していく
貧乏と戦はこの世から消えぬ
恥ずかしい消したい過去も私です
くるくると思いが変わり落ち着かぬ
くるくると嘘ばかりの女神さま
螺旋状にあなたの中に堕ちてゆく
くるくるとハンドル捌くいろは坂
七十億くるくる廻る星に住み
追いついて又追いかける針二つ
花丸でいっぱいにした野辺送り
くるくると巡る戦時の走馬灯
痛いの飛んで行ったと児の笑顔
もらつてもあげてもバラはトゲがある
国民の財布を国が切り刻む
失恋の痛みカイロで温つたためる

恭子 貴恵 紀美恵 石花菜 悦子 美恵子 紀の治 美ツ千 龍枝 幹啓 公恵 三津子 久芽代 玲坊 義人 芳光 みち子

痛くとも金のためなら我慢する
十八歳苦しまぎれの選挙権
喧嘩売りきつかけ作りしたい国
きつかけを掴みそこねて井の蛙
口論のきつかけ不意な言葉
きつかけを逃し彷徨八甲田
あざけりがきつかけトラが目を覚ます
きつかけはウインク二回釣り上げた
殺されるきつかけだった出会い系
きつかけを掴むと弾みだす絵筆
十七の私を変えた富士登山
翔べそうで翔べずきつかけさがしてる

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

則彦報

ノーベル賞晴れの舞台の燕尾服
さまざまな名句ばかりに悩む僕
ネクタイを緩めてこらん胡蝶蘭
とりえず生それからがアラカルト
逆縁の日からしんしん積る雪
デイサービスしっかり正装して出掛け
電池切れ積る話はそれきりに
百面相なのかも知れぬ子の寝顔
重装備登山に懸ける堅い意志
積る雪やがて命の水となり
正装し農事の日焼け気にしてる
積もる積もる歳の所為だという病
唇に棘を一本持つて
唇が乾く小さな隠しごと
ドレス着て花になりたいもう一度
草笛を吹く唇が嘘もつく

一呑 重虎 風来坊 慕情 井蛙 京子 則彦 花匠 美鈴 初枝 洋子 柳子 黙人 小とみ 隆樹

光熱費浮かせるためのプチ家出
太陽に僕の唇盗まれる
雑草だってドクダミだって咲けば花
死に様を選ぶ自由もある戦後
重すぎる積もる小銭の貯金箱
さまざま涙を拭いてくれた母
正装へ心も清め敬老会
カメレオンの舌に想い出が積もる
スーブラに眩く生きて逝きたし足袋洗う
あつたとなつて一隅照らす老い
愚かなり痛い思いをして悟る
不発弾抱えたまま冬こもり
車座になれば熱燗物申す

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

がんばらう自分の老いに挑戦す
挑戦を続けているよあまがえる
挑戦は誕生餅を負うてから
挑戦の始まる気配腕まくり
深呼吸チャレンジャーの輪の中で
極限に男の意地が立ち向かう
かじかんだ心にゆるり温いお茶
過疎の里あの銘茶の木どうしてる
茶道から日本の文化蘇る
和やかに一期一会の茶会席
ひと言がまだきり出せぬ茶をすする
新茶の香にんげんらしさと戻す
お茶お花できぬが高給取りの嫁
茶柱が立った未練はありません

汎美 比呂子 輝恵 幸子 千代美 昭紀 弘子 笹舟 一徳 規代 鬼焼 寛 敬子 蘭幸

介護進む程に工夫の芽が伸びる
水仙の芽吹き思い出うんと連れ
十三歳恋が芽生えた新学期
芽の起る音する深い森である
孫五人プランターには頼もしい芽
雪帽子母の牡丹の芽にふわり
親の敷くレールに乗って芽が出ない
スマホ見て話す言葉は響かない
定まらぬ日は愛猫を膝に抱く
桃が咲く男子ばかりの家ですが

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

慶子 榮恵子 宣之 笑子 半子 淑子 榮香子 歩美子 厚子 史子

結局は叫んでみても井戸の底
セールスマン口から先にながり込む
前向いて歩けばきつと花は咲く
合格を信じ新札取っておく
娘の祝言父も飲めない酒を飲み
大人のドアちよつと覗いた祝い酒
定年を祝うバラには棘がない
成人式新種の蝶が艶やかに
ピンピン論吉を入れる髪斗袋
陰ながら貴方を祝う日の出世
祝日に国旗揚げない民主主義
祝賀会主役はすでに寝てしま
新年を祝う集いは下戸ばかり
生かされて祝いの席に着く至福
年の瀬の生まれで祝い省かれる
三世代同居状態バラダイス
日溜まりにあった余生のバラダイス
バラダイス白紙のままの明日がある

寛子 富香 義雄 潤子 よしこ 純子 あき子 和子 倭子 みね 昇 日出男 悦子 絹子 幸子 弘子 菜摘子 幹子

天国に私の席がありますか
ほんとかな坊さんが説くバラダイス
バラダイスおばちゃん達の露天風呂
成人を言祝ぐ瓶の酒その他
仕舞い風呂こが私のバラダイス
温泉で手足伸ばしてバラダイス
天国はあるこの世にもあの世にも
お金では買えぬ心のバラダイス
ワイングラスの底にわたしのバラダイス
次々と抜ける句会のバラダイス
ぐんぐんと羽を伸ばしている独居
節穴を覗くとそこはバラダイス
支え合うふたりは今もバラダイス
メシフロネルこれはあなたの居るところ
バラダイスだった若いというだけで
宇宙旅行まだ見当たらぬバラダイス

富柳会(大阪) 関 よしみ報

その時にしがらみの糸切つて来た
火傷せぬところで親しくしています
真面目ですその時だけの顔もある
斜に構え登つてみた縄梯子
濾過すれば鬼も悪魔も人になる
斜に構え寂しい心かくしてる
生きたとは果せぬ夢を追いかける
終業ベル一番活気付く我が社
ガラガラと斜面転がる悔いの音
斜交いに転がり落ちて行く絆
その時になればわたくし差し上げる
ヒーローもヒロインもない蟻の列

美羽 久子 ひろ子 次根 昭枝 彦弘 敏照 章子 准一 起世子 みつ江 当代 保州 碧愿 義泰 文重 常男 登鶴子 正治 伸雄 信清 慶子 壽峰 高鷺 澄子

森山盛桜選

しんがりを守る無欲なお人柄
音無しの構えてゴキブリを狙う
温度差を感じる手のひらとこぶし
迷い子においでおいでと善と悪
つなぐ手がなくて石焼芋を買う
消去法残った色に決めました
平等に屋根のサイズは問わぬ月
適わぬとみて足もとへじゃれてくる
暇らしいあちこちで顔見かけます
どこまでが事実でどこがが神話

真澄 敏治 武人 千賀子 わこ 公子 穂夫 弘之 芳山

佳句地十選 (4月号から)

大内朝子選

真っ白に洗うと春が違ってくる
そろそろとじわじわ老いは真正直
介護して知つた介護のむつかしさ
本当の鬼は人間かも知れぬ
背開きをした手で写経するヒト科
さり気なく温さ感じる苦勞人
老骨を支える恥じらいのころころ
ひと言を添えると空気が丸くなる
残り火の余韻にひたる化粧箱
逆縁の切なさを知る寒の底

義昭 萌子 直樹 キヨミ のぶよし 篤 希久子 栄香 弘子 恵子

合掌は母より長く生きた恩

結婚記念日妻と命を温め合う

たんばよ君の強さをくれないか

内憂外患たつた一人に風が向く

列強を目指す三代目の愚か

人の字のどちらもお辞儀して謙虚

この次も走ろう靴を履き替えて

春うれし涙で悟る路のとう

冬耐えた土から花の笑い声

雲海に真面目な亡夫が待つてゐる

被災地の水一列を崩さない

瘡蓋が取れて若葉の風に乗る

計算も打算も逃げる北の宿

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目一粹報

愛と言う鍵で自閉の窓を開け

のめり込む背中合せの愛と憎

振り向いて欲しくて父の樹を揺する

孤独から逃げてお酒にのめり込む

輪の中にいたくて自説折りまげる

トライして射止めた妻の大イビキ

メスを持つ手がおじよんだら恐くなる

深追いはせずに逃してやる余裕

がらぐたに囲まれたのめり込んでゆく

本当の返事は心よい響き

山に惚れ山を枕の山ガール

のめり込む日と慎重な日の私

九条を変えて破滅へのめり込む

長生きを挑戦しますトライする

しくじりへおじよむ原発なせ止めぬ

取り敢えず選者トライをしてみる

朋子

仁

深雪

未知

武人

奏子

惠

晴美

寿之

アキ

欣之

よし

森子

洋々

一瑤

無限

房江

雅女

敏夫

みゆき

清信

地佳平

妻子

三千代

美佐枝

野蒜

勲章

とも

湖翔

住所氏名生年月日まだ言える

失言が無知かあげ足また取られ

深追いへ対話の扉閉ざすまい

川柳よ君を深追いしてしまう

三〇〇の底の大利にトライする

我が家にも天下分け目が二つ三つ

忘れると言う神さまの救いの手

東だに八回トライすねかじり

くどき落とすまで執念でトライする

怖いこと詐欺の深追い世を乱す

よく動く蟻を見ている無為無職

色の道免許皆伝程遠い

共和党トランプでババ引きそうだ

深追いはしない国旗も君が代も

しっぱの無いとかげ深追いムダでした

トライする意欲長生きする秘訣

愛燦燦黄泉でもひばり大スター

浮気されても好きだから深追いはせぬ

深追いに微笑む毘が待っていた

「おじよむ」はおじけづくの意

川柳塔なら

大久保眞澄報

結ばれた糸を切りたい春の風

縁結び神にも当り外れあり

結婚をしない若者未来地図

蝶結び自由に飛べと親ころ

若い時に買った苦勞が実を結ぶ

結ばれてよくもちました赤い糸

人生の最後笑つて結びたい

サバイバル宿敵とでも手を結ぶ

しつかりと結んだはずの赤い糸

節子

茶人

金祥

昌鼓

蟹郎

美恵子

回春子

振作

凱柳

茂登子

殺

主一郎

隆浩

賢悟

善平

秋月

高鷺

由美子

一粹

比呂志

恭昌

萌子

柁子

辰雄

崇明

奈津子

貫一

優

生きる意味やつと見つけた棺の中

やつとやつとしあわせですと露天風呂

傷だらけやつと私が見えてきた

痒いとこやつと互いの手が届く

累累の屍やつと停戦に

春告げる薔がなんとも愛おしい

愛された薔がいちもんめ未だ薔

志抱いた薔にある精気

アンビシヤススタート台にいる薔

散る花は薔の頃をなつかしむ

ハートブレイク薔は青いまま枯れる

開花日は薔同士の談合か

まだ薔未来に向けて胸をはる

悪性は薔のうちに切り落とす

そろそろとつばみ膨らむ反抗期

垂直の雨に打たれてまだ薔

君を引くまではクジ運とっておく

あんなにも上手く行くのかあさが来た

幸せな風を運んできた便り

運命の出逢いを結ぶ花時計

切取線の上で分かれた運不運

運が良かったこのガンおとなしい

幸運な姿で歩くイヤリング

幸運は無理でもツキはまだ呼べる

介護する体力残る夫婦運

もう一度鈴を鳴らそう運だめし

川柳塔すみよし(大阪)森松まつお報

濡れた手でつかんだ夢はすぐ零れ

濡れた手を前掛けて拭く亡母が居た

うまい話うかうかと乗る人の欲

順啓

妙

ダン吉

ふりこ

薫

和夫

柳弘

完次

成子

將文

良一

史郎

賛一郎

博一

甚之

成隆

眞澄

勝弘

富子

國治

恵美子

喜太郎

秋泉

倫

敬子

理恵

安代

福貴子

桃花

ピンボンの音に慌てる濡れた手で
旅気分入浴剤で別府行く

好きな風呂彼に洗つてもらつて
疲れたら風呂でハートをとめてる

湯上がりのあなたの姿艶やかに
終い風呂小さな悩みに泡で消し

知り過ぎた恋の湯加減露天風呂
酒風呂でおぼれ死ぬまでつかりたい

うちの風呂狭いけれども天国だ
いい湯だな明日へ活力沸いてくる

お風呂では禁止ですのよお洗濯
番台の親父目配り味がある

天国にカウントダウン花便り
凄いなア鯉はふるさと忘れない

スランプになれば入門書に戻る
原点に戻り二合の米を研ぐ

戻れぬと知りつつ眺む顔の皺
恋の季を終えてこっそり戻る猫

咲き誇る明日へどんな膨らむ芽
真夜中に春一番が戸を叩く

超える度どんな壁が高くなる
カーナビでどんな遠く目的地

二月堂今どんなと火の舞台
お金にも働かしませよゼロ金利

酔廻り花が咲き出す艶ばなし
どんなと押し寄す春のファンファレ

逢える日が減るほどの恋心
めぐる四季どんな老いが加速する

ドンドンと夜風がノックする夜寒
どんなと遠くなります母記憶

美世子

公平

廣子

芳香

舞蹴

満寿恵

柳弘

敏晴

日の出

シマ子

としお

大輔

由一

一歩

隆昭

南大阪川柳会

津守

柳伸報

逃げ足の速さを生かすドブ鼠
廃棄したカツ生かしたらあきまへん

残りもの生かす工夫はさすが妻
経験を生かし輝く二度の職

ライバルの変り身速い保身術
黒髪を保ち心に歳とらぬ

免許証保つ袋が色あせる
ええかげん崩れて欲しい北の国

手探りでその日の暮らしかだけ保つ
老いの肌何とか保つ化粧品

友情を保つ秘訣は義理人情
九条を保つ平和が危ぶまれ

品格を保つ静か城下町
ひと言をぐつとこらえて和を保つ

保護色で生きる男の酒の量
妖精も春着る服を試着室

妖精に見えたは少し酔うてたか
乙姫に見えた妻です二日酔い

妖精に囲まれいずれ天国に
癒される小人伝説コロポックル

妖精にまだ見えますか妻の顔
妖精が春一番を連れて来た

50キロ超えて妖精もう飛べぬ
論文のテーマ質問攻めに会う

幸せがみんなのテーマ世界中
ああ難民戦に使う金あらば

庭先に春のテーマが目白押し
最大のテーマ子に世話かけぬこと

郁夫

昌紀

祥篤

恭昌

柳石子

なきさ

勝弘

あさ子

忠昭

克己

たもつ

志華子

栄子

シマ子

ばっは

朝ドラのあさのけなげにエールする
トランプはどんなもんかと法王が

引き際の美学木枯らしのけなげ
ひたすらに新聞少年土を蹴る

柳伸

柳弘

朝子

福子

哲子

五月

ふりこ

欣之

北舟

葉子

泰夫

元一

弘文

あや子

和雄

柳伸

朝子

福子

哲子

五月

ふりこ

欣之

北舟

葉子

泰夫

元一

弘文

英旺

京都塔の会

山田 葉子報

本当はばらして欲しい内緒事
オアシスはスマホの中に求める子

足裏に貼った効き目のないサブリ
合性良い靴に恵まれ良く歩く

母さんは知らん顔してしっている
足音でキャッチいそいそ愛犬が

迫真の嘘が薄氷渡り切る
よくしゃべるきつと隠している何か

バレバレで楽に居られるのがいいな
書齋こそ我がオアシスと知る老後

ここのだけの話は既に知れ渡る
ちよつとだけばらした後で知らん顔

もう一人の私がばらした嘘
い日だったねとシャワーが話しかけ

我ながら声に聞き惚れ湯を浴びる
陽射し浴びうたた寝をする冬座敷

花道をライトを浴びて幕を引く
風呂浴びて一本つけて桃の花

雲行き見て逃げ足早い二男坊
追いかける蛇足の言葉も親の愛

梅林で逢つて来たのねいい香り
喋り過ぎオアシスの水涸れてきた

優先席占領してる長い足

はれたって誰も気にせぬ事だった
オアシスに心を浸すみずの詩
酷評を浴び人並に出た丸味
春の陽にわたしの素足ひかり出す
生返事聞いてないのがすぐバレる
見清 洋志 美龍 義昭 かずお

高知川柳社

小川てるみ報

手探りの希望の進路ハイタツチ
息子を通してバトンタツチの幕掃除
タツチされときめく人と嫌な人
アイドルヘタツチは禁止見て帰る
春風のタツチ薔が目を覚ます
審判も神様じゃないワンタツチ
哲史 圭二 陸宏 美香 てるみ 和広

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

虚しさは自信の欠如しからしむ
町会の予算の鍵は役員費
年寄りの自覚も湧いて来る傘寿
縁起など担がぬ若さ北まくら
華やかな服が春呼ぶウインドウ
四郎 實 蜂朗 高明 節子

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

老骨は手口八丁の娘ら頼り
大きな手家族四人を守った手
手拍子が幸せそうな母卒寿
母さんの手編み着て行く新人生
計るより手の感触のより確か
平成っ子ペンだこの手を不思議がる
思い切り投げよう所詮ブーメラン
いつだって直球勝負反抗期
勝 美智代 美佐子 信男 守啓 黒兎 久子 純子

投げ売りで競って買った半端物
投げ返す野次は真理を突いている
雛さんへ桃の小枝を投げ入れる
より高く塩放り投げ気合い入れ
いろいろな夢を見ている玩具箱
いろいろな人の出合いに日日豊か
いろいろと願いの絵馬に世相知る

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

しんみりとさせてくれない通夜客
語り部の口調につられしんみりと
幸せに近付きたくて走ってる
しんみりと話す言葉に騙された
青春は長谷川一夫風寛さん
歴史には不味い変化が織り込まれ
世論無視国が危険なまま走る
珍味だった体内走るのが早い
千の風宴会場で唄えない
この話今持ち出すと不味くなる
孤独死の友をしんみりお用い
罪ひとつ不味い話に乗せられる
川の水裏切るようによく走る
人情をからめしんみりさせる劇
時代劇じゃないがボクは太鼓持ち
右太衛門千恵蔵橋蔵錦之助
言い訳は問答無用と切り捨て
しんみりと身の上話聞いている
ミサイルに頼み不味い選択拉致の国
終わりのなき時代のドラマ演じ切る
母校消え過疎の町からクラス会

順子 郁子 春代 守啓 堅坊 桂子 長一

茶子報

綾子 ゆり子 文道 和子 すみれ 美ツ千 孔美子 弘子 実満 重忠 八重 蟹郎 盛桜 照彦 京 かのる 拓庵 咲和

武士道に忠臣蔵という話し
不味い嘘見抜けぬ程の恋でない
薄味でどうぞ大事な人だから

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

首ひねる何と読むのか子の名前
オレオレを信じる人のいる不思議
ベットボトル蓋開けられず老いを知る
クルクルと耳ひねる猫何を聞く
ひねつてもその一言でだいなしに
2億円頬をひねって夢が覚め
口出すが金出さないから信じない
信じてる大器晩成まだかいな
母の顔じつとみつめて乳を呑む
おひねりを首飾りしてドサ廻り
あれこれとひねつた句ほど没になる

川柳同好会みらい(鳥取)吉田 陽子報

一万歩ぐらいで老いは逃げ出さぬ
イクメンの不倫会見みぐるしい
冬晴れ間心苦しく昼寝する
趣味一途垣根はらって突っ走る
煩惱を包む風呂敷閉まらない
歯舞を読めなくなつた大臣だ
終活のガイドブックが急き立てる
億劫が病のように付き纏う
母さんと娘を呼んで子に返る
コタツの猫とテレビ依存症になる
輝いた頃の洋服捨てられず
どの部屋も唇を吊ってひとり住む

小鹿 恒子 茶子 薫報

陽子報

陽子 真帆 菜美 一聴 章子 美恵子 勢津子 百合子 和代 葵 信子

賑わいは今夜も続く婚祝い
姉弟が枕並べてAとB

ああ折り句園を手探り運にかけ

二合酒これで充分明日が有る

かつかせず一呼吸置く老練さ

仕舞ったらそれきり忘れ大探し

二月去り金剛山に霧水消え

一呼吸置いてやさしく論す母

庭に梅小鳥さえずり村に春

探査機が20億年前の星

ドリオドを打って出直す潔さ

人の欲刮け落として無垢になる

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

老いも若きも幸せ運ぶ災害地

当人は置いてけぼりで事運ぶ

愛を積み一気に進む帆掛け舟

足運びやつと実をつけ華になる

喜びを運んでくれる福の神

裏切り者へ山葵たっぷりハイどうぞ

からしには負けたくないという山葵

時どきは山葵を利かす父の激

結論に一寸山葵をきかせとく

油断して山葵たっぷり利かされる

無意識に言った言葉が喜ばれ

無意識に結んだ糸は赤だった

ひと言がほんわか光る花にする

ほんわかと過ぐす戦のない国で

ほんわかと芯はメラメラ炎えている

ほんわかなべールで地球包みたい

政夫

修

克三

正子

一彌

和代

悦夫

篤

五月

弘光

久美子

清乃

紀久子

紀子

保州

ほのか

弘子

寿子

まさみ

富美子

千代子

秀子

よしこ

京子

小雪

大輪

克子

日出男

ほんわかの暮らし娘の撒が飛ぶ

ほんわかな人には人が寄ってくる

ほんわかとした雰囲気を持つゆとり

ほんわかの君に惹かれてきた出会い

いい顔をしてる幸せなんです

川柳塔まつえ吟社(島根)相見

裏表不毛地帯でオレである

両面テープ仲持ちうまく結びつけ

表面には見栄裏には本音書いてある

清純な乙女心に夜叉が住む

両面のバランスとつて和解する

両面を面接官はあぶり出す

迫る両面心眼確と研ぎ澄ます

両面がちがう夫婦で仲がよい

葬列に少し薄めの化粧する

地球儀の日本列島小さいこと

難しい話列から逃げていく

武者行列胸のうずきを撫でて行く

一本の列がいつしか複線化

朗報のパイプ破れて届かない

朗報が来そぐだ梅もほころんで

朗報がひとつ飛び込む春動く

朗報は桜と共に咲く気配

お父ちゃんうれしい知らせ届けたよ

鈍感な私を通り過ぎる愛

愛してるなんて言うから生欠伸

愛愛愛いまは私がひとり占め

無器用な愛を信じてついて行く

炊き出しの塩おにぎりも愛である

和香

めぐみ

准一

徑子

知香

柳歩報

芳山

昌湖

昌枝

堂太

涼子

柳歩

左余

ちえこ

桂子

哲子

ひふみ

幸子

たけし

知恵子

美智子

ゆき

幸代

青帆

雪代

孝子

千里

博子

結婚は愛がなくても成立す

ローカルの存続署名愛ひとつ

教室がヒューヒュー飛んで出来る園

教室は今の流行すぐ分かる

教室を抜けてラララ歌が出る

マドンナの隣りの席は譲られぬ

僕が行く夜の教室酒道場

川柳大坂

山崎

もみじの手タントントンと肩たたき

聞き役の位置で鍋が見得を切る

つれそうた女房の鍋が口に合う

大ピンチうつらうつらと鍋の底

鍋の底ついで明日の気合入れ

鍋料理湯気にはつこり打ちとける

てっちりか蟹かでもめて豚になる

ピカピカの鍋老母さんの健康度

日本死ぬ飯面投げ捨て叫ぶ母

おつき合い派手になっていく飯面

腹の中異なる解釈基地和解

九条に飯面被せたのは誰だ

戦争は平和の飯面つけて来る

歯がゆいなあもつとスラスラ喋れんか

老いばれに三寒四温身にしみる

震災の復興はつぼつでは困る

老い支度動けるうちにばつばつと

手術後はばつばつ歩くこわごわや

沈丁花ばつばつ咲くよ春つれて

原発の隠蔽体質映像で

失言を叩かれ名前前広げてる

俊子

妙子

とも子

紗季

久絵

弘充

草庵

珠生報

珠生

柳弘

鉄心

万紗子

美花

堅坊

まつお

五月

美濃

弥生

かよこ

蕉甲

勝弘

照月

一歩

福貴子

和

美世子

司

紀雄

ハローワーク肩を叩いた課長居る
聖火台また叩かねば鈍なこと
本場の事を言ったら叩かれた
ボンと膝叩いて佳句がひとつ出来
あの叩き借金取りにちがいない
春風が桜の蕾ノックする

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

克己 朝子 芳香 鈴いさお 信醉 満知子

百歳をひそかに狙う万歩計
育毛剤に狙われてる僕の禿げ
衝突の素はお金が群を抜く
年金日孫は知ってきつと来る
衝突は覚悟意見は言うつもり
ともだちはネット心が風邪をひく
うつちゃりて衝突さける自信ある
遺産ゼロぶつかふ事は無いだろう
見て触る癖が許さぬネット買い
なんべんも衝突をして無二の友
広い海何で衝突するんだろ
ネットへの書き込み国へ直訴する
春の陽が届く窓辺で読書かな
懸命に生きて衝突ない夫婦
入口の広いネットにゃ異がある
ネット記事鬼のデスクはどこにいる
天地人狙って句作しています

はびきの市民川柳会(大阪) 永田 章司報

完司 重忠 一粋 雅女 圭一郎 一瑤 天翔 茶子 弘子 美恵子 蟹郎 たぬ 菖子 清帆 幸安 敏子 節子

子の嘘をまだ信じたい親の性
安倍さんの春が怪しくなっている
愛は気まぐれ昨日生まれ今日消える
美代子

古希も過ぎまだこれからと好奇心
やり残し有ってすんなりまだ逃げぬ
私色染めていきますとこまでも
澄んだ色で輝いている春の川
まだまだと生きたる葉を飲んで
蒨蒨に大根まだ味染みてない
ゴミ出しも愛だと夫は言うのです
愛があれば年の差なんて構わない
愛だと愛猫が居て忘れられ
日本の春がほらすぐそこにある
母恋し菜の花ちらすし作り
どの子にもほしい愛の手今すぐに
愛一途記憶の中の嫉妬心
五十年愛と憎とのくりかえし
兄の死をまだ受けられず母哀れ
買物に出掛けて五年妻いまだ
深すぎる愛がだんだん重くなる
まだまだとおだてに乗った口車
老春を楽しむでます存んでます
まだあるかもありません一銭も
今気付けピンタも徹も父の愛
言葉には出さないだけの夫婦愛

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

フジ 壽峰 千鶴子 雄太 ヨシ枝 みつこ ちづる アヤ子 洋一 敏 美喜 かつ美 ひろ介 登志子 喜久子 光男 泰子 安男 シルク いさお 章司

この陽気その気にさせてまどわせる
陽気にはしゃぎことう障子破る羽目
いつだって陽気な人だ顔の艶
健康は陽気な家にやって来る
苦しみは顔に出さずに陽気げに
久方の陽気に浮かれ掃除止め
玲子 龍枝 雄大 英子 由紀子 恭子

にんげんに耐える健気な星である
食いしばる健気な顔がふと崩れ
三歳が掃除もくもく皿洗い
うぐいすは健気一途に愛を告ぐ
健気さを少し残して子の巣立つ
無器用だが健気な介護する夫
意地を張り健気に生きる老い一人
国会は水掛論の権化なり
水掛けで焼いても消えぬ放射能
水掛け論姉と私は犬と猿
水掛け不動息苦しそう苔むして
水掛けた植物たちはよく育つ
墓に水掛けてわびてる親不孝
うなだれる窓辺の花に水をやる
視野少し広げて見ようハイヒール
三足のわらじを履いてはけ防止
孫達に絶対軍靴履かせない
孫の靴貰って万歩目指してる
高下駄は入れませんと百貨店
靴履いたベットの後を主が行く
健気にも腹は決まっている和解

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

完司 萩江 康子 宣子 瑞子 智恵子 次男 鬼一 紀美恵 けいこ 泰輔 祐子 日出子 石花菜 重露 風露 茂夫 照彦

松明が燃えて春呼ぶお水取り
開けゴマ楽しい事が待っている
卒寿過ぎ移動は手すり横歩き
やすやすと騙されまいと電話口
宿題をすぐ終え次に取りかかる
いい奴だが横に座れば酒くさい
肩がこる箸でいただくフルコース
キヨミ 和子 修平 晶子 紀乃 花門 つな子

横へ来てこんな話を知つてゐるか
 やすやすと見せられません腹の底
 やすやすと百歳ですと言う笑顔
 自分のこと三割増になる評価
 第二ボタンはずして春をかつ歩する
 古稀迎え増々パワー全開だ
 やすやすとタマされてはお金もち
 見ると聞くには温度差がありすぎる
 入り婿で随分苦勞身に染みる
 まだシラフ横道それぬ間に決める
 横文字は使うな意味が解らない
 ごはんないつでも食べにおかえりよ
 無口だが横に見守る友がいる
 横道へ逸れた男のニヒリズム
 三分の二とればきつと横車
 総活躍何をするのとお年寄
 一年で随分老けたみたいです
 うまいめし妻が留守でもチンで済む
 哲学書開くと睨閉じてくる
 横恋慕して手に入れた今の妻
 いい月夜ずっと一緒に見る夕日
 新人のパワー扉を押し開く
 母の味舌が覚えている宝
 いつの日か笑い話にする苦勞
 心眼を開いて春の真ん中へ

川柳ささやま(兵庫)

北澤

稠民報

耕 治 幸 香 純 初 音 雪 菜 楓 華 洋 子 美 龍 柳 明 健 二 茂 ひとみ 比ろ志 歌留多 正 和 見 清 哲 男 祐 康 宏 造 紀 恵 美 也 靖 鬼 り こ 千 賀 子 ヨシエ かほる 哲 男 稠 民

葱提げて帰るひとりの夕支度
 なごやかな暮しでないか鬼は外
 夢抱いて今日一日を余生生く
 人並みに老老介護山ひとつ
 しゃんと聞け三代継いだ塩かげん
 要素剤無用へ無事故願うのみ
 独り居は自分のミスで苦笑する
 うっかりと本音もらした浅はかさ

城北川柳会(大阪)

近藤

真 由 多 美 子 開 子 可 住 幸 子 照 代 美 智 子 正 報 堅 坊 朝 子 野 鶴 美 智 子 麗 志 華 子 義 昭 節 子 公 子 美 北 舟 洋 志 千 恵 子 星 雨 たもつ 集 一 一 歩 英 男 和 夫

町内会六十代は青二十
 青春の涙は海へバカヤロー
 まつり事省いてならぬ民の声
 愛されていると気付いた青い鳥
 渡り鳥北に帰る日迷つてゐる
 草餅を頬ばり春の香り嗅ぐ
 すてきたねネコもはめられポーズ取る
 鳥の音に深い眠りを破られる
 奔放に空飛ぶ鳥に憧れる
 うと手間を省かないからプロの味
 ひぐいすの声競い合い人癒す
 冬脱いでスキップしている春帽子
 年金が減る都度一品省かれる
 焦つたらロクなことない落ち着こう
 検診が無事に終つて春迎え

あかつき川柳会(大阪) 山本

昌代報

榮 子 克 己 武 彦 柳 弘 縣 侘 あさ子 杵 香 満 作 高 志 直 樹 弘 委 智 郁 夫 勝 弘 和 堅 坊 秀 夫 隆 昭 英 夫 和 雄 忠 昭 福 貴 子 康 信 惠 美 子 たもつ 侑 子 義 泰 子 寿 子

義理欠いた人とはったり交差点
偶然が仕組まれていた点と線
先斗町でおい袋とすれちがう
一粒の涙で知っている本音
啓蟄の日から虫歯が痛み出し
雨なんか降るから君が好きになる
いくたびの北の暴挙に拉致なみだ
涙した数が優しい顔にする
神さまが女の武器にした涙
おかしく笑い転げている涙
慟哭の涙溢れる大惨事
嫁ぐ娘の涙を注ぐ宵の酒
野党協力もつと長生きしたくなる
生きている私は五つ歳をとり
早寝早起き九十の坂を越えました
お断りして別の場で鉢合わせ
相席にテロルの臭いする男
絶滅の危機におびえる温暖化
党名が何だしかりける野党
子育て支援 妊婦に2票与えよう
3・11 慰ぶこころは涙色
復興が先だ 原発言うでない

六甲川柳会(兵庫)

市坪

武臣報

千代 久乃 廣子 哲男 真理子 克己 栄子 茂子 朝子 壽峰 信二 鈍甲 茶助 シマ子 穩夫 愿 浩子 紅絵 久美子 満知子 久美子 武彦 和子 夏子 盛夫 弘 忠貞

一番に春のけはいと知る目鼻
頑固さで生きているけど慕われて
行列の長さが店に客を呼び
祝宴の長い話に酔いもさめ
金星を連ねた孫の目が光る
招かれて安らぎ今日も用意され
長い縁悲喜こももでも五十年
雪どけ水小川で春を奏でる
ひとりだと長く感じるカレンダー
真心でたった一言「ありがとう」
長いものに逆らいながら筋とおす
長いものに巻かれ私を見失う
鼻歌が古くなるほど上機嫌
スロライフ角煮とろとろ夫を待つ
金の入歯高いと口が受つけず
領いて誤解招いた遠い耳
天国に空席あると招待状
沈黙は金とこの場合は押し黙る

岸和田川柳会(大阪)

佐藤

幸子報

道子 洋一 浩司 弘子 繁義 正彦 芳江 史 利子 文香 じろう 洋次郎 和宏 照子 和郎 美恵子 千賀子 光久 昭 香代 一子 勝彦 和美 清 喜代志 幸子 信二 笑司

火の鳥を見た日こころは桃の花
原点に謎を解く鍵落ちている
原点の社訓忘れた社の不正
マイベース貫き通し平社員
原点に戻ると夢が溢れてた
原点は何だ私に問うてみる
ノリノリで行こうよ晴れる日は近い
春画展見てきましたよ春です
下げなくちゃこのベースだとすばてる
経済の晴れ間が見えぬこの地球
疑いが晴れても残る蟻り
誉められてうきうきこそばゆい背中
詩心の原点にあるときめきが
縄とびに入って行けぬ出て行けぬ
飲み込みの遅い職人ほど育つ
原点はあなたに興味もったこと
あの人が僕の句知ってくれていた
操子師の心満つ句が道標

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

大輔 隆昭 忠太 珠子 ダン吉 信子 英夫 弘子 ひろ子 ふさゑ 益男 みつ江 穩夫 康信 義泰 律雄 房子 義子 久二雄 昌紀 光久 たもつ 美智代 扶美代 千代 蕉子

気を突かれ咄嗟に濁す言葉尻
溺愛が重くて枯れるチューリップ
濁り酒人は見た目ではないよ
濁り酒人生の味そのままに
濁ったり白の振りして生きている
清濁を併せて飲んで丸くいる

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

美 麗
智恵子
希久子
みつ子
いわゑ
楓 楽

天変地異これは地球の慟哭か
予防注射ひとり泣いたらみんな泣く
時時は泣いて心を浄化する
泣けるだけお泣きと亡母の星光る
本命のチョコにお返し届かない
空振りもあって楽しい草野球
空振りに終る安堵の避難指示
しあわせに付帯事項など要らぬ
床屋さん安倍が安倍がと呼び捨てに
計報一抱いて涙が止まらない
婚活に空振り三回でアウト
食偽装看板泣いている老舗
妻にまだ居座っている低気圧
戸惑って決めてもらった雑魚の席
鎮座する仏の顔に癒される
明日からは座席ない派遣先
てっぺんに父さんが居たこわかった
家族の和大事大事に今日も晴れ
悩んだら知恵が出てくる大家族
茶の間から笑いが消える母の留守
うちの鍋から大へまた小へ
笑いありきしくするも家族です

盛 夫
茂 子
千賀子
武 彦
利 子
宣 子
弘 子
一 徳
わ こ
り こ
恭 子
哲 男
順 子
じろう
洋次郎
ひとみ
みつ子
忠 子
光 子
美津子
みよし

これが家族泣いて笑って抱きしめる
ほのぼのと家族が揃う今の幸
家族とは何山頭火放哉よ
レクイエム二万の霊に家族あり
気兼ね無い家族ぐるみの両隣
家族会相統緒み皆暮然
ちっけな自慢家族の和が温い
がっちりスクラムを組む家族会
フアッションブルなバンあれこれ平和です

単細胞胸を唯一味方にして生きる
恋しては空ぶりはかりして独り
ご老体譲り甲斐なしスマホする
蹴り負けてりオの切符が空振りに
川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

陽だまりの猫の欠伸が春告げる
沈んでも陽はまた昇り朝がくる
陰と陽合えば幸福合い難し
陽光がまぶしすぎます雨が
太陽に恋して首が傾いた
植木鉢にも春の陽射しの馳走あげ
陰と陽夫婦の歴史刻みつづ
太陽の下で少年殻を脱ぐ
金環食月がごめんを通り過ぎ
陽が昇るそして菜の花匂い出す
天と地をつなぎ出雲の大杜
生真面目ばかり直線画く定規
直線が微妙に揺れる気の迷い
直線コース競う選手に汗光る
直線は下手お絵かきはうまい孫

紀 華
武 臣
秋 果
勝 弘
キヨミ
浩 司
文 香
千 代
千 代
義 子
比 志
靖 夫
邦 男
いさお
キキ
絹 子
光 男
武 人
シルク
育 代
弥 生
信 二
瑠美子
みつこ
美代子
扶美代
雅 枝
ヨシ枝

直線の交わることを教えたい
直線を辿れば見えてくる明日
金曜日何故か帰って来ない靴
ドロインと遊泳出来る羽根探す
ドロインを飛ばすことさえ許せぬが
ドロインでも捜せぬ内の恋の猫
ドロインよキミは平和の使者であれ
曲者はドロイン私は竹とんぼ

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

偏差値の明日へ踏み出すランドセル
人の道外すも許す薔薇の花
お手柄をたまたまと言うオブラート
呱呱の声みんな白地図持ちながら
称赞の陰に密かにある妬心
ランドセル夢一杯の春の風
団欒の声が組み出す春の窓
鉛筆のころが組み出す春を進め
結果みてたまたまですと白を切り
笑顔響かせてゆくランドセル
ランドセル桜ちらりと乗せて行く
幼子がスカートクルリ可愛らし
無傷では退職できぬと覚悟する
いつの間に夫婦そろって高齢者
時々酸素足りなくなると二人
たまに逢う人ではすまぬ仲となり
親の歳越えて感謝の桜餅
宅急便はどくと春の陽の匂い
天地人感謝の祈り八十路すぎ
たまたまをチャンスに変えた父の汗
落とされた尻尾を悔やんでいる切り絵

高 鷲
壽 峰
喜代子
絹 枝
雄 太
婦美枝
一 歩
六 点
仁 高
博 一
弘 一
壽 峰
欣 之
弘 委
一 志
高 志
尚 世
重 成
博 泉
薫 甲
麗 西
ルイ子
博 博
かすみ

ラストダンスはまたま空いていた二人

健康に感謝しながら句座に居る

偶然に藁一本の助け舟

回転は鈍いが耐える力あり

いかなごを貰って配って回してる

ハイヒールの闊歩男に負けてない

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

老人を安全に導く交差点

導いて下さった人今いづこ

知らぬ間に人生行路導かれ

成る程と導く法話聞いてます

歯磨きを導くママの優しい手

三代代教えられたり教えたり

子育てに導くことのむずかしさ

導いてくれる人あり里は良し

八尾市民柳会(大阪) 土田 欣之報

口笛はいつも相図の犬と猫

本音と立前和解と再稼働

よれよれの襟で正論押し通す

ばたん鍋ししはこれから天国へ

そつと抱いてそつと捨てよう古日記

よれよれの中味は自負の一二羅

惜しみない笑顔は君の宝物

湯上がりに一喜一憂する秤

迷わずにここで咲くしかないわたし

シャボン玉ちゃんと割れて親ばなれ

三日月の腹をベッドにして眠る

ハグをしたとたんに君に逃げられた

ブラウスのボタン弾けて春発芽

友情を測れば恋の至近距離

豊中もくせい川柳会(大阪藤井 則彦報

ものごころつけば世間の狭き門

新学期つもった灘を初期化して

一ミリの窓の隙間て風邪をひき

世間並みの暮らしへ汗を光らせる

年輪に溜まる英知の深い味

花粉症忘れて花の匂いかぐ

仏も鬼も混じる世間で生きている

ごきぶりをたかが虫とは思わない

忘れなさいと世間気楽に慰める

何とでも言えるじゃないか外野席

琴バウア耐えているよね期待の目

常識を外して思案バズル解け

たかがしがらみされどしがらみ断ち切れず

親よりも世間に育ち育てられ

副作用心も痛む治療薬

水溫も小さな嘘は咎めない

退屈なときはど溜まる疲労感

たかが百歳縄文杉は笑ってる

年寄の一通見ているカレンダー

ゆずるべき道と心得立ち止まる

規格外の意見もあって活気づく

メールならゴメンも言える愛してる

外野席勝手なことを言うておく

若者もとかく気にする世間体

たかが花一輪それが力呉れ

決断すると明るくなる明日

内外野どこでも守り生き残る

たかが球プロが極める変化球

幸せ過ぎて目尻に溜まる笑い皺

言う人は言わしておこう僕は僕

同じとこぐるぐるこの世を生きる幅

川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報

あせるな転ぶな句会が待っている

国訛聞いて嬉しい道の駅

嬉しくてぶらんこ揺らし仰ぐ天

みちのくの五年の春に笑みが見え

やつぱりね種も仕掛けもありました

何もかも夫優先しやうの種

誘惑の種蒔き散らし妻帯者

露天湯に話の種も茹で上がり

宗教が火種の戦火喚く神

幸せの種をまきますその笑顔

雑草の土を選ばぬ逞しさ

欲待と見るスリッパの履き心地

スリッパを子犬と孫が奪い合う

履き慣れたスリッパ妻というかたち

薄いスリッパに初診料を払う

スリッパは妻のが先に寿命来る

さくらさくら何時しか母の命を

うさぎ追う故郷は放射の山となり

追いかけてすがりつかぬと決めた恋

追うも良し追われるも良し恋いろは

装った過去は追うまい大地踏む

何時嘘がばれるか胸がときどきで

朝ドラの次はどうなる知りたがる

格安ツアー眠そな顔の運転手

健二

公子

嘉子

求芽

順子

ヨシエ

野蕉

正和

祐康

美智子

宣昭

俊とみ

ひとみ

修平

雄太郎

彰

耕治

隆

淑子

哲夫

晶子

美龍

恭子

光久

健彦

好文

廣子

どきどきを祖母のまじないして出掛け
お達者な恋病とはあほらしい
初鳴きは少し控え目そつと鳴く
年輪を重ねた母の座り胼胝
クラス会久々出れば物故欄
句の仲間飲む楽しみがついてくる
お嬢さま脚はしびれていませんか
浪花にも春を呼べるか琴パウアー
後期でもみんな集えば花の園
冬眠のためぬ蛙が掘り出され

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

礼節を知るほど衣食足りもせず
おもてなしたつぶりお金かかりそう
若者のマナーで席を譲られる
お札の電話かけても留守で気にかかる
七十五我が身も汚染進んでる
目に見えぬ汚染が怖い放射能
汚染より風評こわい放射能
原発の汚染の恐ろしさを知らな過ぎ
無菌室で呼吸苦しくなってくる
震災五年ふる里汚染されたまま
春風が汚染の空気北京から
終の住処探す途中逝きました
小遣いももらえば孫の用はすむ
排ガスから逃げて花粉の町に住む
でかい地球その一点に我が住み家
ごめんねと言えばすむことすまぬこと
めだか棲む溝でひと息土踏まず
金婚がすむまで生きた几帳面
三世代肩寄せ合つて丸く住む

千津子 眞澄 日の出 敬子 蕉子 公平 善之 理恵 恭昌 浩夢 舞花 紀子 良子 楓子 和夫 千歩 集一

住むのなら子育て田舎老い都会
靴脱いで春の足音かみしめる
励ましのひと言杖にして生きる
雲の色冬と春とを往き來する
参考のためには聞くがすぐ忘れ
合格のメール一氣に春になる
住めば都御近所みんなやさしくて
いつから来たなつかしい道過疎すすむ
蕾から光の春へ開花する
今頃は何してるやろ過疎の母

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

結論の出せない人がよく喋る
言えは角いわねば虫が治まらず
暖簾がふらりいつもの顔覗く
墓参り愚痴を言わずに墓を撫で
逆らわず納得もせず浮いている
長風呂は息してるかと覗かれる
着ぶくれた物を脱ぎ捨て春とする
彼岸ですよ彼岸ですよとお寺さん
人間のこと考えてない自然
被災地の心に花はまだ咲かぬ
ドキュメント原発現場の苦悩知る
外堀をしっかりと埋めて酒を飲む
私からわたしたちを抜けば楽になる
ふらり出てふらつと戻る居候
琴奨菊に箸と茶碗を止めたまま
お仕事がどんどん増える自衛隊
プロ野球そつとめくれば金クスリ
丸坊主にされた庭木が伸びをする
毎日が日曜なのに忙しい

すみ子 捷也 照子 弘義 富子 希久子 満作 志華子 芳光 美恵子 紀の治 大鯨 くにこ 照彦 楓花 石花菜 正人 規雄 章子 美青 美ツ千 雄大 蟹郎 野蒜 幹啓 風露 幸子

遅れている時計もあつてはつとする
生きていることはそれだけでも凄
凡人に豹変されて苦笑い
ひな飾る余裕もなくて医者通い
重ね着を一枚剥ぐと花が咲く
古い独りどんだ増える独り言
羅針盤壊れて風に揺れている

きやらぼく川柳会(鳥取) 成田 雨寄報

孫の背が遙かに越して見上げ見る
初詣だれにも会わず帯を解く
小倉山みごとに咲いたつじかな
くるくると回る鯨にも春を見る
足踏んだ踏まぬで揉めた呑み仲間
温い日だ掃除をしよう今日冬至
あちこちのパワー集めて点火する
メインバー私と共に終演に
凍てる日もあるけど熱いペンケース
春の雪ひとひら降って消えてゆく
申歳の大台迎え八十路越す
節約も経済消費効果ない
夜行列車生まれ変わったよう降りる
おかしき趣味の楽しみ持つ様に
ほかまいぞモラルがゆらり飛んで行く
身元調べ過ぎた話が実らない
減税でエンゲル係数下げたいな
爺さまと薪泣かせてるオール電化
掌中の珠も恋して弾くピアノ
ぼちぼちと介護の日々よ干している
コハクチョウ里心つきはや帰行
恵方巻三つに切つてやっこさ

けいこ 正男 道唱 鈴野 久子 重忠 完司 雨奇 かね子 幹啓 紀の治 桐子 恵子 多美子 千代 登実枝 初枝 治代 日枝子 ひろこ ひろし 宏之 美草 美佐子 瑞枝 美智子 美穂 ゆき

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 打 吹	14日(土) 14時締切 弾・誘う・バラバラ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川 柳 ねやがわ	15日(日) 13時締切 謝る・捨て身・出口・自由吟	産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	15日(日) 14時締切 相子・ちらちら	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	16日(月) 13時45分締切 距離・隠す・やさしい・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ン だ	17日(火) 13時30分締切 おまけ・アイドル・踊る うかうか・自由吟	キッピーモール 6階 (JR三田駅前) 「まちづくり協働センター」内のホール 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 たちばな	18日(水) 14時締切 印象吟・服(互選)・自由吟	立花公民館 (尼崎市塚口町3-39-7) 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸 和 田 川 柳 会	21日(土) 12時30分開場 縁起・似合う・密かに・モラル	岸和田市立福祉総合センター 南海電車岸和田駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9-7-818 藤井康信
川 柳 塔 みちのく	21日(土) 17時締切 慕う・びたびた・おもちゃ	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」1F 0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 1F 0172-36-8605
はびきの 市 民 川 柳 会	22日(日) 14時締切 違反・菌・ロマン	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	22日(日) 13時30分開場 地団駄・ピンセット・呆気ない	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	23日(月) 18時開場 本物・教える・清い・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川 柳 塔 すみよし	28日(土) 14時15分締切 解説・めずらしい・バタバタ	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂燕子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳	28日(土) 12時30分開場 歌・平気・浮く	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
京 都 塔 の 会	30日(月) 14時締切 ツアー・きっぱり・隠	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修堂70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	5 日(木) 14時締切 進む・やがて・再	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城 北 川 柳 会	7 日(土) 14時締切 巡る・群れ・やんわり・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富 柳 会	7 日(土) 14時10分締切 想・ダイレクト・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7 日(土) 14時締切 ふっくら・空しい・利子	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	7 日(土) 13時30分締切 多い・記憶・消す・国	松江市 雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
八尾市民 川 柳 会	8 日(日) 14時締切 曲者・こっそり・凝らす・雑詠	八尾市渋川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩 5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8 日(日) 14時10分締切 兼 題 = 方言・心配・くねくね 課題吟 = 近	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 泉原道夫
西宮北口 川 柳 会	9 日(月) 14時締切 個人・回す・しゃしゃり出る 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川 柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 撫でる・月・すっきり・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200 m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
ほ た る 川 柳 同 好 会	10日(火) 13時30分締切 豆・許す・(折句) さ・い・ふ	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川 柳 会	13日(金) 14時締切 疲れる・鳥・空気・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 さ か い	13日(金) 13時開場 喋る・虫・けやき(折句)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	14日(土) 14時締切 忠実・ポスト・示す	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生

柳界展望

新同人紹介

坂^{さか}本^{もと}加^か代^よ
— 蘭幸・完司推薦

★平成二十七年第四回
「あきあじ賞」受賞

小沢 淳

蛇行してやつと男の川
となる

★川柳阪南創立30周年記
念川柳大会。同人秀句。

澤井 敏治
拳あげ今叫ばねばいつ
叫ぶ

森村 美花

買物が好きですと白
い歯で

★第4回卑弥呼の里誌上
川柳大会は543名参
加。同人成績。

特選 原田すみ子
 positioningに家族静かに潮
満ちる

特選 谷口 義
朝になつたらじんべえ
鮫も起きてくる

★第2回「ふるさと川柳」
誌上大会は参加者581
名。同人成績。

妻谷重風さん（同人・寝
屋川市）は平成28年2月

告②ホームページにおけ

最優秀秀句 石橋 芳山
雪らしくしなさい足を
閉じなさい

秀句 牧野芳光
雪国の桜は歌うように
咲く

☆川柳雑誌「風」（佐藤
美文主宰）百号記念誌に
新家完司・高瀬霜石・木
本朱夏諸氏が寄稿した。

▽出版版△
○木本朱夏監修「ことは
の国の猫たち」A6判
114頁。あざみエー
ジェント発行。千円＋税。

有栖川有栖氏のエッセ
イ、平本勝彦氏のイラスト
初め、猫川柳、写真が
満載のアンソロジー。

▼計報▲
妻谷重風さん（同人・寝
屋川市）は平成28年2月

告②ホームページにおけ

鳥取市 野島 綾子
紹介者 森山 盛桜

倉吉市 宮田 風路
紹介者 倉吉市 田中けいこ

倉吉市 倉吉市 田中けいこ
紹介者 倉吉市 田中けいこ

倉吉市 倉吉市 田中けいこ
紹介者 倉吉市 田中けいこ

倉吉市 倉吉市 田中けいこ
紹介者 倉吉市 田中けいこ

中原諷人追悼誌上大会

課題と選者（課題と選者・共選）

「実」 森中恵美子・恒弘 衛山・新家 完司
「踊る」 辻 晩穂・木本 朱夏・長浜 美籠
「薨」 小島 蘭幸・永石 珠子・八木 千代

投句用紙 規定用紙による（コピー可）
投句料 1000円
（定額小為替・切手不可・大会誌・遺句集呈）

投句締切 6月30日 消印有効
投句先 68910405

※ 鳥取市鹿野町鹿野1279 中原みさ子宛
各選者「天」の句に粗品を用意しています。

主 催 川柳塔鹿野みか月
協力 川柳塔おきなわ準備室

るウエブ句会の立ち上げ 事項。
③塔誌印刷費について④ 次回＝5月6日（金）AM10時
定例確認事項⑤各部報告

第35年度 夜市川柳 課題と選者

回	題	選者	出句締切
第1回	シグナル	新家 完司	6月20日
第2回	割る	鈴木 公弘	7月20日
第3回	抜く	三宅 保州	8月20日
第4回	野暮	北野 哲男	9月20日
第5回	折れる	池 森子	10月20日
第6回	さっぱり	たむらあきこ	11月20日
第7回	紛れる	岩田 明子	12月20日
第8回	劇	零石 隆子	1月20日
第9回	紅	木本 朱夏	2月20日
第10回	毒	高瀬 霜石	3月20日
第11回	酒	小島 蘭幸	4月20日

（注）第35年度のみ11回です。

ハガキに3句（投句料 1年分 3,000円）
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2丁16-3
河内 天笑 宛

第22回 川柳塔まつり

と き 平成28年10月1日(土)

開場：午前11時 出句締切：正午 開会：午後1時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 (近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成27年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成28年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「老いを詠む」

川柳塔社 木本朱夏氏

兼題 「芸」

奈良居谷真理子選

「マニア」

島根竹治ちかし選

「うっかり」

和歌山三宅保州選

「届く」

大阪山本希久子選

「ぶらり」

鳥取新家完司選

事前投句「みどり」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正午(午後5時頃終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会費 2,000円(当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎呈 記念品

《懇親宴》

と き 平成28年10月1日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウィーナ大阪 3階 葛城の間

☆会費 7,000円(会席料理) 先着申込み 130名様

☆宿泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて9月1日(木)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201

〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490

振替 00980-4-298479

編集後記

★風薫る キュービーは
どの裸はなし 薫風

★「第四回誌上大会」発
表号をお届けする。

全国的に誌上大会流行
りであるが参加者639
名。参加者の数を競うよ
りも作品の質の高さを評
価して頂きたい。参加し
てこそ本誌を読む楽しさ
も倍加する。今回不参加
だった方も来年度は是非
ご参加くださいますよう
に。

★4月6日、一風変わっ
た入学式が行われた。二
〇一六年四月開校のN高
等学校は「スマートフォ
ンを軸とした通信教育を
ベースに生徒それぞれが
強化したい課目を自由に
選択できるのが特徴」。

★ITをフル活用 授業
の選択肢の多さ、ネット
で単位がとれるなどを
謳っている。因みに授業

料は三年間で三〇万円。

入学式の様子は、沖縄の
うるま市にある同高校舎
と東京都内の会場をリア
ルタイムで繋ぎ、全国に
配信された。ネット社会
もついに新しい教育の形
を生み出したことになる。

★時代を反映して川柳塔
にもウェブ句会ができ
た。詳しくは川柳塔のHP
を開いて頂きたい。先
ごろ同人となられた沖縄
県在住の森山文切さんが
お世話をしてくださる。
文切さんは三〇代。川柳
塔に新しい風を送ってく
ださるだろう。皆さんの
ご参加をお待ちしている。

★先ごろ世界で一番貧
しい大統領と呼ばれる
ウルグアイのホセ・ム
ヒカ前大統領が来日し
た。収入の大半は寄付、
質素な暮らしをされて
いるが、その理由は？
「私がしたい時間が増
え、それが自由」だけ

ひとこと

不思議な現象

4月2日のNHK土曜の朝のラ
ジオ「著者に聞きたい本の壺」は、
東北学院大学・金菱清教授の「呼
び覚まされる霊性の震災学」(新
曜社)の紹介だった。それは学生
たちの書いた卒業論文の「心霊現
象」を纏めたものだった。3・11
の震災後、タクシートの運転手さん
がお客さんを乗せ「どちらまでで
すか」と訊ね、振り返ったらお客

は消えていたこと等が綴られてい
る。幽霊を乗せたのではないと運
転手さんは仰る。単純に心霊現象
として片付けられない不思議な現
象である。
私も32年前突然夫を亡くした
時、夜中にコトコトと階段を上っ
て来る夫の足音を何回か聞いてい
た。そういう体験をされた方は多
いと思う。ぜひその本を手にとっ
てみたいと思う。(松本 文子)

ら。車はボロボロのフォ
ルクスワーゲン・ビー
トル。時価一八万円。か
なりのレアものである。

★アラブの富豪が百万ド
ルで買いたいとの申し出
にも「ノー」。車は友人
から贈られたもので「想
い出を売るわけにはゆか
ぬ」と・・・世界で一

番貧しいどころか、一番
豊かで幸せではないか。
思わず我が身を顧みたこ
とである。

○S新聞に「夜の鶴」と
いう言葉を見た。寒い夜、

ツルは自分の翼で子を温
めてやること、ツルは抱
卵が始まると、オスとメ
スが協力しあって、約
一ヶ月間休みなく温め続
ける。孵化直前には、親
鳥の鳴き声にに対し卵の中
からビイビイと鳴き声が
返ってくるという。

○「夜の鶴」の前には、「焼
野の雉」という言葉がつ
く。果のある野が焼かれ
ると、雉は身の危険を忘
れ火に入つて子を救うと
言われている。

所が対応した児童虐待の
件数は、約8万9千件に
上る。生後8ヶ月の男児
の衰弱死、満足に食事を
与えず、風呂にも入れず
オムツも替えてない。育
児放棄も虐待である。パ
チンコに行くため、6歳
男児を裸にし、浴室に閉
じ込める。母親と交際相
手による執拗な虐待によ
る3歳女児の死。数え上
げれば切りがない。親が
子を守らなくて誰が守る
のか・・・(まつお)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)」

地名

市都
道府
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限りまゝ。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

紙 用 句 投 抄 様 檸

「おそらく」(5月15日締切)

7月号発表

選 一 強 浦 三 — 選 共 — 選 籠 美 浜 長

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

☐ ☐	紹介者	電話	住所	氏名
			〒 —	
年 年 月 月 から から 一 半 年 年		 		

5000円
9800円

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

個人用

暑中見舞広告 原稿台紙

きりとらせん

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

5月20日締切

川柳など掲載希望事項

電 話	住 所	姓・雅号
() () 	〒 ----- 	

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社

作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 川上大輪選
愛染帖 (2句) 新家完司選
檸檬抄「おそろく」 (2句) 三浦強一選
長浜美籠共選
インスピレーション・ナビ (2句) 大西泰世選
一路集「追う」 坂本蜂朗選
「とほける」 岸本孝子選
初歩教室「夢中」 (3句) 山口光久担当

8月号

檸檬抄「ゴール」
一路集「備える」「数」
初歩教室「チャンス」

本社5月句会

とき 5月6日(金) 13時開場・13時40分締切
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「塔誌が出来るまで」
兼題「胸」
森松まつお選
大久保真澄選
足立茂選
岩佐ダン吉選
笹倉良一選
小島蘭幸選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

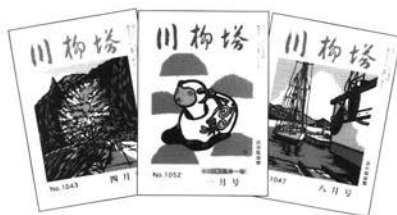
本社6月句会

7日(火) 午後1時から
兼題「どっち」「脈」「曲がる」
「ヒット」「堂々」

第34年度 夜市川柳募集

最終回「嘘」 小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料86円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一六年(平成二十八年)五月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六六七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇四一四九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス

<http://www.senryutou.com/>

オニザキのプレミアムロースト

つばなま

杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>